

---

# ArmordCore4 レイヴン・オブ・アナトリア

石田 昌行

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ArmordCore4 レイヴン・オブ・アナトリア

### 【Nコード】

N1567Z

### 【作者名】

石田 昌行

### 【あらすじ】

パックス・エコノミカ。

「国家解体戦争」から始まる「企業」による全体管理。限りある資源の、節度ある再分配。

賢明な経済主体たる「企業」が、資源と市場を独占し、人々はコロニーに押し込まれ、糧食を得るためだけの労働に従事していた。

第一人者の死と盗まれた技術。

彼女が救ったあの男、伝説的なレイヴンと技術研究用のネクスト機体。

唯一の商品であった専門性を失い、深刻な経済危機にあったコロニー・アナトリアにとって、生活の糧としての傭兵は必然的な結論だった。

私は、あの男を利用し……そのために彼女を利用した。古い戦士、政治的な利用価値しかない非力なネクスト。この時はまだ、誰もがそう思っていた……私を含めて。

アーマードコアファンサイト「レイヴンズ・ウッド」との重複投稿ですが、近日中にあちらの投稿は削除します。

## 序章

閃光が走った。

搭乗者の絶叫と共に中隊三番機が橙色の火球と化す。

超高温のプラズマガスが機体主要部を両断し、搭載してあった推進剤に激烈な化学反応を強いたのだ。

四散し周囲に飛び散った機体各部が穏やかだった水面に落ちて、高々とした水柱を築きあげた。

搭乗者の脱出は確認出来なかった。

そもそも陸戦兵器として発展してきたACには、航空機なみの緊急脱出装置などもより搭載されてはいない。

機体が誘爆を起こすような損害を被った場合、搭乗者が愛機と運命を共にすることも、やむをえない現実がそこにあった。

おそらくは死亡したに違いない三番機の搭乗者は、国軍の士官学校を優秀な成績で卒業したエリートであった。

選ばれ、磨きあげられ、将来を期待された精鋭だった。

凡人が望んでも得られない資質を有した、類い希なる金の卵だ。戦術戦闘訓練においても、海千山千の強者が揃う教官連中を相手に彼が遅れをとったことなどほとんどなかった。

にもかかわらず、彼は対峙する敵機と自機との間に横たわる圧倒的な性能差を乗り越えることが出来なかった。

それほどの敵であった。

「化け物め」

ACと呼ばれる汎用機動兵器。

その一個中隊を束ねる少佐の口から、高級士官らしからぬ呪詛の言葉がほとばしった。

極めて高い戦意を有する反面、荒くれ者がそろつことでも有名な緊急即応部隊においてですら、士官以上は常に紳士たらんことを要求され教育される。

それは、時に人間性を喪失しかねない悲惨な戦場に身を置いた場合であっても、湧きあがる感情を強い理性で制御し続けるために必要な訓練としての側面を持つ。

窮地に直面した際、容易に激情を炸裂させる指揮官は貴重な部下を無駄死にさせ、組織にとって大きな災いをもたらしかねないからだった。

しかし、今の彼は己の背筋を駆け上がる、ある種の感情を抑え切れる自信を持てずにいた。

その感情の名を「畏怖」と呼ぶ。

彼は、目の前に展開する現状に恐怖心を抱く自分自身を、はっきりと認識していた。

当然だった。

彼らの前に立ちはだかった敵機の数、わずか一機に過ぎない。だが、そのわずか一機の敵に対し一二機ものAC すなわち中隊全機で立ち向かった挙げ句、戦闘開始一分を待たずして彼は、半数以上の部下たちを失っていたのであるから。

信じられない状況だった。

数で勝る敵に待ち伏せを食らった訳ではないのだ。

むしろ正面切つての遭遇戦に近い。

機動兵器を主力とした戦闘部隊がお互いに真つ向から殴り合い、その結果がこれほど一方的な展開を見せるなど、当たり前前の軍事教育を受けてきた者にとっては青天の霹靂ですらあった。

それはもはや、戦術云々を語る段階以前の問題だった。

続発する非対称戦闘に対抗するため、既存の装甲車両AFVになり代わって台頭してきた人型兵器アーマードコア。

人体と同様二本の脚部によって歩行移動し、先端にマニピュレータを装備した左右の腕部へ多彩な武装を“持たせる”ことでさまざまな任務に対応可能な新世代の機動兵器だ。

全高は一〇m前後。

主に一名の搭乗者パイロットによって運用されるACは、機体各所に備え付けられた高出力推進器スラスターを統合運用し、跳躍を含む立体的な機動を行うことが可能だった。

それは、同様の機動を行えない従来型の戦闘車両を一夜にして旧式兵器へと追いやった。

いささか大袈裟ではあるが、かつて軍事史上において発生した“弩級艦の登場”ドレイク・ブレイクに近い現象と言い換えてもいいだろう。

出現当初は、戦車MBTに代表される重機甲兵器群に対し戦闘実力面で明らかに劣勢であったACだが、その戦場地形を選ばない戦術的な汎用性が重視され、今では各国が保有する軍事力の中核兵器となっている。

先進国間における大規模戦争、すなわち重機甲兵器を主力とした大兵力同士の激突が遠い過去のものとしてされて数十年。

いかに高度な戦闘力を保有しようとも、投入出来る戦場と部隊運用においてやや柔軟性を欠く重機甲兵器群が、各国の、いわゆる軍事技術者たちに忌避されるようになったのも、まずは仕方のない状況と言えた。

時は流れ、関連技術の著しい発展と現場における運用戦術の進歩によりACの課題であった戦闘実力も格段の向上を果たしていた。少なくとも現役の主力ACを一对一で撃破出来る機甲兵器は、高価な、そしてそれゆえに極めて配備数が限定される数種の駆逐戦車を除いて他にはない。

そして、それらですら練度の高い搭乗者が操る現行のACを完璧に阻止出来るという保証はなかった。

発揮出来る機動力の差が、文字どおり圧倒的であったからだ。人類の歴史において、相対的な機動力に劣る軍事力が火力と装甲の優越を軸にして勝利をつかんだ事例は決して多くない。

逆に、装備に劣る側が優れた機動力を駆使して敵を撃破した前例は数多ある。

純軍事的な面で見ても、戦場におけるACの天下は当分続くも



初動の一撃を受けた各国の政府は完全に虚を突かれた形となり、「企業連合体」はわずか一ヶ月を要しただけで人類の上に新しい秩序を構築した。

国家組織の無条件降伏と言ってもいい。

それまで想像もしていなかった身内からの武装蜂起という事態に対して、従来の統治機構はまったくの無能であったことをさらけ出した。

彼らは、自らが置かれた状況がどのようなものなのか、そもそも敵対してきた存在が何者なのかを知ることにも出来ずに、表舞台から力づくで退場させられたのだった。

ただし、局地的な戦場でいかに強力ではあっても絶対的な数において限界があった「企業連合体」の軍事力は、各地に旧国家の残党が独自の勢力を維持することを阻止しえなかった。

いかなる達人が振るう名刀の一閃であっても足下にうごめく複数の蟻をことごとく一刀両断に出来ないことと、それは同様の結末だった。

バックス・エコノミカ  
「経済による平和」

そう評されたこの時代ではあるが、現実には人類が初めて経験する「新秩序」に対し、それを受け入れられない「旧秩序」が実力をもって抵抗し続けている争乱の時代だと言い換えてもいい。

それは過去の人類史、そのほとんどを占める期間と何ひとつ違わない、おびただしき流血をとまなう、「時代」そのものの姿であった。

人間が過去の歴史を情報として後世に伝えるようになって数千年が経過する。

にもかかわらずその行動様式が一向に変化していないのであれば、人類という種は想像以上に愚かしい存在であるのだろうか。

だが統治者である「企業連合体」バックスは、ある意味で今の状況を好意的に受け止めていた。

世界中で局地的な紛争が頻発し、支配者が手バックスに負える範囲での



破壊とそれに付随する復興とが交互に訪れる世界こそ、新たなる経済活動の土壌を渴望する「企業連合体」各社にとって、極めて望ましい世界であつたからだつた。

そこにあるのは残酷なまでに冷徹な市場の論理そのものであり、人道や社会正義の存在など薬にしたくても欠片すら見付けることは叶わなかつた。

人々は、そんな彼らが得た利益の分け前をあえて甘受することによつて心身の安定を図り、公の秩序をかるうじて維持することに成功していた。

適切な利益配分の行使による人民の統治。

衣食足りて礼節を知る。

それは決して悪い采配ではない。

ゆえにこそ、「平和」と「戦乱」との間にある距離は一般的な市民感覚ほどに離れていないのかもしれない。

A C特殊部隊「エクスカリバー」の指揮官であるヴァルター・ノボトニー少佐は、目の前に展開される現実に戦慄せざるをえなかつた。

それは実戦豊富な彼ですら、いまだ体験したことのない非常識なまでの戦況だつた。

悲惨な負け戦だから、という訳ではない。

そんなもの、彼は過去にいくらかでも経験している。

任官したばかりの少尉時代、ヴァルターは、圧倒的な数を有する反体制ゲリラ部隊に指揮下の小隊ごと包囲され、孤立無援の戦いを演じたことがある。

周囲から浴びせ掛けられる自動小銃の火線を潜りつつ次第に数を減じていく部下を指揮し、自身も数発の銃弾をその身に受けながら、味方の救援が到着するまでの時間を彼は全周防御で耐久した。初陣であつた。

だがそういつた危機的状況ですら、一歩引いた第三者的な視点

で顧みてみれば軍事的常識には合致している戦況であると断言出来た。

劣勢となった原因はそのほとんどが人的な要因、すなわち指導部の状況判断ミスによるものであり、それゆえにきちんと合理的な説明の付くものであった。

今彼と彼の中队が直面している状況とは根本的に種類が異なっている。

最新の軍事的教育を受けてきたヴァルターにとって、これはまさに悪い夢だと思えなかった。

ヴァルターは、祖国《環太平洋連邦》の士官学校を卒業後、ユーラシア大陸東部で発生した多民族国家の内乱へ治安維持部隊の一員として派遣されたことを皮切りに、若くして幾多の実戦を経験した。

最前線に展開するAC中队に転属を命じられたのはそれから数年後であった。

彼はその地で赫奕たる戦果をあげ、優秀なAC操縦者<sup>レイウン</sup>、かつ全軍でも指折りの戦闘指揮官<sup>スコドリグ</sup>としての評価を確固たるものとした。

配属当初はこの若すぎる中隊長に批判的な目を向け、「若造」「士官学校あがりのボンボン」呼ばわりしていた古株どもも数回に渡って彼の指揮を受けた結果、「中隊長殿」と敬意を込めた眼差しを向けるほどになっていた。

もはや内戦とすら言ってもいい激烈な混乱がかるうじて収束に向かった後、漸く本国へ帰還したヴァルターは教導部隊<sup>アグレッサー</sup>へ配属となり、今度は教官として多くの後身たちを鍛えあげることにも成功した。

そして「国家解体戦争」勃発後、希望して前線へと復帰した彼は、そこでもまたさまざまな任務を成功へと導いてきた。

大陸で指揮していた歴戦の部下たちをなんとか手元に呼び寄せたヴァルターは、彼らを統率し、主として欧州の地を縦横無人に駆け回った。

情報も物資も兵力すらも不足し、そもそも戦略目標そのものが見当たらないという手探りの状況下、彼らは、悪名高い騎兵指揮官ジョン・S・モズビーのごとき戦いを演じ、圧倒的な敵をきりきり舞いさせた。

過去を賞賛し、現状に満足し、将来に期待すべき人物。

彼は、まさしく「軍隊」という組織が求める理想的な士官<sup>オフィサー</sup>であった。

そして“勇將に弱卒なし”を証明するかのごとく、彼の率いる男たちもまた、背負わされた期待に確実な実績をもつて応えた。

彼の指揮するAC中隊は、いつしか特殊部隊「エクスカリバー」と称され、常に激戦地へと投入され続けた。

その中には、“生還不能”と評されるほどに過酷な状況すら幾度となくあった。

だが、彼と彼の中隊はそれら死線を毅然として踏み越え、銃後に誇るべき戦果をともなつて舞い戻ってきた。

補給・整備すらままならない絶望的な戦場。

「エクスカリバー」は徹底的な一撃離脱<sup>ヒット・アンド・ラン</sup>を駆使することにより、「企業連合体」の軍を文字どおり翻弄した。

臆病と大胆の理想的な融合。

彼らは後に、敵側の指揮官からそのようなように評価された。立て続けに成功させた困難な作戦任務。

成功確率が低かったのもさることながら、その作戦でひとりの部下も失わなかったことで、ヴァルターは大きな自信を獲得した。

自分も、そして自分の部下たちも、厳しい訓練と豊富な実戦経験<sup>スバルタニアン</sup>によって鍛え上げられた一騎当千の精兵であると心の底から自負出来た。

それはある種の“信仰”であると言ってもいい。

過去の実績が信仰を裏付けることはあっても、それを裏切るようなことは一度としてなかった。

だから、企業本社施設に対する直接攻撃という極めて投機的な、

言い換えれば無謀と言っていい作戦に参加を命じられた時にも、ヴァルターは特別な悲壮感を抱かなかった。

それは、彼の薫陶を受け、共に地獄の最前線を潜ってきた部下たちにしても同様だった。

根拠のない全能感がこの時の彼らを支配していた。

想えばそれは、危険の兆候であったのかもしれない。

企業本社施設に対する襲撃は「エクスカリバー」のみをもって行われた。

兵力に余裕がなかったことも一因であるが、それよりも大部隊を集結させることで奇襲効果が失われるのを司令部が恐れたゆえの決断だといえよう。

施設全体の破壊や占領などは最初から考慮に入れられはしなかった。

そんなことは不可能だったからだ。

仮に成功したとしても、わずか一個中隊という寡兵では本腰を入れた敵の反撃に耐久出来るとは到底思えなかった上、戦略的な利点も見出せなかった。

「この作戦は間接アプローチによって組み立てられている」と、作戦立案に関わった参謀士官はブリーフィングにおいてヴァルターたちに揚々と語った。

我々が企業の本営を襲う力を有しているのだと彼らに知らしめることで、限定的にする防衛的な態度を強いることが出来る。

それは彼らの持つ軍事的な主導権を一時的に弱め、引いては我々の選択肢を増やすことへと繋がるのだ、と。

「どのみち俺たちに選択肢なんざありはしないんだろ？」

隊員のひとりが皮肉混じりにそう言った。

「俺たち下っ端には偉いさんの都合なんかどうでもいい訳で。そんなものより、もっと多くの弾と機体を寄越して下さいよ」

隊員たちが一斉に笑い声をあげた。

隊長であるヴァルターも例外ではない。

本音であつたからだ。

おそらくは前線に出ることなく机上の計画にいそむ経歴を積んできたのであろう参謀士官の顔色が、さつと音を立てて青冷めた。ヴァルターは、部下たちがこの期におよんでなお高い士気を維持していることに満足感を覚えた。

作戦開始にあたり「エクスカリバー」全機に対し、十分以上の弾薬と燃料とが用意されたのが本件を理由としたためなのかどうかはわからない。

豊かな自然に囲まれた巨大な人工湖の中心にそびえ立つ、奇妙な見てくれを持つ建物。

予想外に手薄だった警備部隊を難なく突破して作戦目標である“それ” すなわち企業本社施設に迫った彼らを迎えたのは、単機のACによる迎撃だった。

見たこともない機体であつた。

「エクスカリバー」が使用している従来型のACと比較してふた回り以上も大きい、そのシルエットは細身で女性的、いやむしる蠅螂のごとき昆虫類を連想させる。

悪魔的禍々しさをまとうていると評してもいい。

これと比べると「エクスカリバー」が使用しているACなど、出来の悪い木人形のようにさえ思えてくるほどだ。

噂に聞く新型か。

咄嗟にヴァルターは警戒し、その心情を部下たちに伝える。

油断するな。気を張っていけ。

「企業連合体」が戦場に投入した新型ACについて、ヴァルターたちは漠然とした情報しか握っていない。

いわく、航空機のごとく自由に空を舞い、こちら側の攻撃を一切受け付けず、わずか一〇数秒でAC部隊をたやすく蹂躪する。

言葉にするのは簡単だが、現行の技術でそんな機体を作れるなどとヴァルターには到底思えなかった。

“想像を絶する新兵器”などというものは、およそ空想世界の中にしか存在していない。

人類の歴史上、一方が戦場に投入しえた新兵器はもう一方においても開発中であるか、少なくとも理論的には実現可能な代物であり続けてきたのだ。

軍事面に限らず技術革新とは常に地道な研究の積み重ねに起因するものであり、突如として舞い降りる天啓によってもたらされるものではない。

少なくとも、これまではそうだった。

ゆえに、この「新型AC」に対する伝説も、よくある戦場神話のひとつに過ぎないとヴァルターは断じた。

幽霊の正体見たり、という奴だ。

現実世界にその姿を引きずり出してみれば、伝説も当たり前前の常識と工夫の融合体に違いない。

加えて彼我の戦力比率は一二対一。

ランチエスターの法則を持ち出すまでもなく、数の上では圧倒的に優勢である。

この新型機がどれほどの高性能を発揮しようとも十分に対抗出来る。

物理的にそれが約束されているはずだ。

ヴァルターだけでなく中隊の誰もが、もはや作戦の成功は疑いないものと確信した。

それも無理のない状況だった。

そのわずか一機の迎撃戦力が、彼らがありえないと切り捨てた“ネクスト想像を絶する新兵器”であることを思い知る、その瞬間までは。

最初の一撃で先行していた二機のACが敵機に食われた。

それは、ヴァルターが最も信頼をおき、数年間同じ釜の飯を食った古強者の中尉とその列機ベテランだった。ウィングマン

彼らは艦載速射砲と同等の口径を持つ化け物じみた機関砲弾に七六mm

よって、搭乗していた機体ごとその肉体を粉碎された。

敵機は「エクスカリバー」が想定した有効射程距離外から一気に踏み込み、その左腕部に携帯した火器を発砲したのであった。

信じられない加速性能であった。

従来型のACでは、それが最新型であつても発揮出来る最高速度は時速一六〇kmが精々だ。

それも条件がいい場合に限られた。

それを越えればACは操縦者の意図を離れ転倒する。

現行の機体操縦システムでは、主に反応速度の面でそれが限界だとされていた。

だが目の前の新型機は、それに数倍する最高速度を計測した。

それも、まるで電磁式カタパルトを使用したかのごとき短時間で、だ。

ありえなかった。

常識離れた超加速を実現する大出力推進器の存在も、その状況下でなおも搭乗者が機体姿勢を制御しえる操縦システムの存在も、

新型機が発揮した速度は、単なる正面攻撃を完璧な奇襲へとすり変えた。

隊員の対応速度を状況の変化速度が上回ったからだだった。

中隊が事態を把握するまでの短時間で、さらに一機が撃破された。

「国家解体戦争」がなければ気立てのよい婚約者フィアンセと結婚式を迎えていたはずの若い少尉であった。

彼の乗機は突進してきた敵機が振るう超高温のプラズマガス・レーザーブレードの一閃によって文字どおり上下に腰断され、少尉の存在はその過程で蒸発して果てていた。

「一体、何が起きているんだ……」

思わずヴァルターは息を飲んだ。

戦闘部隊の指揮官として許されざることだが、思考が現実の認識を拒んでいる。

これまで噂だけは耳にしていた「次世代AC」<sup>ネクスト</sup>  
「企業連合体」<sup>バックス</sup>による軍事行動開始と共に先兵として戦場へと投入され、国家政府の軍事拠点を次々と粉碎しているという企業側の秘密兵器。

確かに圧倒的な戦闘実力だと聞いてはいたが、まさかこれほどとは思わなかった。

尋常の火力と機動力ではない。

というより、同じ技術レベルを持つ勢力が開発可能な性能だとは思えない。

“想像を絶する新兵器”

本当にそんなものが実在しえたのか？

馬鹿な。ありえない。

混乱が心中を支配する。

だが、瞬時にヴァルターは、そのもやを振り払った。

戦争だ。これは戦争なんだ。

どんなことでも起こりえる。

目の前で起きている現実だけを認識しろ。

湧き起こる不安を、彼は強引に打ち消した。

己自身を激しく叱咤する。

やれるはずだ、同じ人間なら。

自分と部下たちの実力を信じる。

が、彼はわずかな時間で混乱から立ち直ると中隊全機に散開<sup>ブレイク</sup>を命じた。

中隊の残存機は、混乱する兆しも見せずに両翼へ扇形に広がる。一機しかいない敵機を左右から包囲し、集中砲火を浴びせる構えだ。

高い練度の保有者らしく、機敏かつ迷いのない動きであった。

もちろん彼らとて初めて遭遇する新型機の実力を目の当たりにして、半ば恐怖に似た心情を抱えていたことは確かだ。



この時点でなお彼らの戦意が旺盛であったと評せば、それは明らかかな嘘になるう。

だが常に中隊を率先してきた指揮官<sup>ヴァルター</sup>への信頼と自らの実績に対するの自負とが、すくみかかった彼らの両脚を突き動かした。

敵機が性能面でこちらをはるかに凌駕していたとしても、それがA C同士であるならば必ず戦いようはあるはずだ。

そして、戦えるのでさえあればそこに勝機は存在する。

少なくとも皆無ではない。

皆無であるう訳がない。

だが常軌を逸した勢いで中隊の陣形内へと躍り込んできた新型機は、彼らとすれ違いざまに二機を、そして離脱反転してすぐに一機を撃墜した。

墜とされたのは任官したばかりの頃からヴァルターが目を掛け、漸く一人前の士官として小隊を任せられるようになった中尉と、その部下たちであった。

それは完全なる正面攻撃であった。

小細工など一切ない。

中隊の各機は相互支援可能な戦術隊形<sup>フォーメーション</sup>を崩すことなく、教科書どおりに敵機の来襲を真っ向から受け止めた。

戦術的な過誤は、どこにも見られなかった。

だがしかし、彼らには耐久の暇など寸分も与えられはしなかった。

新型機<sup>ネクスト</sup>の攻撃を受けた「エクスカリバー」は、反撃する余地もなく、ほとんど一撃で半壊状態へと陥っていた。

絶望的な火力の洗礼であった。

軍の主力機動兵器であり相応の対弾防御を施してあるはずのA Cが、ひと溜まりもなく沈黙させられていく。

ネクストとは、ネクストとはこれほどまでに強力な存在なのか！  
駄目だ。

ヴァルターは目を見張った。

性能が違いすぎる。

眼前の敵機は、今彼らが搭乗している現行型のACで太刀打ち出来る代物ではない。

骨董品のような対戦車ライフルを携えて、最新鋭の主力戦車《MBT》に単身戦いを挑むようなものだ。

「ブレイド〇一ゼロワンより中隊全機。各自、戦場を離脱しろ。逃げるんだ、逃げ！」

このままでは全滅する。そう判断したヴァルターは、残存する機体に向けて退却を指示した。

“逃げる”という、およそ軍人が用いるべきではない直接的な単語を使用すらした。

彼は言葉を飾り体面をつくろうと惜しんだのだ。

そして、自らは部下の脱出を援護するために荒れ狂う竜巻のときネクストへ向けて猛然と突撃を開始する。

一機でもいい。生き延びてくれ。

己が生還する望みは即座に捨て去った。

それが指揮官たる者の責務であると、軍人としての矜持が彼自身の決意を支えていた。

ヴァルター機の大口径機関砲三五mmが咆哮し、今まさに近接戦闘で彼の部下を屠ったばかりのネクストを背後から襲う。

直撃は必至だった。

少なくとも手傷は負わせられる。

ヴァルターは確信し、なおも引き金を絞り続けた。

さらなる曳光弾が敵機へと伸びる。

しかし、ネクストの周囲を覆う目に見えない“何か”が障壁バリアのごとくそれを阻んだ。

至近距離では主力戦車の複合装甲すら貫く大口径機関砲弾は、稲妻のような発光だけを残して虚空に消える。

ネクスト本体に着弾の形跡は見当たらなかった。

馬鹿な、何が起こった！

信じられない現象を目の当たりにして、ヴァルターは絶句した。だが、ネクストは自機の防御力を確信していたのである。それは、ヴァルターのACが放つ攻撃をあたかも子供の投げる紙礫であるかのごとく無視し、悠然と振り返り発砲した。

一発、二発

図太く禍々しい曳光弾がヴァルターの乗機めがけて吹き付けられる。

機体を小刻みに揺すり三発目までは敵の攻撃を回避したヴァルターだったが、四発目以降を避け切れなかった。

易々と装甲を撃ち抜かれた右腕部と頭部とが瞬時に爆砕され、その衝撃で横転したヴァルターの乗機は大地へと勢いよく叩き付けられた。

轟音と共に激しい衝撃がヴァルターを襲い、飛び散った金属片がひしゃげた操縦席内部を跳ね回って一部が彼の肉体を貫いた。

獣じみた声が喉の奥からほとばしる。

凄まじい痛みが腹部に走り、込み上げてきた生暖かい塊が音を立てて口から吹き出した。

鉄の味がする。

血液だった。

内蔵をやられたな、とヴァルターは自己判断したが、それは今の彼にとってどうでもいい現実であった。

出血のためか急激に薄れゆく意識の中で、ヴァルターは残った部下たちがどうか逃げ切れるように、と祈った。

それだけが、今の彼に唯一実行可能な彼らへの支援であったからだ。

捲土重来など考えずともいい。

自分の未来を掴み取ることだけ考える。

無駄死にだけは、無駄死にだけはするな。

だが、直後に飛び込んできた通信がヴァルターの耳朵を激しく打った。

『少佐殿を救え！ 各機突撃』

駆け出しの頃から列機として可愛がってきた副官の声であった。童顔で生真面目な男だった。

その正義感の強い性格は、凄惨な戦場において不釣り合いなほど彼に人道とやらを語らせることが多かった。

仲間を、上官を見捨てて逃げ延びること。

副官は、それを唾棄すべき行為と判断し、ヴァルターの命令よりも己の正義心を上位に置いたのだ。

馬鹿野郎が。

ヴァルターは、齒軋りしてつぶやいた。

そして、部下たちの死を半ば確信のごとく予感しながら、彼の意識は光のない深淵へ、ゆっくりと沈んでいった。

## 傭兵（1）（前書き）

この章には一部R15指定に相当するシーンがあります。注意してお読みください。

## 傭兵（1）

脇腹に残る古傷がうずく。

悪夢によつて目覚めるのは、これで何度目のことだろう。

それも決まつて“あの時”の夢で、だ。

冷たい寝汗でぐっしょりの上体を寝床から起こし、ヴァルター・ノボトニーは静かに煙草を燻らせた。

やや癖のある黒い頭髪を持った彼は、今年で齡三六。

到底二枚目には見えないが、その猛禽のごとき鋭い双眸と過酷な実戦経験を深く刻み込んだようないかつい面持ちには、ぬるま湯につかつた生活を送る若者たちには決して持つことのかなわなない一種野武士のごとき風格を漂わせている。

軍歴を離れて早四年。

しかし、日々怠ることなく続けてきた自己鍛錬により、その露わとなつた上半身に無駄な脂身などひとかけらも見当たらなかつた。ただし、それは純粹な競技者が持つ肉体にも見えはしない。

身体の各所に消えることなく存在を誇示し続ける無数の傷跡が、彼の肉体を戦士のそれだと主張してやまなかつたからだ。

紫煙が揺れ、煙草の火が赤く灯る。

外はまだ暗い。

何気なく壁面に掛けてある時計へと目をやる。

ほぼ深夜と言つていい時間帯だつた。

そのせいか、半開きの窓から吹き込んでくる涼しい微風が汗だくの素肌心地よく感じられた。

「どうしたの。またあの夢？」

ヴァルターと同衾していた女性が釣られて目覚めたのか、心配そうに声を掛けてきた。

蜂蜜色の頭髪をさっぱりと短めにそろえた、清しい印象を見る者に与える女性である。

明らかに若い。

まだ少女の面影を色濃く残している風情だ。

少なくとも、三〇代も半ばをすぎたヴァルターとはひと回り以上離れた年齢に映る。

ヴァルターと同様、彼女もまた薄いシーツに覆われたその滑らかな肢体には衣類らしきものをまとってはいない。

おそらくはそのままの姿で共に寢床へ着いたのであろう。

ふたりがいわゆる“男女の関係”にあることは明白であった。

そしてそれが、今のふたりの間に横たわる距離をあからさまに表していた。

月明かりが差し込むだけの寝室で、彼女の持つ艶やかな素肌アラベスクが大理石のように輝いて見える。

瑞々しく張りのある白い肌。

歴戦の跡を無数に残す、日に焼けたヴァルターのそれとは明らかに異なる。

それは、彼女の人生がまさにこれから盛夏を迎えるのだと、百万の言葉よりも雄弁に語りかけているようだった。

彼女の姿態を目にする度、ヴァルターは、かすかな罪悪感に捕らわれる。

それはまるで大切に育てられた温室の花を自ら手折ってしまった時に感じる、複雑な心境に近い思いであった。

本来なれば彼女は自分のような薄汚れた敗残の兵とこんな関係に陥るべき女性ではないはずだ、という確信が、心中のどこかに深く根を張っている。

引け目や負い目というのとは少し違う。

上手く言い表せない。

それがなんとももどかしく、そんな時ヴァルターは、無理矢理に笑顔を形成することで自分を押さえ込むよう心掛けていた。

「大丈夫だ、フィオナ」

軽く口の端を綻ばせ、ヴァルターは言った。

左手をゆつくりと伸ばし、自らが“フィオナ”と呼んだ女性の黄金色に輝く前髪を優しく指先で弄ぶ。

「少し気分がたかぶっただけだ。一服すればもとに戻る」

「そう……」

フィオナと呼ばれたその娘はシーツを、その豊かな胸元を隠すように引き上げながら、けだるそうに半身を起こした。

耳元の髪を左手で掻き上げつつ、ヴァルターの眼を上目づかに覗き込む。

「それならいいけど」

「心配性だな」

ヴァルターは、ぎこちなく破顔した。

「戦争はもう終わったんだ。悪い記憶は風に流されて、そのうち消えてなくなるさ」

「<sup>バックス</sup>企業連合体」が「国家解体戦争」の終結を宣言してから四年が経過していた。

当初は新しい秩序の担い手である「企業連合体」に反発していた武装勢力も、ネクストの存在という圧倒的な実力差を見せつけられた結果、その多くが今では派手な行動を控えるようになっていた。市井の人々は「コロニー」と呼ばれる群居地に押し込められ、少なくとも衣食住には不足しない穏やかな日常を保障されていた。

もちろんそれが企業による独占的な管理社会である以上、一般の民衆が統治に参加することは認められていない。

努力によつてそのような地位へ登ることもまたしかり、であった。

企業がコロニーの人々に求めたのは経済活動に従事する労働力の提供であり、市場を構成する消費者としての存在であった訳だから、それは当然のこととも言える。

コロニーに住む人々は、企業にとつて、ある種の「<sup>スレイブ</sup>奴隷」、いや「<sup>キャトル</sup>家畜」と言い換えていいのかもしれない。



そういう意味では、「ハックス・エコノミカ経済による平和」とは独裁官僚制に近い政治形態なのだろう。

この世界には、大まかに分けて二種類の人間しか存在を許されてはいない。

「統治する者」と「統治される者」の二種類だ。

両者の間に存在する間隙は絶対的なまでに大きく、いずれは世襲化され自己永続的寡頭政治へと変化していくに違いない。

それは端から見る限り、絶対王政時における欧州社会と何ほども変わらない制度に映るはずだ。

違うのは、そこに「王」や「皇帝」がないことぐらいである。ただし統治者である「企業連合体」が人々に保証した生活は、地上に住む大半の者たち 先進地域に居住していた一部の者たちを除くほとんどの人間を最低限満足させうる水準にあった。

皮肉な話だが、「経済による平和」は全世界規模におよぶ富の再分配、すなわち南北問題の解決を成し遂げることで民衆の支持を集めたのである。

彼ら「企業」は、すべての罪を当時の統治者である「国家」、それも一部先進国へ押し付けることにより「白馬の騎士」ホワイト・ナイトとしての立ち位置を手に入れた。

弱者を救う力の行使は明白な正義。

いかにも単純だが、それゆえ誰の耳にも心地いい、

その旗印は今もなお、「企業連合体」が暴力をもって統治者の椅子を強奪した理由の正当化に用いられている。

これほどのマキャベリズム的手法を難なくやってのける敵と相対したのだ。

例えネクストの存在がなくとも、「国家」がその統治権を「企業」によって奪われるのは時間の問題であったと言えるだろう。

余りにも戦う相手が悪すぎた。

四年前。

ヴァルターが信頼すべき部下たちを永遠に失ったまさにその日、奇しくも彼の祖国は「企業連合体」に対して膝を屈することを選択していた。

実力による抵抗を諦めたからではない。  
それは水面下で進められてきた秘密交渉の結果として、であった。

つまりヴァルターの祖国、いやその指導者層と「企業連合体」の上層部とが互いに矛を収める条件の合意に成功したという訳だ。報道機関によって大々的に知らしめられた、その“英断”の影で、しかしヴァルターたちの作戦行動が語られることはなかった。

一文字も、である。

それは、彼のエクスカーリバー中隊に命じられた作戦が端から軍事的な成功を求められて計画されたものではなかったことを明確に物語っていた。

詰まるところ、あの襲撃作戦は多分に政治的色彩を有したものに要するに国家勢力による「企業連合体」への政治的脅し、既得テモンストレーション権益に対する配慮を引き出すための意思表示に過ぎなかったということだ。

我々にも甘い汁を吸わせる　さもなくば、無謀な抵抗をも辞さない。

それは、もはや純粋な軍事活動と言うよりもテロリズムの方に近い思想と言えた。

よく誤解の対象となるが、本来のテロリズムとは実力の行使によって政治目標の達成を目指すようなものではない。

それは基本的に、一方の実力行使を避けるため、もう一方が下す政治的妥協の引き出しを目的とした示威行動なのである。

確かにこの計画を立案した者たちは、極めつけに優秀なスタッフだった。

まさしく国家エリート中のエリートだったと評してもいいくらいだ。

彼らは、“たった”一個中隊を生け贄に差し出すことで、自分

たちの政治的・経済的な立場を「企業連合体」に保証させたのであるから。

だがそれは、およそ“公人”のなすべき決断でありはしなかった。

彼らは自らの保身のため、すなわち己の私欲、ただそれだけのために一二人の人間を、その未来を犠牲にするのを厭わなかった。

なんという無責任。

なんという傲慢。

なんという……

彼らは、自らを神に選ばれた不可侵の存在だとも考えていたのだろうか。

腐敗の極みに達していたとはいえ、素朴な忠誠心の対象であった祖国の隠された本心を知り、ヴァルターの中で何かが折れた。

ヴァルターとその部下たちは職業軍人として、すなわち彼らはその身を置く“公”の剣及び盾として、文字どおり身命を賭してき

た。少なくとも、そのように誓約し、心からそれを信じ、そして誇りとしてきた。

もちろん、それが絶対の正義であるなどと、彼らは思ってもみなかった。

人は神でないがゆえに、時には愚かしい過ちも犯すとわかって

いた。彼らを支えていたものは、いわゆる“矜持”であった。

“私”を捨て去り、“公”に生きる防人としての自認。

名も知らぬ多くの人々、その権利と尊厳とを守っているのが自分たちだという確固たる自尊心<sup>プライド</sup>。

それなくして、一体どこの誰が殺人稼業などをひさげようものか。

それが公然と裏切られた。

「国家上層部」という、本来なれば私を捨ててまで公につくすことを求められる人々の既得権益を守るため、自分と愛すべき部下たちは死地に送り込まれたのだ。

まるで道化師<sup>ヒエロ</sup>だった。

砕け散った矜持を前に、もはや笑うことしかヴァルターには出来なかった。

見知らぬ寢床で目覚め、時間の感覚もなく呆然と白い天井を見詰めている間、彼は自らが生きている意味をすら失いかけていた。

絶望と自己嫌悪とが、その時のヴァルターを漫然と支配していた。

そんな彼を暗闇の縁から救ったのは、傍らで献身的な介護を続けてくれた、ひとりの純朴な少女であった。

彼女の名は、フィオナ・イエルネフェルト。

次世代<sup>ネクスト</sup>AC制御技術の提唱者、マルクス・イエルネフェルト教授のひとり娘である。

当時まだ学生の身分であった彼女は、技術交流のために某企業本社を父親とともに訪れたその日、反企業<sup>ヴァルターたち</sup>連合勢力による武装襲撃に遭遇したのだった。

モニター越しに映る“現実の戦闘”

待ち受けていた企業のネクストによって次々と撃破され、搭乗者の生命を飲み込んだまま爆散する襲撃者たちのACを目の当たりにして、彼女は強い不快感を覚えた。

そして、すべてが終わりを迎えた後、気分転換とばかりに外出が禁止されていた施設外の区域へと足を踏み出した夕暮れ時、フィオナは「彼」と出会ったのだった。

おそらく、襲撃者たちの生き残りであるのだろうひとりの男性。瀕死の重傷を負いつつも、最後の力を振り絞るようにして撃破された乗機から脱出を果たしたに違いない彼は、意識もなく、まるで打ち上げられた流木のように企業本社施設を囲む湖水の波打ち際に横たわっていた。

フィオナがなぜ彼を匿ったのかは、本人にもわからない理由からであった。

夕闇に乗じて自身よりもひと回り以上大柄な彼の身体を引きずるように自室へと運び込んだ彼女は、父親以外の誰にもそのことを告げずにその男性を救おうとした。

彼が意識を取り戻したのは、それから数日を経てからであった。彼が負った腹部の傷は思いの外深く、一部は内臓にまで達していたほどであったが、イエルネフェルト教授が秘密裏に手配した医療スタッフによる適切な治療が功を奏し、命に別状があるまでには到らなかった。

「おめでとう。あなたは生きているのよ」

自分の置かれた状況を掴めずゆっくりと首を左右に振る彼の手を優しく握り、フィオナはそう語りかけた。

そして、「お名前を教えて下さる？」という彼女の問い掛けにその男性は、「ヴァルター……ヴァルター・ノボトニー」と、つぶやくように答えた。

白濁した意識が判然としていくにつれ、ヴァルターは、部隊の中で生き残ったのが自分だけなのだを認識した。

自分を信じて戦地に果てた部下たちを尻目に己だけが生をまっとうしているという現実を知り、彼は不覚にも落涙した。

なぜ生き長らえてしまったのだ。

痛切な自責の念に駆られ自らの存在を否定しようとするアラタールを、彼よりもはるかに年少であるフィオナが激しく叱った。

平手打ちが、彼の頬を強く叩く。

ぱしっという音が空虚な室内に鋭く響いた。

そして、同席した父親が啞然とする横で彼女はキツパリと宣言した。

「どうしても捨てるというのなら、あなたのその命、わたしが頂きます。異論はありませんね？」

腰に手を当て、いたずら坊主を前にした母親のごとき態度で彼

女はヴァルターに畳み掛ける。

「あなたの命を救ったのもわたしなのですから、これは当然の権利です。それを踏まえた上で、わたしはあなたに命じます」

わたしの許しを得ることなく、勝手に死んではいけません。

鼻息荒くフィオナは言った。

それは、いささか滑稽なやり取りではあった。

いや、明らかに喜劇がかつてしていると断言してもいい。

しかし、この時の彼女が放った真摯な光に気圧されたヴァルターは、無意識のうちに直立不動の姿勢を取り、敬礼し、あたかも尊敬すべき上官に対するかのように「了解」と応えたのだった。

以降、彼はイエルネフェルト家の食客として、小アジア半島の根本に位置するコロニー、「アナトリア」での日々を過ごしている。

それは、退屈ではあるが同時に極めて充実した日常であった。

肉体に負った傷だけでなく、祖国に捨て駒とされたことで受けた心の傷も、日を追うごとにゆっくりと癒えていくようであった。

元来天涯孤独の身であったヴァルターにとって、今やアナトリアはなくてはならない大切な故郷となっていた。

イエルネフェルト教授の推薦により、軍事の専門家を欲していたアナトリア防衛部隊に教官として迎え入れられた彼は、そこで新しい人間関係を構築し、己がアナトリア社会の一員となれたことを実感した。

ようやくのことで獲得した自分自身の生活基盤。

彼は「アナトリア人」として初めて手にした給金をもって、イエルネフェルト家の主とその娘とを食事に招待した。

返そうにも返しきれはしないだろう莫大な量の“恩義”

だからといって何も行動に移さないという選択肢は、ヴァルターの中に存在しなかった。

どれぐらいぶりに心から笑ったであろう。

人生を楽しむこと。

それ自体を忌避していた自分自身を発見し、ヴァルターは深く

恥じ入った。

それは、自分を支え立ち直らせようとしてくれていた人々の思いを無碍にする行為そのものだと言ったからだった。

教授が急な私用で席を立ったのは、まだ宵の口のことであった。この時、大切なひとり娘を預けられたヴァルターは、彼から向けられた信頼の重さを痛いほどに感じた。

どこの馬の骨か知れぬ自分に対し、手中の玉とも言える存在を託してくれる。

その思いを無視する訳にはいかない、と彼は自分自身に言い聞かせた。

残されたフィオナは、父親が彼女に提供してみせた気配りの一部に便乗してか、普段以上の朗らかさでヴァルターと接した。

魅力的な女性だと、改めてヴァルターは思った。

それは、時にすれ違う男性を振り向かせる彼女の美貌がもたらした感想ではない。

ヴァルターの目にフィオナが眩しく映るのは、彼女が前だけをしっかりと見詰めているからだだった。

光り輝く希望に満ちた望むべき未来を。

いかに努力しようとも、過去と、その過去の積み重ねに過ぎない現在とを直視することしか出来ない自分とは、まるで生きる世界が異なっている。

それは、羨望に近い感情だった。

渴望に近いと言いつつ換えても過言ではない。

それを自覚した時から、ヴァルター・ノボトニーにとって、フィオナ・イエルネフェルトは明確に守護すべき対象となった。

多彩な欠点を有しているであろう彼だけの女神に仕える、たったひとりの聖職者<sup>クレリック</sup>。

彼はそんな自分の立場に満足し、それ以上の伸展を望みはしなかった。

その彼を“洗神”の道へと誘ったのは、皮肉なことに彼の仕え

る女神、フィオナ・イエルネフェルトその人であった。

大量に経口摂取したアルコールの力を借りて、彼女は自分の想いを必死になつてヴァルターに伝えた。

「わたしをあなたの彼女にして下さい。そして、どこにも行かないで、ずっとわたしの側にいて下さい」

思い返す度に赤面してしまう、と彼女自身が後述するように、しらふではとても口に出来ない言葉をフィオナは辿々しく、しかし聞き間違いが起こらないほどはつきりとした声量で口にした。

彼らが男女の一線を越えたのは、その夜のことであつた。

フィオナは、自分よりもひと回り以上年長の元職業軍人を初めの“男”として自らの中に迎え入れた。

ヴァルターは、いまだ少女の趣を残す己が主人をその両腕で掻き抱くことで、求め、そして求められる喜びを再認識した。

ふたりが初めて結ばれた次の日、馬鹿正直にその事実を告げたヴァルターの前でイエルネフェルト教授はまず啞然とし、次いで声をあげて笑い出した。

「君という男は、私が想像した以上に糞真面目な人間なのだ」教授は素直にふたりの関係を祝福した。

願わくばこれからもアナトリアの人口増に努めてくれたまえ、と似合わない冗談まで口にしてのけた。

その教授が亡くなつたのは、一昨年暮れだつた。

脳溢血による突然死、であつた。

教授の持つ専門知識と豊富な経験とを軸にしたさまざまな技術を主力商品として扱うアナトリアは最善をつくして彼の命を救おうとしたが、事態は完全な手遅れとなつていた。

たつたひとりの肉親を失い失意のどん底にあつたフィオナを支えたのは、常に彼女の側に身を置くヴァルターの存在だつた。

彼は表立つて優しい言葉こそ掛けはしなかつたが、決してフィオナに孤独感を与えるような真似もしなかつた。

それは、あたかも亡国の姫君に付き従う忠勇の騎士のごとくで



あつた。

「ねえ、聞いてくれる？」

ふと思いついたようにフィオナが言った。

傍らに置かれたヴァルターの手に、そつと自分の手を添える。

「わたし、夢を見たの」

「どんな夢だ？」

煙草の火を灰皿の上で押し消し、ヴァルターはいささかぶつきらばうな口振りで彼女の言葉を促した。

口調が乱暴であってもそれが彼が持つ不器用さの表れであることをよく知っているフィオナは、そんな些細なことを気にしたりしない。

それゆえ、きちんと会話の主導権を受け入れられたと判断した彼女は、心底嬉しそうな笑顔を浮かべて語り出す。

森と湖に挟まれた自然の豊かな土地に、わたしたち、小さな家を建てて住んでいるの。

木の臭いがするログハウスみたいな、本当に本当に小さな家。

あなたはその土地で、畑を耕したり、薪を割ったり、釣りをしたりして、自然と共存しながら家族を支えている。

わたしは、そんなあなたの帰りを、暖かい夕食を作って迎えるのが日課。

その日は快晴。

透き通るような青空が広がる素敵な午後。

あなたは湖でのひと仕事を終えて、わたしの下へ帰ってくる。

気付いたわたしが手を振ると、あなたはあなたらしく、こう面倒臭そうに右手を挙げるの。

大漁だったのかしら。

少しだけ満足そうな表情を浮かべているわ。

そんなあなたの傍らにまわりついているのが、あなたによく似た感じの小さな男の子。

わたしとあなたの息子よ。

あなたは、その子に生きるための術をたくさん教えながら、毎日伸びやかに生きている。

魚の捕り方、木の切り方、作物の育て方、その他いろいろ。気の利いた台詞は言えないお父さんだけど、その子には気に入られているみたい。

だってその子ったら、すごく楽しそうに笑っているのだから。そして、そんな元気いっぱいの子がお母さんって手を振りながら、わたしに向かって駆け寄ってくる。

まだ小さいからかな。

その子は、甘えるようにわたしのお腹に抱きついてきたわ。大きくなった、わたしのお腹。

その中には、あなたとわたしのおふたり目の子供がいる。

きつと今度は女の子よ、って断言するわたしに、あなたは困ったような顔をして、こう言い返すの。

おいおい、生まれてくる子供に今からプレッシャーを掛けるなよ、って。

「なるほど」

ヴァルターは苦笑した。

「俺なら言いそうだし」

「そうよ。わたしはあなたのことを誰よりもわかっているもの。フィオナはそう言い切って、彼の頬にっいばむような口付けをする。

「それでね、夢の最後、わたしはあなたにこう言うの。“おかえりなさい”って」

「いいな。そいつは」

ヴァルターはそう言っつて、フィオナの頭髪に指を絡めた。

「こんな時代だ。若いうちに隠居を決め込むのも悪くはない」

「でも、問題がひとつあるわ」

上目づかいにフィオナが言った。

「わたし、まだあなたの子供を授かってません」

その言葉を聞いたヴァルターは、なだらかな曲線を描く彼女の肩を愛しげに抱いた。

掌に直接彼女の体温を感じながら、彼は問う。

「欲しいのか？」

「もちろん」

フィオナは即答した。

「これでも一応、オンナですから」

彼女の上体を覆う純白のシーツが、するりと音もなく落ちた。

形のよいふたつの膨らみが、月明かりに照らされて美しい曲線を描く。

わずかに顎を上げ、ゆっくりと誘うように目をつむるフィオナ。ヴァルターはそんな彼女の意をくみ、おのれの唇を彼女のそれと静かに重ねた。

そして、そのまま倒れ込むように彼女と肌を合わせる。

唇同士の接触は、やがて激しい舌の絡まりへと発展した。

女性特有の甘い体臭が湧き立ち、ヴァルターの男性が反応する。

彼の手が、指が、唇が、舌が、全身を隙間なく這い回るのを、

フィオナは恍惚とした面持ちで感じていた。

ヴァルター以外の異性を知らない彼女ではあったが、それでもなお彼がまるで宝物でも扱うような態度をもって自らを愛してくれている事実を疑うものではなかった。

彼の右手が秘所への愛撫を開始した時、軽い絶頂が彼女を襲った。

小さく呻いて思い人の肩に爪を立てる。

ヴァルターの皮膚がわずかに裂け、うっすらと血がにじんだ。

悪い癖だと自分でも思う。

しかし、ヴァルターがそれを責めたことは一度もない。

“受け止められている”

そのことを実感する。

ふたたびオナナの高まりが全身を満たす。

嬌声を押さえられない。

誰に学んだ訳でもないのに、自然とオトコを喜ばせる声が出るというのは本当に不思議なことだ。

ヴァルターの下で、フィオナの肉体が二度三度と跳ねる。

いつしか、その両手は彼女を責める男の背中に回されていた。

またしても高波が押し寄せ、フィオナの爪がヴァルターの背を傷付ける。

限界だった。

熱く潤んだ瞳をヴァルターに向け、彼女は必死に何かを訴えた。もうその懇願は言葉にはならない。

だが、それだけで十分だった。

ヴァルターは眼だけで了承の合図を送ると、勢いよくフィオナの中へと侵入を果たした。

待ち望んだ一体感が訪れ、彼女は激しくおとがいを反らした。理性が決壊し、視野が狭窄する。

全身をすり寄せるようにして、彼女は悦楽を求めた。

神が定めた男女の摂理。

人が人であるための生命の営み。

求め合い、受け止め合う。

お互いの魂までもが混同し、重なり合ってしまった。その刹那。

彼女にとって、本当にいるべき場所がここにあった。

ヴァルターも限界が近いのだろう。

そのたくましい両腕が、彼女の身体を強く強く抱き寄せる。

フィオナもそれに合わせるがごとく、彼の身体に四肢を絡めた。腰から発生した稲妻が、一気に脳天を貫いたのはその時だった。

声など出ない。

頭の中が瞬時にして白濁した。

全身が強張り、思わずヴァルターの肩口に噛みついてしまう。

フィオナ！

ヴァルターが耳元で名前を呼んだ。

こらえていた何かが、その瞬間堰を切ったように溢れ出た。

ヴァルターがフィオナの体奥で猛々しく自分自身を解放した時、

彼女もまた、天国への階段を勢いよく駆け上っていった。

## 傭兵(2)

「忙しいところわざわざ呼び出して済まなかったな、ふたりとも。まあ、そう固くならず座りたまえ」

エミール・グスタフはそう言って立ち上がり、自らふたりに席を勧めた。

初老と言っているいい年齢の男性だ。

いささか頭の固い、それでいて博識な大学教授を思わせる風貌を有している。

その“見てくれ”のせいかどうかはわからないが、彼がコロニー・アナトリアの実質的な最有力者であることをいまだに信じようとならない輩もいると聞く。

あの男は誰かの傀儡に違いない、という安っぽい陰謀論の類である。

なるほど言われてみれば確かに、落ち着いた渋めの背広でその身を固めていてもエミールの容貌は俗に言う“政治家”という印象を衆目には与えない。

もちろんそのためだけではないのだろうが、一部の勢力から彼には政治の分野に必要とされる個人的資質が欠けているのではないかと疑われていることもまた、紛れもない事実であった。

しかし、イエルネフェルト教授亡き後、いささか土台の傾いたコロニー・アナトリアが、その舵取りをとにもかくにも破綻させずに今日を迎えられたのは、エミールが密かに隠し持っていた政治的才能によるところが大きい。

無責任な人々がいかに思おうとも、その一事を否定出来る識者は現実を熟知している者に限って言えばまさに皆無であった。

ヴァルター・ノボトニーとフィオナ・イエルネフェルトが名指しで彼に呼び出されたのは、本当に突然の出来事であった。

エミールは故イエルネフェルト教授の旧友とも言える間柄であ

ったから、フィオナはもちろんヴァルターとも十分な面識がある。

当然、今の二人がどのような関係にあるのかも彼は完全に認識していた。

だが、彼らがそろって指名を受けたのは、そういった私的な縁故に則つてという訳ではどうもなさそうだった。

彼らがエミールの執務室へと招かれたのは、午後の二時。

普段であれば、両者とも自分に与えられた職務に邁進しているべき時間帯である。

市街地中心部に屹立するコロニー庁舎へとふたりが到着した時、ヴァルターは警備部隊ガードが使用する制服を少々着崩した形で身にまとい、フィオナはそれと対称的に派手さのない地味なスーツをきつちりと隙なく着用していた。

そんな両者が並んで立つと、まるで反骨心旺盛な不良学生と真面目一本でやってきた優等生とのカップルがそのまま年を取ったかのごとき雰囲気がある。

エミール・グスタフという人物が公私混同を好まない堅物であることをふたりは必要以上に知っていた。

だから、この招集が何か公の目的を持ったものであるのだと、フィオナもヴァルターも誰に言われるまでもなく確信している。

ただし、その理由に関しては両者ともまったく聞かされておらず、庁舎の前で予想外の対面を果たした両名はここに至るまで少なからず困惑の色を隠すことが出来ずにいた。

エミールがふたりを招き入れた部屋の中には、彼自身と彼の秘書 と言うよりは技術交換の名目で「企業連合体」を構成する大企業のひとつ「レオーネメカニカ」社から派遣された補佐役アドバイザーである、セレン・ヘイズ女史がいた。

セレンは、その西欧的な名前とは異なり明らかな東洋風の外見を持つ才女であり、今年で二一となるフィオナよりも若干年長だと聞いている。

長い黒髪を後頭部で束ね薄い眼鏡を掛けた彼女は、身体の線を

強調した紺のスーツをまとったその姿にも左右されているのだろうが、いまだ少女の雰囲気卒業出来ないでいるフィオナと比べると年齢差以上に大人の雰囲気を漂わせる女性であった。

しかし、その瞳はあくまでも冷たく鋭い。

かつて彼女を見たヴァルターは、フィオナに向かって「あの女は、まるでむき身の刃だな」と評したことがあった。

そのセレンが入れた珈琲の置かれたテーブルに、ふたりはエミールに勧められるまま並んで着席した。

執務席を離れたエミールとセレンとが、彼らと向かい合うようにして腰を下ろす。

「少佐。防衛部隊<sup>ガード</sup>の状況はどのようなものかね？」

まるで世間話を切り出すようにエミールが口を開いた。

“少佐<sup>メジャー</sup>”とは、アナトリアでヴァルターに与えられたいわゆる名誉階級だ。

それは、彼が保有していた軍の最終階級に由来する。

現実には、「軍隊」という官僚組織を持たないアナトリアにそういう名を持つ組織的階級は存在していなかった。

異なることを聞く、とヴァルターは感じた。

部隊の訓練状況に関する報告書であれば、きちんとしたものを定期的に上げているはずだ。

もちろん、わざわざコロニー代表に名指しで呼び出されてまで報告しなければいけないほど重要な内容でもない。

「標準型<sup>ノーマル</sup> A C 部隊に関しては“実戦”で使える練度にあるのが、まあ全体の三割といったところですよ」

違和感を感じながらも、ヴァルターは淡々と彼の問いに答えた。

「それ以外に関しては、治安維持任務に就けるのがようやく、というレベルでしょう。武装勢力による襲撃を受けた場合、かなりの耐久を図ることは可能ですが、現状では小隊長以上の指揮官が完全に不足しています」

専門的な教育を受けていない素人がパートタイム的に戦闘部隊



を編成したところで、それは“烏合の衆”にしかなりえませんが、ヴァルターはそう言いかかったが、辛うじて喉の奥で押し止めた。

仕方がないのだ、と彼は思った。

コロニーの防衛部隊が望んでいるのはあくまでも重装備の“警察権力”であり、文字どおりの“軍事力”ではないのだから。

もちろん、アナトリアを束ねる地位にあるエミールもそのことは熟知しているはずだった。

優秀な為政者であればあるほど、軍事面に暗い確率は加速度的に減っていく。

例え、それらの標榜するスローガンが“絶対平和”などというおとぎ話であつてもだ。

「なるほどね」

いかにも感心したかのような態度を装って、エミールは言った。

「名にしおうAC特殊部隊『エクスカリバー』の元隊長。八四機撃墜の伝説的AC乗り、<sup>レイウン</sup>『ジェットストリーム・ヴァルター』がそう言うのならば、それが真実なのだろう」

ジェットストリーム・ヴァルター。

それは、ヴァルター・ノボトニーが泥沼のユーラシア戦線において初のトリプルエースとなった時 すなわち、彼が一五個目の撃墜マークを乗機に刻んだおり、当時の報道機関がたてまつったふたつ名であつた。

解決の糸口すら見えない局地戦の連続に根をあげかけていた政府や国民は、例えそれに何の意味もなからうと知ってはいても、軍事的“英雄”の登場に熱狂した。

あるいは、そうしなくては人としての理性を保てなかったのかもしれない。

もつとも、それを知ったヴァルター自身は、「勲章だのなんだのよこすくらいなら、ACの一機でも持ってこい」と、従軍記者に毒突いたそうだ。

エミールは、おそらくそのことを十分にわきまえた上で彼の実績と異名とを口にした。

エミールは、偏屈な学者のように無意味な言葉の羅列を心底忌避する傾向がある。

その彼が一度言葉を発したからには、必ず何かの意味があるはず。黙ってコーヒーカーップを口に運びながらフィオナはそう感じていた。

エミールの言葉が終わるのを見計らって、セレンが幾ばくかのファイルをヴァルターと、そしてフィオナとの前に差し出した。

厚みは大したものではない。

ただし、その表紙には“外秘”の文字が赤く記されていた。

それを見てヴァルターはかすかに眉をしかめ、フィオナは少しだけその目を丸くする。

「君たちふたりに来てもらったのは、その計画に協力してもらいたかったからだ」

そんな両者の様子を省みることなく、エミールは彼らに告げた。

「我がアナトリアは、新しい産業として“傭兵業”<sup>マーセナリー</sup>を選択することとした。議会には根回しが済んでいる。今日は君たちから忌憚なき意見を聞きたいと思っている」

「傭兵……ですか？」

その発言が、余りにも突拍子なく聞こえたのか、フィオナの口からたちまち否定的な疑問符がこぼれ出る。

「到底現実的な案とは思えません」

彼女は軽く目を伏せ、頭を左右に振ってみせた。

いや実のところ、フィオナはそんなことを言いたい訳ではなかった。

彼女が内心でエミールに尋ねたかったのは、なぜ自分のような技術者にそんな議題が提示されたのか、ということだった。

今現在、フィオナはアナトリアの技術研究所にて企業から依頼されたAC制御技術の研究開発に従事している。

研究所内において彼女は頭ふたつ分ほどの若輩者ではあったが、父親であるイエルネフェルト教授から直接指導を受けたことを理由として、現場では高い発言力を有していた。

間違いなく、アナトリアにとって重要な人材のひとりと言える。だが、本件はそのような技術面とは無関係で、完全なる軍事の範疇にこそ存在していた。

アナトリアでは希少種レットデータとすら言えるヴァルターのような“正規軍人”であるならいざ知らず、自分のような軍事の素人に意見を求めるべき内容だとは到底思えない。

彼女は、ふと隣に座るヴァルターへと視線を移した。

彼は無言でファイルのページをめくっていたが、とある箇所ですその手を止めた。

その目が一瞬見開かれ、視線が一点に集中する。

「何があつたの？」と、問い掛けようとするフィオナを無視して、ヴァルターは震える声でつぶやいた。

「……ネクスト」

「え？」

彼女はその言葉に反応し、自らも手元の資料をあわてて開く。そのページには、コロニー・アナトリアが保有する研究用のネクスト機体が詳細なデータと共に載っていた。

「『ノートウング』……なぜ？」

フィオナは一瞬絶句して、次いで真向かいに座るエミールに視線を投げた。

この時、彼女ははっきりと理解した。

自分が必要とされたのは、このためだったのか、と。

ネクスト。

「国家解体戦争」において「企業連合体」が一方的な勝利をおさめる原動力となった、人類の生み出せし鋼鉄の破壊天使メカニカル。

それらが戦場に出現した時、その想像を絶する“力”の源を知

る者は、彼らを生み出した「企業連合体」内部においても極少数であった。

しかし、「国家解体戦争」が終結して数年が経過した現在、その謎の一端はすでに万人の知るところとなっていた。

今やノーマルと称されるようになった従来型ACとネクストとを明確に分けるものは、いわゆる「コジマ技術」と称される一連のテクノロジーであった。

「国家解体戦争」をさかのぼること数年前に発見され、「企業連合体」の一角である「アクアビット」社によって実用化された新物質　発見者の名前を取って「コジマ粒子」と名付けられたその物質は、主にエネルギー分野において人類に大幅な技術革新をもたらした。

いや、革新どころの騒ぎではない。

それはまさに“革命”であった。

特に、大出力ジェネレータの燃料となる超高密度水素吸蔵合金の開発と超高出力非化学ロケットの実用化は、兵器開発のさらなる進化をも呼び起こす引き金ともなった。

ネクストにはこの双方、それも最新技術を惜しみなく注ぎ込まれた新製品がコストを度外視して投入されていた。

ゆえにネクストは、従来型の地上兵器が決して手にすることの叶わなかった圧倒的な機動力を、文字どおり自家薬籠のものと出来たのだった。

蓄積されたコジマ粒子を一気にプラズマ化することで爆発的な推力を得る「クイックブースト」「オーバードブースト」と呼ばれる推進システムは場合によっては瞬時に亜音速を超えるほどの、すなわち最先端の航空機にすら匹敵する加速力を地上兵器の亜種に過ぎないネクストに付与することとあいなつた。

陸上兵器の機動力が航空機を凌駕する。

それは、陸戦を主体とする機動兵器にとってまさしく夢のような出来事と言えた。

加えてネクストに搭載されたコジマ技術を象徴する「プライマ  
ルアーマー《PA》」と呼ばれる不可視の防護膜<sup>バリアー</sup>。

濃密なコジマ粒子を機体周囲に安定して還流させることで接近  
してくるすべてのエネルギーを減衰させるという、まったく新しい  
形式の防御システムだ。

これにより対PA対策を考慮していないこれまでの兵器 単  
純な質量、熱、速度を主な原理として目標の破壊を目論んだ攻撃手  
法は、そのほとんどがネクストにとって螻蛄の斧と化してしまった。  
この両者を「剣」とし「盾」としたネクストが、古い時代の延  
長に過ぎない従来型の兵器群をもつともしなかつたのは、まさしく  
“進化の現実”そのものであったと言えるよう。

優勝劣敗は、神ですら否定出来ない残酷な理であったのだから。  
だからこそ、それは当面の勝者たるネクストをも見逃してはく  
れなかつた。

技術の発展は、現在の最新技術を容易に過去のものへと変化さ  
せてしまうからだ。

ゆえにこそ、「企業連合体」は自社のネクスト技術をさらに先  
へと進めんとして、今この瞬間にも様々な研究努力を怠つてはいな  
い。

そして、コロニー・アナトリアはそんな企業群によるネクスト  
技術開発競争の、いわゆる“おこぼれ”を授かることにより辛うじ  
て生き長らえてきたのだつた。

「国家解体戦争」が終結し多くの人々がコロニーに押し込めら  
れようとしていたころ、アナトリアはそのAC制御技術の専門性を  
最大の商品として「企業連合体」との間に独自の利害関係を構築し  
ていた。

“ネクスト制御技術の提唱者<sup>バイオニア</sup>”の手による、新しい商品の開発  
と洗練。

イエルネフェルト教授の存命中、「アナトリア」は「企業連合  
体<sup>メガコンクローマリット</sup>」の中核をなす六つの巨大複合企業群 「グローバル・アーマ

メンツ」、<sup>B</sup>「ベルナルド・フェリックス・ファウンデーション」、  
「イクバル」、<sup>F</sup>「ローゼンタール」、<sup>F</sup>「インテリオル・ユニオン」、  
「レイレナード」 俗に「ビッグ・シックス」と呼ばれている  
それらの間を極めて巧妙に渡りきった。

本来なら単独の企業グループを相手とする経済活動のみを許されるコロニーとしてはまったくの例外的に比較的自由なそれをアナトリアが行えたのは、文字どおり教授の知識と名声とによるところが大きかったのである。

であればこそ、教授の死がアナトリアの根幹を揺るがすこととなったのは実に必然的な出来事だと言えた。

エミールは蕩々と語った。

教授の死によってアナトリアは技術的な専門性を失い、今や存亡の危機にあると言ってもいい。

天然資源に乏しいアナトリアはこのままではいずれかの企業グループによって自由を奪われ、他のコロニーと同様、経済植民地として取り込まれてしまうだろう。

ゆえに、アナトリアは現在手元に残る“資源”を最大限に駆使し生き残りの道を模索しなくてはならない。

その手段のひとつが、中立の立場ですべての企業に分け隔てなく“軍事力”によるサービスを提供する“傭兵業”であり、アナトリアはその手段を実現化するための強力なカードを保有している。

「それが、我々が保有する技術試験用のネクスト機体『ノートウング』の存在だ」

静かだが力強く、彼は断言した。

「ノートウング」 神話の英雄ジークフリードが手にする龍殺しの魔剣。

その名を与えられたネクストは、エミールが言うとおりアナトリアがAC制御技術を開発するために保有していた、いわゆる試験用機体である。

一概に試験用と言っても性能的には決して馬鹿にしたものではない。

機体を構成する各種のパーツは「ビッグ・シックス」が自社ネクストのために開発した部品とほぼ同等の能力を発揮する代物であり、その中には運用テストのために持ち込まれた生産前の試作品プロトタイプすらもあつたのだから。

フィオナは、手元の資料に記載された「ノートウング」のデータを何か禍々しいものでも見るかのように凝視していた。

ノーマル、ネクストを問わず、これまで生産されて来たACにはそれ以前に国家が保有していた兵器とは明確に異なる独特の機能があつた。

それは「工業規格の共通化により、各部のパーツを自由に交換することが可能」と、いうものである。

すなわち、ACは機体の各所を必要に応じて選択しそれらを組み合わせることによって、まったく性能の異なる機動兵器へ生まれ変わることすら出来るのだ。

当然「次世代型AC」であるネクストも、使用用途に応じたパーツを積極的に選択することでさらなる先鋭化が可能な構造となつていた。

しかし、現在存在が確認されている有力ネクストの多くはそれらを所有する企業グループによって開発されたパーツアーキテクトのみで構成されているのが実情である。

なぜか？

理由はしごく簡単に想像出来た。

いかに連合アライアンスを結成したとはいえ、本来ならば「企業連合体バックス」に所属する各社は企業活動的な面で完全なる「競争相手」に過ぎない。

その彼らが、自社の技術力の結晶であるネクスト用部品をそう易々と同業他社相手に販売する訳がないのは当然だ。

おそらく、運用されるネクストの数が増え、それらが一定の市場を形作るようになるまではこのままの状態が続くだろう。

もつとも、アナトリアのネクストがいかにかにそうしたしがらみに捕らわれないからといって、それは利点のみを生む訳ではない。

先にアナトリアへ提供されたネクスト用部品が企業の保有するネクスト機体に使用されたものと“ほぼ”同等の能力を発揮すると評したが、それはつまり実際の性能面で対等以下の可能性が高いということにも言い換えられる。

当たり前と言ってしまえばそれまでだが、狡猾な「企業連合体」各社が自社の企業秘密を、いかに中立の立場を標榜しているとはいえ第三者に公開する訳もないのである。

だが、何はともあれアナトリアのネクストが、ACと呼ぶにふさわしい機体構成の柔軟性を獲得出来た事実は極めて大きな意味を持つ。

「ノートウング」は、ACとしては標準的な人間型の外見を有していた。

ただし、その四肢は一般的な人体と比較して見るからに図太くある意味奇形的ですらある。

それは本機の機体本体がもつばら防御力と積載量を重視して構築されたことを何よりも雄弁に物語っている。

そして、脚部が持つ大きな積載容量を贅沢に使用することで搭載を許されたその兵装は、彼女に求められた性格を明確にうかがわせていた。

右腕部マニピュレータには「メリエス」社製の高出力レーザーライフル。

左側下腕部には「オーメル」社が開発した近接戦闘兵器の試作品。

背部左側には「有澤重工」社の伝統的な逸品である二五四mm多用途榴弾砲。

それらの武装を背部右側と左右の肩にそれぞれ装備された「MSACインターナショナル」社の誘導弾投射機が支援する。

一見すると不必要なまでの重武装。



それは、間違いなく単機でもってさまざまな戦場へ対応することを目論んだ選択であった。

なるほど、確かに様々な企業の部品を寄せ集めただけの“ろくでなし”ではあるが、「上」は少なくとも本機をソートウングまともに運用する意思だけは持っているようだ。

厳しい表情を崩すことなく、ヴァルターは内心でそんな評価を下していた。

ネクストを使用した傭兵。

その存在を魅力的だと捉える一派はあることだろう、と彼は思った。

なんとと言っても、ネクスト一機の持つ戦闘力は従来型の兵器で武装した中規模の戦闘部隊を完全に凌駕するのである。

それは、四年前の「国家解体戦争」での実績によって、そして何よりもヴァルター自身が得た余りにも苦い経験によって完全に証明済みの現実だった。

また、既にネクストを保有し運用している「ビッグ・シックス」にしても利点メリットはある。

数少ない虎の子である自社ネクストを地域紛争のような煩わしい雑用から解放することが可能となれば、彼らはそれをより政略的な任務に差し向けられるからだ。

もちろん、単なるコロニーに過ぎないアナトリアがある意味で「企業連合体」の象徴とも言えるネクストを運用することに、彼らはバックスいい顔をしないだろう。

それらを説き伏せ現実的な立場を容認させるには、疑いなく老練な政治力が要求されることとなる。

もつとも、本件自体に「企業連合体」が最後まで抵抗してみせるような真似はしまい、とヴァルターは予想していた。

利潤を求める企業にとって平時に維持しておくべき「即応兵力」、その軍事的負担を他者に委ねておけるというのは相当の旨味があ

るからだ。

とは言うものの、その場合は兵力を委ねる相手があくまでも“忠実である”という条件が付く。

しかし、おそらくはこの点でも「企業連合体」はアナトリアの提案を無碍にはしないとされた。

どのみちコロニー単独では、わずか一機のネクストを保有したところで到底「企業連合体」に刃向かうことなど出来はしない。

自給自足の手段を自らの勢力圏に持たないコロニーにとって、「企業連合体」との経済交流が断たれるということは、そのままコロニーそのものの滅亡に繋がるからである。

であればこそ、「企業連合体」が“役に立つ番犬”として「アナトリアの傭兵」を認める可能性は相当に高かった。

一見して荒唐無稽の案に思えた本件も、改めて現状を深く洞察すれば意外と良案に思えてくる。

策士め。

ヴァルターは険しい視線を、目の前で微笑みすら浮かべているエミールに送った。

狐の尻尾をどこに隠し持っていた？

「本機を見てどんな評価を下すかね？ ノボトニー少佐」

その視線の意味を知ってか知らずか、エミールは、唐突にヴァルターへと話題を振った。

ヴァルターは答えた。

「部隊連携による火力支援を考慮に入れない運用を行うのであれば、少々機動力を犠牲にしても火力と防御力を重視した本機のコンプットに誤りはないと考えます。搭乗者の技量にもよりますが、機体の運動性は腕で補うことが出来ても火力と防御力はそうもいきませんから」

「まるで他人事のように言うな、君は」

苦笑してエミールは言った。

「まあ、気に入ってもらった、と捉えておくことにするよ。そ

れでよろしいかな？」

「どういう意味でしょうか？」

もったいぶったエミールの物言いに、思わずヴァルターは反応した。

「仰っていることが、よくわかりませんが」

「おお、そう言えばまだ本題に踏み込んではいなかったな。私としたことが済まなかった」

大袈裟な態度でわざとらしく驚いてみせたエミールは、次の瞬間有無を言わせぬ政治家の顔となってヴァルターに告げた。

「本機に搭乗を予定しているのは君だ。『ジェットストリーム・ヴァルター』」

「自分が、でありますか？」

ヴァルターが驚きの声をあげた。

それは、いつもの彼らしからぬ情緒反応であった。

現存する兵器として比類なき戦闘実力を有する「アイマードコア・ネクスト次世代型AC」

しかし、その登場はかつてのノーマルのごとく既存の兵器を押し退け軍事史に特筆すべき状況変化を引き起こしはしなかった。

もちろん、“旧時代の主力艦なみ”とまで評される膨大な生産コストはネクストをもって主力兵器となさしめぬ大きな一因には違いない。

だが、その根本の理由はそれではなかった。

ネクストには、現段階の技術では乗り越えられない、ある意味で致命的な欠陥が存在していたのだった。

そのひとつは、ネクストがネクストたる由縁、コジマ技術に由来するものである。

ジェネレータ推進装置、プライマルアーマーそしてPA。

コジマ技術を根幹機能として使用するネクストは、その行動にともない必然的に外部へと大量のコジマ粒子を放出する。

特にコジマ粒子で構成された障壁と言ってもいいPAを展開し

た際、それが顕著な数字を示すことぐらいは子供でもわかる理屈だ。問題は、このコジマ粒子が生体に対して極めて有害な効果をもたらす悪質な環境汚染物質だということだった。

その有害性は、かつて人類が実用化一步手前にまで到達していた原子力　いわゆる、核分裂反応によって生産される放射性廃棄物にすら匹敵する。

両者の違いは、コジマ粒子が放射線を発生させず次世代に遺伝的な影響を残さないことぐらいだった。

一定量のコジマ粒子を取り込んだ生体はその生命活動を著しく減衰させ、極めて短時間で衰弱、遂には死に到る　という研究結果が研究用動物を使用した生体実験にて確認されていた。

その毒性は、特定種の重金属による中毒症状に比較的近い。

加えて自然界に存在する天然物質でないコジマ粒子は、人の手により物理的な除去作業を行わない限りほとんど永遠に毒性を保ち続けるのであった。

ネクストが投入された地域は、多かれ少なかれこのコジマ粒子による環境汚染を覚悟しなくてはならない。

それゆえ、運用する側としては継続した長期間の作戦行動にネクストに従事させる訳にはいかなかった。

そんなことをすれば、拡散したコジマ汚染を收拾出来なくなってしまうからだ。

その投入条件の難しさゆえ、今のところネクストはいわゆる機動打撃兵力としての運用しか許されてはいない。

拠点襲撃や集結した敵部隊に対する一撃離脱以外に使用できる環境が存在しないのである。

どれほど圧倒的な戦闘力を発揮しようとも主力兵器として考えた場合、これだけで絶望的な大問題であった。

そして、もうひとつの理由がネクストを操る搭乗者に関する問題だ。

言うまでもなく、ネクストが保有する圧倒的な機動力はその戦

闘力を語るには欠かせない要因である。

ただし、その尋常でない運動性は既存の操縦システムで制御することが実質“不可能”と判断されていた。

それを実現するためには、状況判断から実際の操作に到る反応速度に生体の神経速度に匹敵するものが必要との試算がなされていたからだった。

人体が外部からの情報を認識し、大脳がそれを判断、そして肉体に行動を命じて機械を操作する　　という一連の動作には約二・五秒が要される。

それは、人間が人間である限り決して越えることの出来ない限界であった。

もちろん、高度な訓練によって本来なら大脳で行うべき状況判断を肉体の反射行動に委ね、限定的にその壁を突破しようとする試みはある程度の成功を収めていた。

特に近代的な軍隊においては、緻密な操作を求められる機動兵器の運用をまかされた優秀な兵士たちに対し学術的にも確かな効果が認められる濃密な鍛錬トレーニングが施されてきた。

しかし、それはあくまでも対処療法に過ぎなかった。

ネクスト登場以前、一騎当千の活躍で戦況を左右するとさえ言われたノーマルACの搭乗者パイロット　死を招く不吉な存在という意味を持つ「渡り鴉レイザン」の異名で呼ばれた彼らですが、結局は単独での戦闘能力向上を半ば断念し、部隊運用と戦術行動を中軸にして戦うようになっていた。

ひと握りの人的資質にすべてを委ねるよりも、優秀な組織としての戦闘部隊に頼る方が結果的には有効となる。

“法則と物量”の思想。

「国家解体戦争」が勃発するまで、その思想は満点とは言えないまでも十分に合格点を与えられる回答だと思われていた。

ネクストの登場がその常識を打ち破った。

それらを開発した「企業連合体」の技術者は、従来の常識をく

つがえすだけのシステムを開発し、既に現実のものとしていたのだ  
った。

それは「AMS」と呼ばれるシステムであった。

平たく言えば、搭乗者の感覚を機械そのものと電気的に同調させ搭乗者自体を一種の生体コンピュータとして運用するシステムのことだ。

AMSを通じてネクストの統合制御体と接続した搭乗者にとって、ネクストの目は己の目であり、その腕は我が腕となった。

まさしくマン・マシン・インターフェイスの究極の姿だと言っている。

それは、最先端の脳生理学、神経科学の勝利であった。

これにより、ネクストに搭乗する操縦者は従来のAC操縦者に付けられた通称「レイヴン」とは区別され、「機械と接続する者」という意味から「リンクス」と呼ばれるようになる。

選ばれたひと握りの戦士が戦場を支配する。

太古の昔に人類が通り過ぎた戦争の、それは再来だとすら思われた。

AMSを活用さえすれば、それまで複雑極まりない操作を要した機動兵器の操縦 搭乗する人間に合わせて性能のデチューンすら行われていたそれらの宿痾を、ほぼ完全に取り除くことが可能だ。最先端技術により構成されたネクストによる赫奕たる戦果が、それを何よりも雄弁に物語っている。

否定する者は誰一人としていなかった。

しかし、それには致命的な前提条件が存在していた。

AMSによりネクストの制御系と一体となるリンクスには、一極めて特異な知的能力が要求されるのだ。

想像してみればわかるかもしれない。

ネクストを操縦する際、搭乗するリンクスは自らの肉体を制御する一方で、もうひとつ、ネクスト本体という別の身体をも“認識”し続けなくてはならないのである。

それは、後天的な経験によって獲得することが難しい、文字どおりの“才能”に等しかった。

生まれつき備えた特殊能力によってでしか制御出来ない兵器コントロール。そんなものが「軍隊」という組織の中で根幹をなすことなど、ありえる話ではない。

そもそも、人間が人間によって形作つた“組織”という制度そのものが、社会の大多数を占める「凡人」によって運営されることを前提として成立しているのである。

仮に技術が進歩しリンクスの量産が可能となった場合でも、賢明な社会主体である「企業連合体」は、軍事力の中核にネクストを置くことはないであろう。

それは、制御困難かつ代替不可能な“特定の個人”という代物に絶大な力を与えるのとイコールであるからだ。

この時、ヴァルターが見せた驚きの原因となったのはそこであった。

確かに、レイヴンとして幾多の戦火を潜り抜け伝説的とすら呼ばれた彼ではあったが、その実績はネクストを操る資格を約束するものではない。

ネクストを操縦するにはAMSに対する適性を有している必要がある訳だが、彼はその要件を満たしていなかったからだ。

だから、本件をエミールから聞かされたヴァルターは自らの役割を純粹に戦闘指導官であるコンバット・アドバイザーと予想し、今の今までその腹積もりでいた訳である。

それがくつがえつたのだ。

まさしく降って湧いたような展開にヴァルターが思わず目を丸くするのも、やむをえない話であった。

「先日行った演習の際、アナトリアのノーマル搭乗者すべてに対して秘密裏にAMS適性の検査を実施した」

そんな彼に向かって、こともなげにエミールは告げた。

「その結果、君にAMS適性が発見されたのだ。微弱な数値ではあったがね」

彼はその目をわずかに細め、こころなしに首を突き付けるような態度を垣間見せつつ次のように言葉を続ける。

君たちも知っているとおり、アナトリアの経済は逼迫した状況にある。

従って、本件に関しても悠長な時間を掛けていられないというのが現実だ。

もちろん、AMS適性の持ち主をもっと根気よく調査すれば、君よりも優れた数値を発揮する者が現れるかもしれない。

しかし、その人物が実戦において使いものになるかどうかはまったくの未知数だ。

比較して君ならば、そう「ジェットストリーム・ヴァルター」という異名を戴く伝説的なレイヴンである君ならば“戦士”としての経歴に問題はない。

繰り返し言うが、我がアナトリアには時間がないのだ。

新しい戦士を育成する猶予が我々に与えられていない以上、君に代わる人材など思いも寄らない。

「もちろん、この場ですぐに返事をもらおうとは思っていない」「エミールは、こう言って言葉を締めくくった。

「明日の昼まで考えておいてくれたまえ。よい回答を期待している」



### 傭兵(3)

ヴァルターとフィオナの両名が退室した後、エミールはいささか疲れを滲ませた溜息をひとつついて、軽く胸元のネクタイを緩めた。

彼らの前ではきちんとそろえていた両脚を今はだらしく組みソファの背もたれに右腕を掛けてすらみせる。

傍らに立つセレンの眼などそもそも考慮にすら入れていない、そんな態度であった。

内心で彼は毒突く。

こんな役目はもとより自分が背負い込むような代物ではないのだ。

大体一介の機械屋に過ぎない自分のような人間が国家元首の真似事を演じなければならぬ事態に陥ることこそ、本来ならばあってはならないことなのではないか？

無能にして無責任な政治屋どもめ。

腹の底から、そう叫びたくなってくる。

きさまたちが今手にしている権力とやらにふさわしい責任を果たしてさえいれば、アナトリアがここまで追い詰められることにはならなかったのだ。畜生め。

“公正な選挙”によつて民衆から政策実施の権限を委託されたコロニー・アナトリア評議会の面々を思い出し、エミールは多量の苦虫を一息に噛み潰した。

アナトリアを襲った経済危機は、確かにイエルネフェルト教授の死に端を発する。

しかしながら、彼がこの世を去ったという事態そのものが現状を呼ぶ由来となった訳では決してない。

それは、あくまでも切欠に過ぎなかった。

教授の死により、それまで彼個人の持つカリスマを旗印として

いたアナトリアは大きくふたつの勢力に分割されることとなった。

教授の教えを受けた技術者たちからなる「研究所」勢力と、主に「コロニー」の行政を司ってきた「議会」勢力と、にだ。

両者は偉大な指導者亡き後の「コロニー」が向かうべき道筋について、まったく異なる未来図を描いていた。

前者は“先端技術の寡占化”による独自性をもって企業と対等の立場であろうと目論み、後者は“知的財産の積極的な公開”によって企業との接近を図った。

“アナトリアの独立”というものを考えた場合、一見して研究所勢力の意見が正しいように思える。

だが、事はそれほど単純ではなかった。

議会勢力は、いずれアナトリアの持つ先端技術が他企業にキャッチアップされるであろうことを確実視していたのである。

なればこそ、アナトリアが技術的優位を持っている今のうちに「企業連合体」との太いパイプを築きあげ、より高い値段でそれら売り払うべきだ、と彼らは考えていた。

その時が来てからでは遅い。

議会勢力に籍を置く人々は、そう主張して大きく拳を振り上げた。

これもまた一理ある意見であった。

ただし、議会勢力は“アナトリアの魂”を売りに出した場合の代価に対して、公正中立の立場でいられるほどには無私の姿勢を貫けなかった。

「コロニー評議会を構成する“選ばれた議員たち”は水面下で企業が提示した“アナトリアの売価”を目の当たりにした途端、たちまちのうちに醜い勢力争いを開始したのだった。

口先ではきれいごとをうたいながら、まるでアナトリアの未来のものには目をつむったかのような彼らの姿は、その筋にはまったく興味を示さない人々ですら鼻白むほどの腐臭を放っていた。

素朴な愛国心を備えた大多数の人々にとって、それは許される

べきことではなかった。

売国奴。

街をゆく一般市民の口からその言葉が評議会へと向けられる回数も、目に見えて増大していった。

私利私欲に目が眩み、自らが何をしようとしているのかすらわかりかねていた彼らの頭上に大量の冷や水を浴びせたのは、研究所勢力の一派が行った亡命騒動であった。

ヨゼフ・ピュックラー博士。

イエルネフェルト教授の右腕にして、研究所勢力を代表する、いわゆる「一二博士」と呼ばれた者たちの筆頭。

その彼が「一二博士」の過半を引き連れ、アナトリアのライバルともうたわれた技術開発系コロニー、「アスピナ」へと出奔。

自分たちの生命・財産の保証、そして政治的立場の保護を同地評議会に対し求めたのだった。

アスピナ評議会は満場一致でそれを了承した。

アナトリア評議会からの正式な抗議は一顧だにされなかった。当然だろう。

ピュックラー博士の“亡命”はアスピナの利に叶うだけでなく、人道的な面から見ても非の打ちどころがなかったのであるから。

アスピナの市民権を得たピュックラー博士とその同調者たちはアナトリア政府の無策・無能をあげつらい、口を極めて罵った。

アナトリアは自分たちの故郷だ。

しかし今のアナトリアは故郷と呼ぶに値しない、とまで言い切った。

この亡命劇を、アスピナが弄した露骨な策謀だ、と喝破する者もアナトリアの内外に少なくはなかった。

だが、それを公然と証明する決定的な材料は存在せず、仮にそれがあつたとしても個人の自由意志という錦の御旗を打ち倒せるだけの説得力を持つとは到底思えなかった。

かくしてアナトリアが持つネクスト関連技術の先進性は、実に

あっさりと失われた。

面前に叩きつけられた現実を目の当たりにした研究所勢力は絶望し、議会勢力はこの深刻さに頭を抱えた。

双方が思い描いていた青写真が文字どおり白紙に戻されたからであった。

政治的責任を取って、アナトリアのコロニー評議会は即日総辞職した。

そして、彼らのほとんどが続いて行われる選挙に再出馬しない意向を表明した。

引退を口にする者も多かった。

身を引いた議員の大半が、後に殊勝な言葉を口にした。

いわく、自らの政治的力量的不足を痛感した。

いわく、コロニー存亡の危機にあたり、より柔軟な考え方の出来る後身へ道をゆずるべく云々。

なんとも耳に心地よい台詞ではあった。

まるで判を押したかのような類似性がそこに見られなければ、ある程度の説得力を有したかもしれない。

だが、建前の裏に隠された彼らの本音をアナトリアの市民は敏感に察していた。

つまり、沈む泥舟と運命を共にしたくない、ということ。

いつの時代も民衆は、為政者が想像するよりもはるかに優秀で現実認識力に長けている。

それは皮肉なことに真実であった。

人々が、故郷の舵取りを醜態を晒した議会勢力でなく研究所勢力に委ねることを望んだのは、ある意味で当然の帰結であった。

本来コロニー・アナトリアはイエルネフェルト教授によって導かれてきた“技術屋の牙城”であった訳だから、畑違いの者たちを自らの代表として選出することへの抵抗も、民衆の中には少なかったであろう。

一介の機械屋を自認していたエミール・グスタフという人物を

コロニー代表とする直接的な要因がここに誕生した。

残された「一二博士」全員の推薦を受け、研究所勢力をがっちりひとつにまとめあげたエミールは、続く総選挙で勝利を収め、名実ともにアナトリア代表としての地位を確立した。

彼の政権に対する民衆からの支持率は七割を超え、政治的基盤は極めて安定している。

長期政権はほぼ約束されたようなものだった。

例えそれが彼の希望した結果と異なっていたとしてもだ。

エミールが背負い込んだ政権の前途は、あまりにも多難であった。

財政的な水準を示す数多の数値は日を追うごとに低下し続け、債権の引受先に困窮するがゆえに技術研究に要する費用さえもが枯渇しつつあった。

保有するネクスト機体を活用した新たなサービス。

確かにそれはアナトリアを救う窮余の一手であるのだろう。

だがしかし、その実施はこれまで研究所勢力が頑なに拒んできた政治的な独立性に反する結末を引き起こす。

なぜならば、「企業連合体」との摩擦を発生させない範疇での軍事力の行使とは、すなわち「企業連合体」そのものへの接近を意味するも同然であるからであった。

矛盾を抱えた「アナトリアの傭兵」

このプランを聞かされたふたりの人物は、ほとんど対称的な反応を示した。

新たにリンクスとしての役割を提示されたヴァルターが即断を避けた一方で、フィオナは明確に否定的な意志をあらわとした。

「武力の行使を商品にするなんて許される行為ではありません」  
彼女は、半ば感情的になってまでエミールに食いさがあった。

「ましてや、ネクストを使用するなどもつてのほかです。コジマ汚染について、あなたはわたしよりもはるかに御存知のはずでは

なかつたのですか？」

倫理的にはまったく正しい意見と言えた。

積極的に軍事力を用いること。

特にネクストという強大な戦闘力を孕んだ兵器を投入する事例は、凄惨な戦場を形成することが明白であつた。

人が人を殺傷する行為が罪なのであれば、武力の行使こそその最右翼と呼ぶべきものであるう。

否定すべき内容は、そこにはない。

だが、彼女が表したその言い分がいわゆる建前に過ぎないことを、この時エミールは完全に看破していた。

彼は、フィオナ・イエルネフェルトという娘がまだ理想主義的な面を色濃く残している事実をほぼ正確に認識している。

なるほど、確かに暴力を用いた金儲けなどは、倫理的に、そして人道的に許容される行為ではないのかもしれない。

だが、人は食わねば生きてゆけない。

例え後世に悪名をもって知られるようになったとしても、民衆を束ねる為政者は彼らの生活を保障する責務を負うのだ。

フィオナは、その一面において間違いなく理想主義者であつた。しかしながら、いわゆる莫迦ではない。

むしろ、その聡明さは極めて冷徹な現実主義者に匹敵するとさえ言つていいだろう。

それゆえに彼女は、目の前に広がる現実という存在を十二分に理解しているはずだつた。

そして、代案を出せない反発が決して建設的な行動ではないということも。

にもかかわわらず彼女が青臭い書生のような発言をした背景には、ヴァルター・ノボトニーという男に対してフィオナ・イエルネフェルトという娘が持つある特定の感情が存在するのだと、エミールは確信していた。

A M Sによつて人為的にネクストの統合制御体と同調するリン

クスには、極めて高い精神負荷ストレスが掛かる。

そして、それはリンクスの持つAMS適性が低ければ低いほど飛躍的に増大し、場合によってはその脳神経系に重大な障害を残すといった事例も報告されていた。

軍事専門家であるヴァルターにはピンとこない数字の羅列に過ぎなかったかもしれないが、次世代ACネクストについて正規の教育を受けたフィオナにとって、手元の資料に掲載されたデータは無視することの出来ない代物であったのだろう。

彼女はその数値を一見しただけで、「ノートウング」との同調クリティによりリンクスたるヴァルターが受ける精神負荷を、まさに“致命的”カルなレベルだと判断したに違いない。

だからこそ、あえて強い言葉で反発してみせたのだ。

己の伴侶となるべき男性をそんな危険な状況へ送り込ませないようにするため。

そして、綺麗事をもってその根拠となした理由は、今は亡き父親への憧憬とも言えるコロニー・アナトリアへの礼儀であろう。

自らの私情を理由に故郷の危機を救うべく立案された政策を否定する。

それを彼女は己の“わがまま”に過ぎないと自己判断したのだ。フィオナには、自分自身が背負い込んだ責務を越えて自らをアナトリアの公だと見なす悪い癖があった。

彼女はアナトリアの為政者ではないし、その責任の一端を担っている訳でもないのに。

おそらくは、生真面目で責任感の強い彼女の性格がもたらした方向性なのだろう。

偉大な父親を持った娘として、そうしなければならぬという強迫観念に捕らわれているのかもしれない。

そんな彼女をよく知っているがゆえに、この時エミールは軽い自己嫌悪に陥った。

自らが巡らした策略の糸を唐突に思い出したからであった。

彼は、ヴァルター・ノボトニーという希有な名声を持つレイヴンが今回の依頼を蹴るなどとは、毛ほども考えていなかった。

優秀な戦士であり正規の軍人として高度な教育を受けてきた士官である彼は、自らが守るべき存在のために己を危険にさらすことを許容するだろう。

フィオナ・イエルネフェルトという娘は彼にその決断をさせるに足る存在であると、エミールは踏んでいた。

それは確信に近い。

低いAMS適正からくる強烈な精神負荷とネクストに搭乗することで避けられない事象である緩慢なコジマ汚染は、間違いなくヴァルターの心身に重大な傷を残すであろう。

自分はそれを完全に理解した上で、それでも彼に依頼をし、そのためにフィオナの存在を利用した。

恩師の愛娘でもあるひとりの女性を、ひとりの男性を政治的に利用するための餌としたのだ。

もちろん、それが間違ったことだとは思わない。

しかし、それが人として正しいことだとも思えなかった。

個人が抱く特別な感情を計算し、一部の人々を意図して危険に晒してまで集団としての利益を図る。

為政者とは、果たしてそれが許されるほどの存在なのか？

その疑問に、自分は“是”の判定を下した。

あまりの傲慢さに吐き気がする。

許されることなら、自らの頭部に銃口を突きつけそのまま引き金を引きたくなるほどに。

「卑怯者だな。私は」

自嘲気味にエミールはつぶやいた。

彼の側に立っているセレンは、そんなエミールの姿を顔色ひとつ変えずただじっと見詰めていた。

そんな彼女に向けて、おもむろにエミールが語りかけた。

「時代遅れの古い戦士。そして政治的な利用価値しかない非力



なネクスト。だが、上手くいけば、これでアナトリアは救われる。約束は守ってくれるのだろうか？」

「我が『レオーネメカニカ』社を含む『インテリオル・ユニオン』は『グループは、世界に突出した勢力が出現することを望みません』いささか冷徹な雰囲気を感じさせる口調でセレンは告げた。

「アナトリアがネクストを運用することで、『企業連合体』内部におけるパワーバランスを良好に保つ第三者的な手段が成立します。そのための政治的、資金的な援助を『インテリオル・ユニオン』は惜しまないことをお約束します」

限りなく感情を廃し機械的に語られる彼女の言葉に、エミールは歯を見せて苦笑する。

あえて下品な表情を形作ったのは、セレンの台詞に己が抱いた嫌悪感を彼女自身に知らしめるためであった。

ここでも綺麗事か。

「ビッグ・シックス」ともあろう企業が、自陣営の利益を図らぬ訳もあるまいに。

要するに貴様たちは、自らに都合のいい手駒を保持したいだけなのだ。

状況が悪くなれば簡単に切り捨てられる手駒をな。

お前たちの中にあるのは企業の論理、ただそれだけだ。

利益追求のためになるなら山羊の吐瀉物でさえ喜んで口にする輩の言葉など、どこをどうすれば信用出来よう。

「『ビッグ・シックス』のひとつがそう言うのであれば、こちらはそのを信じるしかあるまいよ。どのみち賽は振られてしまったのだから」

エミールは、吐き捨てるようにセレンに告げた。

心中に深く根を張る不審を、かろうじて飲み込むことに成功する。

しかし、彼の口から這い出てきた言葉は発言者の本音を裏切らなかつた。

聞かされた者が感情を害することなど、頭から考慮に入れていない口振りだった。

もし、いささか賢い交渉者であるなら、支援者から派遣されてきた助言者へそのような言を発することをばはかるであろう。

責任を持つ者の言葉とは、常に政治的な重みを持つ。

無思慮なひと言が他者との蜜月にひびを入れることなど、対外交渉の場面では日常茶飯事であるからだった。

その一点から考えると、エミール・グスタフという人物は組織の代表としては及第点を与えられないのかもしれない。

だがもう少し深く考えると、彼がそうした危険性を孕んだ発言を行った根幹には、セレン・ヘイズという女性に対する信頼に近い何かがあったのだとも言える。

時に隠しだてせず本音をさらけ出すこと。

みつともないという向きもあるだろうが、それには時として相手の疑心を無意識のうちに雲散させうる効果がある。

ただし、前提としてそれを耳にする者が冷静で理知的な人物であることが必要だ。

感情に支配されがちな小者では、そういった効果を望むことは出来ない。

心のどこかでエミールは、セレンをそのように評しているのかもしれない。

もちろん、彼自身があずかり知らない部分において、での話だが。

彼は続けた。

「そして、その監視役として送り込まれたのが君という訳だ。

No.16『霞スミカ』 わざわざ『オリジナル』のひとりにそんな役目を押しつけるとは、『インテリオル・ユニオン』も剛毅なことだな」

「信頼の証だと思って下されば幸いです」

エミールが口にした皮肉を、セレン いや「レオーネメカニ

力」社から秘密裏にアナトリアへと送り込まれた企業リンクスである彼女、霞スミカはそう事務的に聞き流し切り返した。

「我々は、貴重なリンクスを差し出してまでアナトリアとの良好な関係を求めているのだと」

現状においてリンクスという存在には、極めて希少な価値がある。

いかに高コストとはいえ、あくまでも量産可能な製品であるネクストとは異なり、生来の資質に左右されるリンクスは工場に増産を命じて作り出すという訳にはいかない。

経験豊かなリンクスとは、企業にとって文字どおりの“至宝”であった。

そういった面を考慮に入れば、スミカの発言には一定の説得力が見出せた。

だが、エミールはその言葉を表面通りに受け取りはしなかった。

「物は言いようという訳か」と、ふたたび率直な皮肉を返す。

「御不満ですか？」

スミカの瞳がきらりと光った。

鋭刃に反射した月光のごとき、蒼く冷たいきらめきだった。

それを見たエミールは思わず口元を綻ばせた。

ポーズではない。

いささか胸襟を開きすぎたかと自省した結果、唐突に現れ出た表情だった。

「いや、密約どおりにアナトリアを援助してもらえるのならば文句はない」

繕うようにそう答えると、エミールはやにわに立ち上がった。

執務席の大きなデスクの引き出しから一本の酒瓶を取り出す。

今の世となつてからは貴重品と言える年代物のスコッチ・ウイスキーであった。

内容物の残量は、およそ半分といったところか。

それまでその存在を壁のオブジェか何かのように考えていたス

ミカから、軽い驚愕が言葉となって放たれた。

「お酒を召されるとは初めて知りました」

「こんな役目は飲まないとやっていられない場面にも遭遇するのだよ。君も付き合いたまえ。議員どもと会食するまで、まだいささかの時間がある」

エミールは棚から取り出したふたつのグラスに琥珀色の液体を注ぐと、片方をスミカに向けて差し出した。

「執務中ですが？」

「構わんさ」

スミカの反応を確認することもなく、エミールはグラスの液体を一気に喉へ流し込んだ。

## 傭兵（4）

午後六時。

勤務先であるアナトリア研究所から帰宅したフィオナが自宅の玄関をくぐるとすぐに、香ばしく食欲をそそる刺激が鼻孔を突いた。耳を澄ますまでもなく、台所の方からは油の上で何かが弾ける軽快な音が響いてくる。

要するに、彼女の相方はただいま調理の真つ最中という訳だ。もう。きちんと交代でやりましょうって、いつも言っているのに。

少しだけの不満を軽く尖らせた口先で表現すると、フィオナは自身の帰宅を短く告げる。

「ただいま」

「おう」

返事とも相槌ともつかない言葉が、奥の方から発せられた。

そこでは、似合わない前掛けを身につけたヴァルターが、見てくれとは対称的に慣れた手付きでフライパンを火に掛けている。予想どおり。

ある意味でそれは、極めて日常的な光景であった。

「あと数分待ってくれ。それで準備は完了する」

ぶつきらぼうが服を着たといった趣の態度をみせて、彼は振り向きもしないでフィオナに告げた。

炊事に関する彼女との約定は最初から頭の中にない様子だ。

当たり前のごとくそう言われて、フィオナは小さく肩をすくめる。

ほとんどあきらめの境地であった。

「ジェットストリーム・ヴァルター」がイエルネフェルト家の食卓を預かる身になったのは、いまだイエルネフェルト教授が存命中の頃であった。

そこに深い理由があった訳ではない。

ただ当時の状況では、研究所に籠もることの多かった教授や学問に忙しかつたフィオナよりも、居候である彼の方が時間的余裕を持っていたから、というのが理由とさえいえる理由となるのか。

ただし、それには“建前上の”という枕詞が掲載される。

本当の理由は、もっと別のところに存在した。より具体的かつ根本的な理由が。

ヴァルターがそれを口にしなかったのは、ある個人の名誉が関わる問題だからであった。

もっとも、彼の調理師としての腕前に大きな問題は発生しなかった。

教授の方はともかく、男手ひとつで育てられたフィオナよりもはるかに多くの自炊経験を持ったヴァルターの方が、むしろ味覚を満足させる作品をこしらえることが多かったからだ。

普段のヴァルターを知る者たちには意外とも思えるだろうが、その料理のバリエーションは実に豊富だ。

少なくとも、それだけを見て彼が無粋な元軍人だと想像出来る人間は決して多くはなかっただろう。

一応、本来の取り決めでは彼とフィオナとが一日ごと、交互に炊事を取り仕切ることにはなっていた。

男女平等などをうたう訳ではなかったが、家事全般に関する労力は出来る限り平等なものにしようとの考えが、彼らの間にそんな決まり事を成立させていた。

当初からフィオナは、そのことに対し極めて積極的であった。

今ヴァルターが身に付けているヒヨコがプリントされた可愛らしい桃色の前掛けも、彼女が自分用にとわざわざ新調してきたものだ。

なんでもどこその有名デザイナーの手によるブランド品らしい。

購入初日、嬉しそうにそれを着用したフィオナが「似合うかしら？」と彼の私室にまで見せにきた光景を、ヴァルターは鮮明に記

憶している。

そのヴァルターがせつかくの取り決めを反故にし始めたのは、彼が初めてフィオナの手料理というものを口にした次の日からであった。

要するに、初っ端から、ということだ。

それは、ヴァルターがアナトリアにやってきてすぐのことだった。

教授は緊急の会議とやらで出掛けてしまい不在。

そして、おそらくはほんの気紛れから、この日はフィオナが夕食の準備を志願して行った。

それまでは住み込みの家政婦がイエルネフェルト家の家事全般を司っていた。

家事全般においてなかなか優秀な中年女性だったのだが、たまたまその日を境に家庭の事情から本職を辞することになっていた。余りにも突発的な申し出であった。

しかし、状況の変化に戸惑ってばかりもいられない。

ゆえに、教授の提案で話し合いの場が持たれ、あえて後任を雇用するくらいならこれから自分たちで家中の事柄は片付けようとの決定が急遽なされた。

それは、その日の午後のことであった。

この日のフィオナはよほど張り切っていたと見える。

ひとりの女性として、ヴァルターにいいところを見せようと目論んでいたのかもしれない。

なにせ、彼女にとってはある意味での“初陣”だ。

意気込むなど言う方が俄然無理な相談であろう。

フィオナはどこからか持ってきた分厚い調理レシピにとらめっこしつつ、自ら買ってきた山のような食材をひとつひとつ細々と計量しながら、目的の料理を制作しようと悪戦苦闘した。

包丁の使い方も、見ている側がはらはらするほど危なっかしい。レシピとは料理の“設計図”ではなくあくまでも参考資料なの

だということが、どうも理解出来ない様子であった。

やがて、台所一帯はあたかも戦場跡のごとき惨状を晒すこととあいなつた。

それも、明らかな負け戦の。

この世で最も悲惨な情景は負け戦の跡だ、と古の賢者は述べている。

それを目の当たりにした時、さすがの「ジェットストリーム・ヴァルター」もわずかに鼻白んだ。

表情こそ変えていないものの、見えない部分ではぐっしりと冷や汗をかいていたことであろう。

戦場におもむくのは別種の、それは完璧な緊張感であった。

戦慄と言い換えても問題はなかったはずだ。

しかしそれでも彼は、食卓に並べられたなんとも形容のしがたい“製品”の数々を欠片も残らず平らげた。無言で。

そして最後に、「美味しかった？」と笑顔で尋ねたフィオナに對し、「……まあまあだ」と短く答えたのだそうだ。

その言葉の奥にいかなる意味が込められていたものか、今となつては余人の知るところではない。

ただはつきりとしているのは、今のヴァルターが自らの役割をフィオナと分担しようなどとは微塵も思っていないという明確な現実だけであった。

それは、フィオナにとって随分と不本意な結果なのかもしれない。

ただし、平常勤務が明ける時間帯にはヴァルターの側に比較的余裕があるため、日常生活としては今の流れの方が随分と理に叶っているのも事実であった。

ヴァルターの目論みどおり、食事の用意はそれから数分の後に完了した。

本職も舌を巻く手際の上でテーブルの上に複数の皿が並べられていく。



そのテーブルを挟み、フィオナとヴァルターは向かい合って席に着いた。

それは、いつの間にか成立していたお互いの定位置であった。幸いというか、「国家解体戦争」による大きな爪痕はアナトリアを含むここ小アジア半島付近にはおよんでいなかった。

主要な軍事施設の集中する北米地域や欧州、そして極東の一部とは異なり、「企業連合体」からの攻撃目標となる存在が少なかったことがその理由であろう。

彼らが可能な限り民生用インフラ施設の破壊を避けたことも、その一因と言えるかもしれない。

そのためか、アナトリアでは一般家庭の食卓に地域によっては高級品とされる自然食品の類が豊富に登ることも多かった。

今宵の料理も地産の川鱒トラウトを使用したムニエルと香草をふんだんに投入した新鮮なサラダ、それとバターライスがメインだ。

化学的に栄養素を凝縮した人口食材や遺伝子的に手を加えられたキメラ野菜などはそこにはまったく見られない。

ある意味、アウトドア料理のレシピに近い内容だと言ってもいいくらいだ。

フィオナは両手を胸の前で小さく組み短く神への祈りを唱えると、「美味しい」を連発しながら料理を次々と口に運んだ。

淑女レディという印象はそこにはない。

しつけにうるさい古風な人間であれば、子供のごとき彼女の態度を目にするやいなや、「はしたない」と強く叱責するに違いなかった。

しかし、ヴァルターの目にはそれがとても健康的でかつ愛らしく映った。

その視点は恋人を見る目と言うよりは愛娘を見る目と評した方が随分と近い。

彼自身もそれを否定することはないだろう。

半分程度は自覚もしているようだ。

ふたりの間にはひと回り以上の年齢差が存在するのだから、それもまあやむをえない心情なのかもしれない。

「ねえ、ヴァルター」

食事がひと段落した頃、ヴァルターがいれた食後の珈琲を前にして唐突にフィオナが口を開いた。

わずかに深刻そうな表情を形作る。

彼女は問うた。

「エミールの依頼、受けるつもりなの？」

「まあな」

湯気のがる熱い珈琲カップを右手に、ヴァルターは淡々と答えた。

「アナトリアには借りがあふ。俸給分の働きをしているだけじゃ、そいつを返済出来そうにないからな」

それを聞いてフィオナは、はつきりと表情を曇らせた。

彼女の父親が生前口にしていた台詞を思い出したからだ。た。 フレス

「AMSの根幹にあるのは悪魔的な思想だよ」

イエルネフェルト教授は、時には諭すように、そして時には愚痴るように同じ内容のことを語っていた。

「本来、機械というものは人間に奉仕するという目的をもって存在している。しかし、AMSは人間が機械に奉仕することを要求する。そんな莫迦なことがあるか」

幾度となくそれを聞かされたフィオナも、まず同様の考えを抱いている。

確かに、AMSは機械が全力を発揮するために人間が犠牲となることまでを求める。

詳細な研究結果は「ビッグ・シックス」を初めとする「企業連合体」から今もって発表されていないが、ネクスト技術の初期被検体となったリンクスの多くがすでにその命を失っているとも聞く。

ましてやエミールの言ったことが事実であれば、ヴァルターが持つAMS適性は極めて低いものはず。

なれば、彼がネクストを動かす際に受ける精神負荷たるや一体どれほどのものとなるのだろう。

AMSの被験者として一切の経験を持たないフィオナには、欠片も想像することの叶わない事柄だった。

フィオナは、出来うるならヴァルターがリンクスとなることを止めたかった。

目の前にいる大事な人を、少しでも危険に晒したくはなかったからだ。

近親者を持つ者として、しごく当たり前の心情と言える。

しかもエミールの計画によると、彼は「アナトリアの傭兵」として戦地に送り込まれるのだ。

それも、当の本人が何らかの利益をえるためでなく、コロニー・アナトリアの独立維持という極めて曖昧模糊な政治的目標のために

ヴァルターはアナトリアから受けた借りを返すため、と言っていた。

しかし、フィオナはその言葉を素直に受け取ることが出来ずにいた。

確かに今の彼がアナトリアを新しい故郷と考えていることに疑いはないだろう。

でも同時に、自らの心身と生活とを犠牲にしても構わないとさえ思えるほどの郷愁をこの土地に抱いてくれているようにも見えなかった。

ひよつとしてわたしのため？

彼女の中で膨れあがった想像が、ふと明確な姿を形作った。

この人は、わたしやお父さまが愛していた「この土地」を、ただそれゆえに守ろうとしてくれているのかもしれない。

彼がわたしを大切に想ってくれているのは間違いない。

そして、そのわたしが愛してやまない「故郷」だからこそ、この人はアナトリアの力になってくれようとしているのではないかしら。

もちろん、それが単なるわたしの思いあがりには過ぎないことはわかってる。

でも、この人ならそう考えても不思議じゃないように思えてならない。

もしそうなら、わたしはこの人に何をしてあげればいいのだろう。

やはり、制止するべきなのだろうか。

「フィオナ」

葛藤する彼女を現実の世界へ呼び戻したのは、ヴァルターが掛けたひと言であった。

「反対するのかわ？」

「え？」

「俺がネクストに乗ることだ。フィオナがやめると言うのなら、俺はこの件には今後一切関わらない」

ヴァルターは断言した。

「だがその場合、別の誰かがあの『ノートウング』とかいう機体に乗るだろう。俺は自分が出ることを、出来るとして名指しで求められたことを、他人に押し付けてまで自己の安泰を図ろうとは思わない。それだけはわかってくれ」

「その台詞」

彼の言葉を聞いたフィオナは、寂しげに苦笑してこう言った。

「まるで、『英雄』の言葉みたい」

英雄願望。  
ヒロイック

男性の多くは、そんな子供じみた感性を多量に保有していると聞いている。

その本質を形成するのは、積極的な自己犠牲の肯定だ。

それは、女性であるフィオナにとってまったく理解出来ないものだった。

他者を犠牲とするくらいなら、あえて自らがその役目を率先して負う。

それは、確かに人として美しい行動理念なのだろう。

しかしその外面の煌めきに陶醉した者たちは、後に残された人々が一体どのような想いを抱えさせられるのかまで考えをおよぼしてはいないのだろうか。

だとしたら、それは随分と無責任な話だと思う。

自分はやはり見知らぬ他人のそれよりも、身近な人間の人生が大事だ。

冷たいように聞こえるかもしれないが、包み隠さず本音を言えば誰だつてその結論に辿り着くような気がする。

正直、あなたを危ない目に遭わせるくらいなら、他の誰かの身に何かが起こつてもわたしは一向に構わない。

むしろ、その方が望ましく感じる。

おかしい？

そんなはずないわ。わたしは間違つていない。

わたしはあなたを大切に想っているのだもの。

フィオナはそこまで思いを巡らせた後、急に我に返ると強烈な自己嫌悪に襲われた。

今しがた心中に浮かんだ激しい感情が、その本質において利己主義イスマそのものだと思いつたのである。

思考が混乱して、ふうと短い溜息が出る。

そんな彼女を見かねたように、ヴァルターが口を開いた。

「英雄なんかになりたいとは思わないな」

その口振りには、深刻そうな色合いは微塵も見られない。

ひと呼吸だけフィオナの反応を確認すると、彼は言葉を続けた。

「いい英雄は死んだ奴だけ。昔からそう言われているが、第一俺は死ぬためにフィオナの許可がいる。仮に俺が英雄とやらになりたくても、お前がそれを許さないだろう？」

始めその言葉をきよんとして聞いていたフィオナであったが、それが彼一流の冗談であることに漸く気付き、次の瞬間には肩をすくめてくすりと笑い声をあげた。

「そうね。そういう約束したっけ」

彼女の様子にヴァルターがあきれる。

「おいおい。忘れていたなんて言うなよ」

「ごめんなさい」

上目づかいでヴァルターを見ながら、フィオナは謝罪の言葉を口にした。

「当たり前のこと過ぎて、本気で忘れていました」

ヴァルターが苦笑する。

そうだった。

彼女は思った。

ヴァルター・ノボトニーという人は、そもそもそういう人なのだった。

いわゆる、「義」の人。

自分の中の決まりごとに心底準じることが出来る男性。

頑固一徹で、ある意味「石頭」

きつとこれまで女性に好かれることなんて皆無だったんじゃないかと思う。

でも、わたしはそんな彼に惹かれたのだ。

そうでなければ、あの時彼にこの身を任せたりは決してしない。

そして、この人はわたしの信頼に応えてくれた。

もちろん、これからもそうであるに違いない。

誰がなんと言おうとも、わたしはそれを信じている。

よし、だったらわたしはこの人が行く道を否定しないようにしよう。

そして、出来る限り彼を助けることとしよう。

わたしが決めたことだもの。

わたしがそれを疑ってどうするの。

わたし自身を信じましょう。

この人を信じると決めたわたし自身を。

そう思いを巡らせたフィオナは、あたかも、何かを吹っ切った

ような明るい表情を見せた。

わざとらしい咳払いをひとつし、すつと背筋を伸ばしてヴァルターに向き直る。

彼女は言った。

「あなたがリンクスとなることを、わたしは認めます。その代わり、改めてひとつお願いがあるのだけれど、よろしい?」

即座にヴァルターは了承した。

「拒絶する理由はないな。言ってみろ」

「実は……」

彼の言葉に促されるようにフィオナは大きく口を開いた。

一瞬で覚悟を決め、息を飲んで目の前の男と対峙する。

しかし、発するべき言葉は主の期待を裏切って喉の奥から出てきてくれない。

あせりが羞恥を呼び、それがさらなる摩擦となつて彼女を縛る。膝の上で両手を握り、視線をあちこちに泳がせながらフィオナはつまつたそれをなんとか吐き出そうと努力した。

もう一度、意識して喉を鳴らす。

「……その、わたしたち」

傍目からも明らかかなほど赤面し、漸くフィオナは目的を果たした。

「ああいう関係になつて随分と経つでしょう。だから、その、そろそろどうかな、なんて思うのだけど」

それは、遠回しな「プロポーズ婚姻の申し込み」だった。

少なくとも、ヴァルターにはそうとしか聞こえなかった。

なるほど、それならば発言に努力が必要なのもうなづける。

ましてや女性からの申し出だ。

その勇気たるや、男性側から言い出す場合と比較して数倍を消費することとなるのだろう。

しかし、まるで小娘のようなありさまだな。

おどおどと挙動不審なフィオナを見やり、ヴァルターはそう感

じた。

フィオナ・イエルネフェルトという女性は、衆目には相当の才媛として知られていると聞いている。

なんと言つても、コロニー・アナトリアをここまで導いてきた故マルクス・イエルネフェルト教授の御息女だ。

いまだに彼女の存在を雲の上のごとくに感じる者がいたところで、ヴァルターは一向に驚かない。

だが、今自分の目の前でもじもじと所在なげにしているこの娘からは、そんな一般的な印象イメージから形成された「ミス・イエルネフェルト」の姿など欠片も見出せなかった。

どこにでもいる二二歳の普通の娘だ。

それが、ヴァルターにはおかしく、そして同時に嬉しく思えた。

フィオナこの娘がこんなさまを見せるのは、俺の前でだけだ。

そして今の俺は、この娘にそうしてもらえることに快感を覚えている。

フィオナは俺という男に、文字どおり身も心も許してくれた。

だから俺は、それに対し誠実に応えなくてはならない。

そして今、彼女はその応えを確かな形とすることを望んでいる。何をためらうことがあるう。

「教授の月命日、今月は休日だったな」

珍しく微笑んでみせながら、ヴァルターはフィオナに告げた。

「ちようどいい。一緒に叱られにいくとするか。俺は大事に育てた箱入り娘を奪った極悪人として。お前はこんなるくでなしを伴侶に選んだ不孝の娘として」

その言葉を聞いて、フィオナは瞬く間にその表情を輝かせた。

感極まり、今にも泣き出しそうな顔のまま立ち上がった彼女は、潤んだ瞳で目の前の男を一途に見詰める。

「ありがとう……」

フィオナは言った。



「わたし、幸せです……」

言葉を飾ることに意味はない。

その短い言葉だけで、ヴァルターは彼女の赤心を十二分に理解した。

なんとも上手く乗せられたような気もするが、そんなことはどうでもよかった。

いかに向こうから求められたことが切欠とはいえ、幾度も己の腕に掻き抱いた愛しい“オンナ”だ。

このまま残りの人生を彼女の尻に敷かれたまま終えるのも、案外悪いものではないだろう。

むしろ、それは俺にとって望外の幸福なのかもしれない、とすら思える。

そして、そのまま求めるようにまぶたを閉じたフィオナの気持ちに応えるがごとくヴァルターも立ち上がり、ついでに口付けを彼女に捧げた。

ヴァルターの携帯電話がけたたましく呼び出し音を鳴らしたのは、ちょうどその時だった。

エマージェンシー  
緊急事態発生。

それはアナトリア警備部隊本部から発せられたもの すなわち軍事的衝突の発生、またはその兆しを知らせる非常通信であった。

## 傭兵（5）

間もなく太陽が大地の影に没しようというその時。

コロニー・アナトリアの外周に設けられた全天候警戒レーダーのひとつが、所属不明機の接近を主権領域端から約八〇km離れた位置で探知した。

軍事的観点から見ると、それは極めて近い距離だった。

ふところに飛び込まれたのも同然だと言っている。

アンソウ所属不明機が単機であったこと、加えてそれが意図して低空を侵攻してきたことが作用し、著しく発見が遅れたのだった。

まさしく緊急事態であった。

レーダー管制官はただちに上官へ口頭にて報告し、自身は目標の追跡を開始した。

アナトリアに一線級の航空兵力が存在したなら、たちまちのうちに待機していた迎撃機が舞い上がっていたことだろう。

しかし、それは現実のものへとなりえない。

「企業連合体」はすべてのコロニーに対し、作戦的運用が可能となる軍事力の保有をこれまで許してこなかったからだ。

事実現在のアナトリアも、一部の武装回転翼機を除けば攻撃能力を付与された航空機を保有してはいない。

防空能力として換算すると、それは丸裸と言っているほどの状況であった。

得られた情報はすぐさま警備部隊本部へとデータリンクされ、またたく間に<sup>メインコントロールルーム</sup>主管制室に整理・報告された。

コロニー庁舎の地下深くに設けられた同施設は、アナトリアにとっていわゆる軍事機構の中心拠点と言える場所だった。

常時稼働している複数のコンピュータが、送りこまれてくるすべての情報を集約し、上層部へとリアルタイムで通達する。

仮に非情事態が発生した場合、最悪でもここの機能と法的に責

任を持つ人物とが健在でさえあれば、コロニーとして最低限の運営が可能となる。それだけの能力が同施設には与えられていた。

名称こそ管制室ではあるが、実際は司令部と言った方がしっくりとくるかもしれない。

薄暗く高い密度で操作パネルが壁面に詰めこまれたその空間では、それら进行操作する数名の管制官が液晶画面の放つ光に照らされつつ、巧みに、そして淡々とキーボードを叩いていた。

その動きは見た目にも滑らかで、寸分も無駄がない。極めて有能な職員たちであった。

彼らのすべてが、高度な教育と訓練とを経たことによって人の形をした精密機械とでも言うべき様相をなしていた。

緊急事態発生時において、感情に左右されない冷静さは非常に重い価値を持つ。

それは、アナトリアの人材育成機構が上手く機能していることを何よりも雄弁に物語っていた。

「状況はどうなっている！」

アナトリア警備隊長を務めるウルリツヒ・ジグナーは、入室するなり大声でそう叫んだ。

年齢は四〇を少し過ぎたばかり。

黒い頭髪をオールバックになでつけた細面の容貌は、切れ味鋭い刃物を連想させる。

事実、彼は隊内で「剃刀」という渾名を頂戴していた。

いわゆる現場からの叩きあげという奴である。

時に声を荒げることもあるが、机上の企画に束縛されないその性格は、第一線を構成する者たちにおおむね好感をもって迎えられていた。

コロニー代表からの信任も厚いと聞く。

生真面目で実直な男であった。

「未確認機、当方主権領域から三〇nmの地点で反転。方位二

四〇。高度五〇〇〇ft。三〇〇kt。繰り返します」

ジグナーの問いに、情報管制官の女性がただただ事実のみを告げた。

まったく私情の含まれない単語の羅列は、人の言葉と言うよりも何か完全な別物であるかのごとく耳に届く。

その情報を信ずれば、未確認機はアナトリアが配備した長距離地对空誘導弾の射程距離ギリギリできびすを返し、その高度を上げたようだった。

エアボーン  
空挺侵攻だ。

ジグナーは直感した。

探知された未確認機の正体は、大型の輸送機に違いない。

おそらく搭載してきた戦闘部隊を地上に直接降下させ、なんらかの軍事的行動を行わせる意図を持っていたのだろう。

またぞろ反体制テロリストどもか？

彼は地中海沿岸地域を中心に多発している武装勢力による施設襲撃を思い出し、不快そうに唇をゆがめてみせた。

奴らに恨みを買うような覚えはアナトリアにはないはずだ。

確かにアナトリアは反体制武装勢力の側に肩入れしている訳ではない。

むしろ、無差別テロには批判的な勢力だと言える。

だが、それをもって武力行使の口実にするほど連中が短絡的な阿呆であるとも思えなかった。

いや、それは連中を買い被っているのかも、とジグナーは思い直す。

もともと、非戦闘員を巻き添えにした武力行使を躊躇しない頭の捻子が何本か外れた奴らだ。

こちらの常識の範疇から外れた行動を取る可能性も否定出来ない。

だとしたら実に迷惑な話だ。畜生め。

「待機中のノーマルをその方面に差し向ける」  
即座に彼は命じた。

「非番の連中も叩き起こせ。それとノボトニー少佐にも連絡をとるんだ。理由だと？ 緊急事態だとひと言言えば、あの人には伝わる。急げ！」

ジグナーが部下に向けて叩きつけるような指示を発した直後、遅れて報告を受けたエミールがスミカをともなつて姿を見せた。

彼はジグナーを初めとする警備隊ガイドの隊員が屹立して敬礼を行うのを右手で制し、まず事態の報告をやりわりと求めた。

ジグナーは主観を含めない報告を口頭にて行う。

「現在、ノーマル三機からなる一隊を現地向かわせております。詳細な報告は彼らの到着を待つてからになります」

「腑に落ちんな」

主管制室の最上段で、管制官たちを眼下に収めうる位置に設けられた椅子に深く腰を下ろしたエミールは、いまだ何も映されていない壁面の大型モニターをながめながらジグナーにこぼした。

「一介のテロリストが航空輸送を行えるとは到底思えないのだが」

「！」

その言葉が何を意味するものか瞬時に悟り、ジグナーは驚愕した。

確かに、資金面において厳しい立場にある反体制武装勢力が運用するために巨額な設備投資を必要とする大型航空機を所有することは考え難かった。

戦術的な回転翼機などとは異なり、それらは長大な滑走路に代表される恒久的な地上施設がなければまともに飛び立つことすら難しい代物であったからだ。

それでは、あの未確認機の所有者は何者なのか？

それが反体制勢力でないとするならば、回答はただひとつのそれに導かれる。

叫ぶようにジグナーは言った。

「それでは、これがどこかの企業の仕業だと仰るのですか？

ミスター・ブレジデント  
「コロニー代表」

「可能性の一端として、だがね」

エミールは、傍らで唇を噛み締めるようにして何事かを耐えているスミカの姿をちらりとながめ、次いで自らも忌々しそうに苦虫を噛み潰した。

もし、いずれかの企業がアナトリアへの軍事オプシオンを実行しようとしているのであれば、その理由は「アナトリアの傭兵」計画に関するものだと考えてまず間違いない。

「情報が漏洩していたのか。あるいは」

彼は小さくつぶやいたが、それは彼以外の誰の耳にも届くことはなかった。

「アルファ・リーダーより管制室！<sup>コントロール</sup>」

先遣隊として目的地に向かったアルファ小队 「アルブレヒト・ドライス」社製ノーマル三機によって編成されたその部隊は、行程の最終段階において正体不明の熱源反応に遭遇した。

「未確認目標と遭遇<sup>エンゲージ</sup>。機数一。行動指示を求む」

『管制室よりアルファ・リーダー』

小队を担当する女性管制官が時を置かずに指示を返す。

『交戦規則<sup>R.O.E</sup>に従い、目標に対して退去勧告を行って下さい。それでもなお大方の主権領域へ接近を試みるのであれば、威嚇射撃の後、武装の自由使用を許可します』

「了解<sup>ログ</sup>」

アルファ小队が使用する三機のノーマルは、どれも人体と同様に二本の脚部を持つ標準的な機体構成だ。<sup>オンドラックス</sup>

ACらしく各所に設けられた推進器<sup>スラスター</sup>を統合使用することで、立体運動を含むかなりの高機動性を発揮出来た。

武装は高初速の三五mm機関砲一門を右腕部に装備。

これは優秀な速射性能を有し、MBTを除く大概の装甲車両《AFV》に有効なだけの貫通力と対弾装甲を持たない軟目標に効果

的な制圧力とをバランスよく保持している。

ノーマルの兵装としては特に奇をてらった代物ではない。  
むしろ常識的に過ぎると言っていていいほどだ。

目標との距離が四〇〇〇mを割り込んだ。

三五mm機関砲の最大射程に等しいが、この距離では機体に装備された高性能FCSを使用したところで有効な射撃が行えるとは思えない。

少なくとも、今の半分まで踏み込む必要があった。

小隊長はそうに判断し、左右の部下を引き連れて突進した。

ノーマルの背部推進器が高温の推進剤パウダーを吐き出し、一〇m近い身長を持つ巨人の身体を、高速列車に匹敵する速度で前に押し出す。

パッシブセンサー  
受動型警報機が反応したのは、その矢先であった。  
ミサイル・アラーム  
誘導弾の接近警報だ。

アルファ小隊各機のモニターに飛来してくる多数の誘導弾が確認された。

それらは空中で三方向に分かれ、それぞれ収束するような軌道をとりつつすべてのノーマルへ猛禽のごとく襲いかかった。

ブレイク  
「散開！」

小隊長が叫ぶ。

しかし、間に合わなかった。

斜め上空からまっしぐらに降り注いだ複数の誘導弾は狙い違わず小隊全機を捕捉し、直後にその弾頭を炸裂させた。

進化したタンDEM式弾頭を有する成形炸薬は、せいぜい三〇mm徹甲弾に対応する程度の強度しか持たないノーマル機体の装甲を真正面から叩き割りこれを粉碎した。

管制官がのぞきこむディスプレイから、彼らの存在を示す光点ブリックがたちまちのうちに消えてなくなる。

「アルファ小隊全機、撃破された模様です！」

思いもよらなかった現実を目の当たりにし、それでも辛うじて理性を保つことに成功した女性管制官は、振り向きざまにそう叫ん

だ。

「莫迦な」

ジグナーは絶句した。

「ノーマル三機が一瞬で……」

「ネクスト、ですね」

その状況にも動じず、冷静にそう分析してみせたのは、エミールの隣で静かな存在感を示す霞スミカであった。

「航空機による輸送が可能で、しかも複数のノーマルを短時間で撃滅出来るのはネクスト以外に考えられません」

「やはりか」

それを聞いてなお、エミールは驚きの表情を見せなかった。

悪い方の予測が当たった、せいぜいその程度の感情のみが彼の表情からは読み取れる。

ぼそりとつぶやくように彼は言った。

「思いの外『企業連合体』の手も長いようだ。つまりは、そういうことだろう」

「いかなさいますか。ミスター」

鋭い視線をエミールの方に移し、スミカが問うた。

「アナトリアが保有する戦力ではネクストに対抗することなど不可能です」

「ジグナー君」

スミカの言葉をあえて無視し、エミールはジグナーを呼んだ。

「コロニーの持つ全兵力を投入して防衛線を構築するのだ。あれがネクストであるという確証が得られた訳ではないが、その可能性は極めて高い」

「了解しました！」

ジグナーは即答した。

が、その言葉の後に「しかし……」と何事かを付け足そうとする。

手持ちの戦力をもってネクスト相手に何が出来るのかを、彼は



図りかねているのだ。

それは実戦部隊を預かる者として、いわば当然の反応であった。

「足止めが出来ればいい」

エミールは言った。

前線指揮官に具体的な目標を与えるのは責任の所在を確固とするために必要不可欠なことである。

少なくともその時の彼はそう考え、それを実行した。

「その間に住民の避難態勢を作り上げるのだ。急ぎたまえ」

『「敵」前衛は消滅。「タイラント」は目標へ向かって下さい』

自機を担当する管制官からの通信をうわの空で聞き流しながら、

「GA」社に所属する企業リンクスのひとり、ユナイト・モスは軽く舌舐めずりをした。

いかにも満足気な表情であった。

大好物の菓子をぺろりと平らげた子供のそれに近くも見える。

「さすがはネクストだ。こうでなくては、な」

薄笑いを浮かべながら、彼はつぶやいた。

ユナイト・モスは「国家解体戦争」終結後に見出された第二世代のリンクスだ。

それなりに厳しい訓練に晒させてきたものの、実戦参加自体は  
いまだ数えるほどしかない。

もつとも、今この世界においてネクストと正面から渡り合える  
存在は他のネクスト以外にはない。

ゆえに、これまでの戦場で彼の経験不足が露わになることなど  
一度としてなかった。

保有する実戦経験のいかんと問わず、リンクスであることはす  
なわち一方的な破壊神であることと同義語であったからだ。

現に通常戦闘によって撃破されたネクストは、「国家解体戦争」  
以降、ただの一機も存在していない。

ネクストの、引いてはそれを操るリンクスの無敵性を疑う者は、

まともな軍事関係者であれば皆無と言ってよかった。

コロニー・アナトリアが自前のネクストを保有し戦力化しようとしている。

その情報が「GA」本社へ届いたのは、同社が各地に送り込んでいた潜入工作員の報告によってであった。

「ビッグ・シックス」において最も保守的と言える「GA」社は、その情報を極めて危険度の高いものと判断した。

ある意味で“帝国主義的”思想を色濃く持つ彼らは、自らに従属すべき存在であるコロニーが治安維持に必要とされる以上の軍事力を保有することに対し寛大でいられる訳もなかった。

増長した輩には、しかるべき鞭をくれてやらなければならぬ。それが支配者たる者の責務だと本気で信じていた。

一度決断した彼らは、すぐさま行動に出た。

コロニーを相手に対等の交渉など必要ない。

まず圧倒的な力を眼前にて示し、彼らが企業に肩を並べることなど文字どおり夢物語に過ぎないのだと教えてやればいい。

それは典型的な示威行動であった。

彼らが経験の浅いユナイト・モスをあえてその任につけたのも、それが危険度の低い、そして極めて単純な任務だったからに他ならなかった。

ユナイト・モス、そして彼のネクストである「タイラント」に与えられた作戦は、「コロニー・アナトリアの主権領域外縁における破壊活動」であった。

要するに、一発ぶん殴って帰ってこい、という訳だ。それ以上のことは求められていなかった。

例え活動規模が小さくても、企業がその象徴たるネクストを投入したことを顧みれば、アナトリアも企業の本気度を思い知ることになるだろう。

より大規模な軍事力を用いてアナトリアを恐怖させるのは、彼らを「ビッグ・シックス」他社への依存に追いやるのが予想され

不採用となった。

それは、いまだネクスト関連技術において他社に劣る「GA」社にとって、はなはだ面白くない結末だと言えたからだった。

アナトリアには十分な利用価値がある。

厳しく躰はするが、反抗的だからといって排除はしない。

少なくとも今はこの程度で十分だと、「GA」社上層部は考えていた。

膨大な推進力を発揮する推進器を休むことなく使用し、「タイラント」は滑るよう<sup>フイスター</sup>に地表を進んだ。

直線と平面を軸に形作られたその機体は、「GA」社が持つ堅実性を象徴したかのごとく、既存の戦闘車両にも見られる極々安定したデザインを用いて構成されていた。

それは、質実剛健と言い換えても構わない。

「タイラント」は人間と同様に二本の脚部を有する。

しかしその両腕は胴体の左右には存在せず、代わりに長い砲身を持つ二〇三mm滑腔砲を一門ずつ備えていた。

発射する砲弾の弾頭は多目的成形炸薬弾<sup>HEAT-MP APFSDS</sup>。

一昔前に流行った高速徹甲弾はその発射時に発生する膨大な反動が嫌われ、今ではほとんど採用されていなかった。

明らかな主兵装たるそれを補佐するのは、左右の背後と両肩に搭載された誘導弾発射機だった。

対地・対空・対艦とすべての目標に対して有効とされる多目的誘導弾を発射出来るそれは、それぞれが複数の誘導弾を同時発射することにより極めて高密度の火力を目標へ投げつけることが可能だった。

中隊規模、いや大隊規模のノーマルですら、その攻撃を受ければたちまちのうちに残骸<sup>スクラップ</sup>の山と化すことだろう。

武装を見れば一目瞭然、徹底的に火力の発揮を前面に押し立てた構成である。

逆に言えば、それだけを突き詰めた機体だと言ってもいい。

もとより作戦的柔軟性に長けた機体でないことは明白であった。そしてそれは同機を与えられたユナイト・モスというリンクスが、「GA」社内部においていかなる評価を下されているのかを端的に表していた。

先ほどの遭遇戦で三機のノーマルを一蹴した「タイラント」は、アナトリアの主権領域外縁に建築された早期警戒用レーダーサイトに向かつて文字どおり無人の野を侵攻した。

アナトリア周辺に建設された早期警戒用レーダーサイトは計八機。

そのすべてがコロニーを囲むような位置で稼動し、二四時間休む暇なく電子の網を周囲に投げ掛け続けている。

「タイラント」が目標としたのは、そのうち最北端に位置するサイトであった。

それは比較的開けた土地の一段高い丘陵地帯頂上部に配置され、数門の固定砲台によって防御されていた。

「タイラント」の接近を既に探知し万全の体勢で待ち構えていた砲台群は、旋回砲塔五インチに収められた一二七mm両用砲の砲口を小刻みに調整し、この不躺な来訪者に向けて全力をもって歓迎の意思を露わにした。

飛来してくる一二七mm砲弾が、「タイラント」を守る球体状のPA表面で信管を作動させ派手な爆音を轟かせる。

PAを突破してきた弾体の一部が「タイラント」の機体本体を直撃するも、新素材をふんだんに用いて形成されたその特殊複合装甲を貫き致命傷を与えるには到らない。

「うざいんだよ！」

ユナイト・モスが吠えると同時に「タイラント」からの反撃が始まった。

連続して飛来する一二七mm砲弾をもとせずつ大胆に突進した「タイラント」は、有効射程に突入するやいなや一斉に誘導弾を投射する。

砲台には十分な装甲防衛が施されていないかった。

テロリストによる襲撃を想定し内部人員を保護するためのアルミ合金製多重装甲が採用されていたが、それは至近距離で炸裂した榴弾の破片に耐久するのがせいぜいだった。

従って、目標へと突き進んだ誘導弾はそれらを苦もなく破壊。

リーダーサイトも隣接する施設ごと一気に爆砕され、その機能を停止した。

鶏を割くに牛刀を用いるとは、まさにこのことであつた。

『任務完了です。ユナイト・モス』

管制官が、「タイラント」へ通信を入れてきた。

『予定どおり攻勢発起点に退却。迎えを待って下さい』

「ふざけるな」

その通告に対し、ユナイト・モスは悪態で応えた。

声の端がわずかに震えている。

続けざまに彼は言った。

「まだまだだ。まだまだやれる。この程度で退いてたまるものかよ！」

『ユナイト・モス！ 何を言って』

己の耳を疑い狼狽する管制官に向けて、ユナイト・モスはなおも言い放った。

「このままアナトリアのネクストとやらを破壊する。上の奴らに、この俺さまがどれほどの力を持っているのかを教えてやるのさ」

『莫迦な。命令違反です。』GA『社はそのようなことは認め  
ていません。ただちに帰還して下さい』

「やかましい！」

食い下がる管制官を振り払うようにユナイト・モスは通信を切った。

その口元には魔界の軍団長が見せるべき凄まじい笑みが張りついている。

彼は明らかに酔っていた。

血と破壊と、そして己の力に。

圧倒的な戦闘力を発揮するネクスト搭乗者としての万能感。

それもAMSを介したことでより一体感を高めたものが、この時ユナイト・モスの感情を完全に支配していた。

「国家解体戦争」が終結した後でリンクスとして見出された第二世代。

豊富な実戦経験と高いAMS適性を有する「オリジナル」

第一世代のリンクスたちと常に比較され、時には“粗製”とまでさげすまれることもあった彼にとって、まれに巡ってくる実戦任務への参加は武名を上げるための好機であった。

「オリジナル」の連中だって武勲をあげて名をなしてきたんだ。ユナイト・モスは思った。

俺だって連中と同じようにやれるんだということを証明してやる！

彼は薄ら笑いを浮かべながら「タイラント」を突き進ませた。

命令違反など、どうということはない。

結果がついてきさえすれば、結局のところ上も自分の行動を追認せざるをえなくなる。

第一、たかだか言いつけを守らなかった程度のことでは企業が自社リンクスを切り捨てるなど出来る訳もないのだから。

ユナイト・モスは心からそう信じ、実力をもって栄光をつかんだ自己の姿を想像してほくそ笑んだ。

彼はネクストの持つ絶対的な戦闘力を全面的に信頼していた。

コロニーごときの軍事力ではそれを止められはしないと確信すらしていた。

そして、それはおおむね事実であった。

ユナイト・モスの目前には、アナトリアの生活居住地が迫っていた。

目的達成のために必要な実力の行使。

それが政略的に無意味な流血をとまなうことを理解しつつも、

彼はそれに躊躇する素振りを見せたりはしなかった。

嬉々としてユナイト・モスは引き金を引いた。

射撃に伴う轟音が「タイラント」の機体を振動させた。

## 傭兵（6）

未確認ACによるアナトリアへの武装襲撃。

その可能性についての報告を受け、ヴァルターはコロニー中心部へ向けて車を走らせていた。

水素を燃料とする内燃機関をもって駆動するそれは、一般道路の法定速度を随分と上回るペースを維持しつつ懸命に幹線道路を疾駆する。

コーナーをひとつ抜ける度にゴム製のタイヤが耳障りな悲鳴をあげた。

襲撃行動について詳細な情報はいまだ不明。

しかし、「企業連合体」と若干の距離があるコロニー・アナトリアへの軍事行動は反体制武装勢力の政治目的とは明らかに相反する。

そして、それこそがかえって事態が深刻であろうことをヴァルターの胸中に告げていた。

「わたしも行きます」

連絡を受けるやいなやたちまちのうちに険しい表情を見せる彼の姿に、フィオナも強く同行を申し出た。

こういった非情事態に際して何かが出来る我が身だとは、流石に彼女自身も考えなかった。

しかし、普段なら見事にその感情を制御出来ているフィオナの理性は、今回に限り襲いくる強い不安感を阻止出来なかった。

もちろん、ヴァルターはそんな彼女をやりわりと押しとどめたが、それでもなお決然と食い下がったフィオナは強引に彼の助手席へとその身を押し込んだ。

ヴァルターも、結局は了承せざるをえなかった。

日は沈みつつあるが、まだ周囲は十分に明るかった。

赤みを帯びた太陽光線が低い角度で市街地を照らし、長く伸び



る影が大地にくつきりとその姿を映し出している。

だが、彼らが向かう市街地の一角から明らかにそれとは違う赤色の何かが、立ち昇る黒煙を背景にして浮かびあがっていた。

火災だ。それもかなり大規模な。

それに気付いたフィオナが驚いて助手席の窓を開けると、遠雷のごとき爆発音までもが彼らの耳朵に届いてくる。

戦場音楽。

かつてヴァルターが幾度となく耳にしてきたその旋律は、そこが明らかかな“地獄”と化していることを彼にはつきりと告げていた。

ヴァルターは思わず我が耳を疑った。

馬鹿な。一体なんということだ。

彼は、たまたま行く先に存在した市街地を一望出来る高台に車を停めた。

助手席から弾かれるようにフィオナが飛び出す。

彼女ははるか眼下に広がりつつある煉獄を目の当たりにして、思わず発する言葉を失った。

両の手を口元に運び立ちすくむ。

それは、いわゆる街の断末魔であった。

焼け焦げた建造物群を彩る炎の「赤」と煙の「黒」

双方があたかも生体に刻まれた傷跡のごとくに横たわり、断続する砲声と炸裂する轟音とが今も人々を巻き込みその何かを奪い続けていた。

この距離からでもそれがはつきりと見て取れた。

そこは間違いなく“戦場”だった。

「街が……」

茫然自失してフィオナがつぶやく。

「お父さまのアナトリアが燃えている……」

ふらりと平行を崩した後方へ倒れ込みそうになるフィオナの身体を、ヴァルターの両手が慌てて支えた。

その細い肩を背中から抱き締め、わなわたと震える彼女を己の

胸板に押しつける。

フィオナはヴァルターの方へ顔を向けはしなかった。

ただただ大きく目を見開いたまま、身動きもせず燃える街を見詰めている。

それは、死に瀕した肉親の現状に直面したかのごとき反応であった。

ヴァルターは、こんな彼女を過去に一度見た事がある。

それはイエルネフェルト教授が息を引き取った当日のことだった。

担当医に父親の死を宣告されたフィオナは、同行したヴァルターの眼前でなんの前触れもなく昏倒した。

意識を取り戻した後もその喪失感は長い間彼女を苦しめ続けた。あるいは今でも苦しめているのかも知れない。

破壊される故郷の様子は、フィオナにその時の心情を蘇らせてしまったのだろうか。

彼女を抱くヴァルターの両腕に力が籠もる。おのれの無力を恥じ入る他はなかった。

敵機の市街地への侵入を許したこと。

その現実には自らの責を感じたヴァルターは、齒軋りしながらフィオナと同じ方向を凝視した。

罪悪感とも憤りとも付かない思いがふつふつと己の中に湧き出し始める。

それが決して建設的な代物でないことを知る彼は、無理矢理それを心の奥底に封じ込めた。

頭を切り換え、現状を直視する。

相手は一体何者だ？

ヴァルターは思考を巡らせた。

アナトリアの警備部隊は決して精強ではないが、だからといって武装テロリスト程度を相手にこれほどの暴拳を許すまでに弱体な訳でもない。

相手は想像以上の技量を持った連中か。

それとも、まさか。

ヴァルターは腕の中のフィオナをそっと抱きかかえるようにして車の助手席に運ぶと、自らは運転席に戻って車内テレビの電源を入れた。

液晶画面に光が宿り、臨時の報道番組と思われる映像がそこに映った。

航空機、おそらくは回転翼機からのものと思われる上空からの映像だ。

その中心には、市街地を蹂躞する単機のACが映し出されていた。

大型だ。見慣れた通常のACよりもはるかに大きい。

延焼する建物を背景に己の存在を強固に主張するそれは、悪夢の中に現れる巨大な食人鬼のごとくにさえ見えた。

その周囲から橙色の火線が伸びる。

それも、数本という単位ではない。

警備部隊が使用する大口徑機関砲から放たれた曳光弾だ。

しかし、目標はそれを避けようとしてもしない。

あたかもその攻撃が無力であることを知りつくしているとしても言いたげに。

事実、火線のすべては食人鬼に到達することが叶わなかった。

それらは目標に着弾する直前突如として空中でかき消え、ただ何も無い空間に電光のような煌めきを残しただけであった。

「プライマルアーマー……」

漸く自らを取り戻したフィオナが、ゆっくりとその言葉を口にした。

「あれは……ネクスト！」

「ネクストだと？」

その言葉を耳にしたヴァルターがフィオナの肩を強く掴む。

「確かなんだな」

ヴァルターの問いに彼女はうなづき、強い口調で言い切った。

「多分『GA』社の標準機。研究所で見たことがあるわ。間違いない」

フィオナがそう断言するやいなや、ヴァルターはいきなりアクセルを踏み込み車を急発進させた。

急激な揺れに短く悲鳴をあげる彼女を言葉少なく制すると、彼は「道案内を頼む。アナトリア研究所だ」と、手短かに告げた。

「アナトリア研究所。なぜ？」

「ネクスト相手にいくらノーマルを投入したところで、簡単に蹴散らされるのが関の山だ」

激しく鳴る四つのタイヤを巧みなステアリング操作で制御しながら、ヴァルターはフィオナの問いに回答した。

「目には目を歯には歯を。ネクストにはネクストを、だ！」

ユナイト・モスは操縦席の中で高笑いしていた。

照明もなく計器が発するわずかな光だけが存在するその閉鎖空間において、彼は今絶対者である喜びを誰に隠すことなく味わっていた。

アナトリアの警備部隊は次々と新手のノーマルを送り込んでくる。

そして彼らは、炎と爆発に追い立てられた民衆の盾となるべく果敢に「タイラント」へ立ち向かってきた。

戦闘実力において冠絶する敵を相手にした彼らは密集した建築物を即席の防御陣地として使用し、素人目にも明らかほど巧みな防衛戦を展開している。

高密度の訓練を施されたことで練りあげられた高い士気が、自己犠牲に近い彼らの抵抗を根本で支え続けていた。

だが、それとても所詮は凶暴な雀蜂を前にした蜜蜂の群れに等しい。

いや現実にはそれ以上の差があった。

ユナイト・モスは、彼らの献身を腹の底から笑い飛ばした。

「虫けらなんだよ。お前たちは！」

彼は正面に位置するノーマルの一機をそれが身を隠した建物ごと二〇三mm滑腔砲で打ち砕くと、楽しげに嘲ってさえみせた。

「この俺さまはリンクスなんだぜ。きさまたちとは才能が違うんだよ。才能が」

ノーマルの群れが浴びせ掛ける三五mm砲弾が、四方八方から雨霰と「タイラント」に叩きつけられる。

しかし、その機体全周を覆うPAの壁を突き破るには到らない。大口径の高初速砲あるいはエネルギー兵器の類が警備部隊にあれば、かなわぬまでもネクストを相手に一矢を報いることが出来たかもしれない。

それらの兵装であるならば、PAを突破した後にもある程度の攻撃力を残存させることが可能だからだ。

だが、それは後知恵に基づく“たられば”の話に過ぎない。警備部隊の隊員たちはそれが匹夫の勇であると知りながら、それでもなお蠅螂の斧に等しい武器を携えて目の前の脅威に立ち向かった。

「タイラント」が市街地に突入してから既に一〇機以上のノーマルが撃破されていた。

だが、「タイラント」の足を止めることすら出来ていない。

「タイラント」がいまだこの位置で留まっている理由は、その搭乗者であるユナイト・モスが一方的な破壊と殺戮とを文字どおり楽しんでいからに他ならなかった。

倒壊する建物を避け、巻き起こる炎に追われて逃げまどう罪なき人々。

そのうちのどれだけが友人知人あるいは肉親を傷つけられ永遠の別れを強制されたのか、今の段階では定かでない。

わかっているのは、それが決して低い比率でないことだけであった。

それだけは確かであった。

そんな彼らを尻目に轟然と仁王立ちする「タイラント」の姿。

それは、まさに神話の世界から降臨した破壊神シヴァそのものの姿であった。

主管制室のモニターに浮かびあがるその惨状と絶望的な戦況とを見せつけられ、コロニー防衛の責を負うジグナーは呆然と立ちすくみひと言も発することが出来なかった。

彼の部下たちは圧倒的な力量の敵を相手に力戦奮闘している。

その点に関して恥じ入る部分など微塵もない。

だが、実際はどうだ。

脅威を排除することはおろか、損害を局限することすら出来ないのが現状だった。

戦闘実力において差がありすぎる。

一体これ以上、何をどうすればいいのだ。

敵機に市街地の蹂躪を許したことで己の無力を痛感していたのはコロニー代表たるエミールもまた同様であった。

彼は、自らの読みの甘さを激しく後悔していた。

エミールは自らの計画が「インテリオル・ユニオン」からの黙認を勝ちえた時、これで他企業からの強い抵抗はありえないものと確信した。

「ビッグ・シックス」の一角が既に認めてしまった事柄をあえて実力をもって押し潰そうとするならば、当然それらとの対立は避けられないものとなる。

少なくともその可能性が厳然と存在する限りアナトリアの行動に不快感を持つ輩も、大袈裟な行動に出るはずがないだろう、との予測が彼の中では合理的に成立していた。

しかし、現実はその裏切った。

エミールは、自らが企業の強い決意を見損なっていたのだと判断した。

企業、おそらく「GA」社は自社が強引な力業に出ればアナトリアに肩入れする勢力も摩擦を恐れて手を引くに違いないと考えたのだ。

それほどの危険を冒してまで、彼らは「アナトリアの傭兵」計画を潰したいのか。

張り裂けそうな胃痛を必死にこらえながら、エミールは歯噛みした。

それはユナイト・モス個人の“暴走”という事態を知りえない彼にとって、抱くなど言っても無理がある認識であった。

「タイラント」が行った軍事的には無意味と言える破壊活動も、それに拍車を掛けていた。

ユナイト・モスは市街地に対しほとんど無差別とも言える攻撃を繰り返していたが、それは具体的な目標があつてのことではない。

彼は、暴れん坊が組み上がった積み木の家を崩すのと同様、ただそれが“面白い”がゆえに無抵抗な民衆に対してさえ次々と砲火の洗礼を浴びせていたのだ。

だが、そんなことなど思いもよらないエミールの目には、それが企業による断固たる意志の表明として映つたのだつた。

とはいえ、それを彼の誤断と評するのはいささか気の毒に過ぎるだろう。

平均以上の知性と常識を兼ね備えた人物であれば、おそらくは彼と同様の、もしくは極めて近い結論を導きだしたと思われるからだった。

諸君らが我々の意に反するのならば、容赦なく滅亡させる。ひとり残らず、だ。

城下に迫りくる覇権国家ローマの大軍を前に都市国家カルタゴの指導者が感じた絶望と恐怖。

エミールはそれと同様の思いを抱き、戦慄せずにはいられなかった。

嫌な汗が背筋を伝う。

必死に知恵を絞り、状況を好転させうる策を絞り出そうと苦心した。

だが、空回りする脳細胞は主人の意に反し続ける。

その時、彼の傍らに立ちすくむスミカが不意にきびすを返した。何かを決意したような険しい面持ちで、いずこかへ駆けだそうとする。

「待ちたまえ」と小さく、しかし極めて強い口調でエミールが彼女を止めた。

「どこへ行こうというのだ？」

スミカはその場で足を止めたが、彼の問いには答ええない。

エミールがそれを代弁した。

「『ノートウング』の下へ、かね」

「あのネクストの行動は明らかに異常です。企業の意志に基づくものだとは思えません」

彼女は身体ごと彼の方へ振り向き、冷静に、かつ懇願するように言った。

「私に行かせて下さい」

「駄目だ」

エミールは言い切った。

それまで企業の犬だとばかり思っていたスミカの取った意外性に満ちた行動選択に望外な好意を感じつつ、それでも彼は彼女の進言に許可を与えたりはしなかった。

彼は告げた。

「『インテリオル』グループのリンクスである君が他企業のネクストと交戦すれば、それはすぐさま政治的問題となる。そうなれば、せつかく安定してきた世界は、ふたたび戦乱の直中に墮ちるだろう。君の気持ちはありがたいが行かせる訳にはいかん」

断固たる彼の意思を目の当たりにして、それでもスミカは引き下がらなかった。

納得出来ません、とその表情が主張している。



形のいい眉根をしかめ、彼女はなおも食い下がった。

「しかし、このままでは」

「やむをえない。現実を受け入れよう」

エミールは、暗い面持ちでうつむいた。

諦観が全身に漂っている。

大きく背もたれに体重を預け、天を仰ぐようにして目をつむった。

これでアナトリアはおしまいだ。

彼はそう感じた。

ネクストという“力”を持たず技術的な優位性もなくしたこのアナトリアを「企業連合体」が特別視してくれる訳もない。

密約の片割れである「インテリオル・ユニオン」とてアナトリアを見捨てるであろう。

利用価値が失われた者に対し、憐憫のみを理由に味方するような温い真似を「ビッグ・シックス」の一角ともあろう企業が許容するとも思えなかった。

「敵機、ネクスト格納施設に接近します」

女性管制官が報告した。

やはり目標は我々のネクストか、とエミールは再確認した。

ただし、敵の作戦目的が判別出来たところで物理的に打つ手がないことに変わりはない。

現有戦力であるネクストを阻止することが出来ない以上、対抗手段の採りようなど微塵もなかったからだだった。

「地区防衛のノーマル部隊からの通信途絶。撃破された模様です」

最終防衛線の崩壊が告げられた。

バン、と何かが衝突する乾いた音が管制室中に響き渡った。

ジグナーが己の拳を壁面に叩きつけたのだった。

彼は異音がするほどに歯を食いしばり、必死に感情の爆発を押さえ替えている。

手塩に掛けた部下たちが散っていく喪失感。

非戦闘員を守るといふ自らの任をまっとう出来なかつた無力感。その双方によつて精神を押し潰され、ともすればそのまま倒れるのではないか、そんな心配すら周りが抱くほどだった。

そんな時、一本の通信が管制室に入った。

管制官の一人がそれを受け、振り向きざまに報告する。

「ネクスト格納施設より入電です。送信者はフィオナ・イエルネフェルト」

彼は告げた。

「『ノートウング』起動。これより敵機体との交戦に入るとのことです。回線繋がます」

アーノルド・バイスベルガーは、アナトリアが保有する実験用ネクスト専任の整備主任である。

ただし、研究活動自体に従事した経験は寸分もない。

徹底した現場主義を貫き、ここまで到達した実力者であった。

おそらく、ネクスト機体を実際に扱わせて彼の右に出る人物は世界でも五本の指に数えられる程度であろう。

童顔で生真面目。

そして面倒見のいい性格で知られる彼は、ネクストという大掛かりな機械製品を十数人の部下たちと共に支える、アナトリア研究所の誇る大黒柱だと評せられている。

その彼がたむろする施設にAC部隊の客員教官たるヴァルター・ノボトニーが姿を見せたのは、迫る戦火から逃れるため施設職員全員に避難指示が下されたまさにその瞬間であった。

本施設のすべての機器ならびにネクスト機体「ノートウング」の情報を管理する小部屋へ血相を変えたヴァルターが入股で乗り込んでくるのを見たバイスベルガーとその部下たちは、すわ何事かとばかりに目を白黒させた。

「少佐。どうなさつたのです？」

ヴァルターと直に面識があつた彼はやにわに立ち上がり、丸太のような両腕を大きく広げた。

その童顔にふさわしく、実にのんびりした口調で言葉を放つ。

「報告では、敵は間もなくここにやってきますよ。急いで逃げないと」

「このネクストは動かせるのか？」

そんなバイスベルガーの言葉を無視して、ヴァルターは彼に迫つた。

バイスベルガーの身の丈は二m。

まるでボディビルダーのごとくたくましい筋肉に鎧われた彼であつたが、体格的にはひと回り以上小さいヴァルターから放たれる気迫に接し、わずかながら後ずさりする。

胆力の面で両者の間には差がありすぎた。

アナトリアの中心市街地を若干離れた地域、技術研究所を軸として設けられた実験区の一角にバイスベルガーが勤務するネクスト格納施設は存在していた。

メートル単位で計測されるほど分厚いコンクリートの壁で構築された半地下施設であるその場所には、「ノートウング」と呼ばれる実験用ネクスト機体が実働状態のまま保管されている。

もつとも、そのこと自体は秘密でもなんでもない。

確かに部外者が自由に出入り出来る施設ではなかったが、時に学童の見学が行われるほど同所は社会的に開かれた姿勢を取り続けた。できた。

技術先導の象徴として、ネクスト関連施設は市民の精神的支柱たるべし、との主張がアナトリアでは大勢をなしていたからであつた。

だがその一方で、いささか浮世離れした空気が施設職員の中に醸造されてきたのは疑いようのない事実であつた。

彼らにとり、自分たちの職務に影を及ぼさない出来事とは完全無欠な他人事に等しかった。

世論や政治に巻き込まれることを迷惑だと毛嫌いこそすれ、その可能性について真正面から考えることを避けてきた経緯がここにはある。

ヴァルターの来襲に接し、バイスベルガーが狼狽したかのごとき様相を呈したのは何も来訪者の勢いに気圧されたからだけではない。

それなり以上に有能であるがゆえ、彼はそこに強烈な“現実臭”を嗅ぎ取ったのだ。

それは、鮮明な旗色を革命家に求められた大店の主人に近い心情であった。

「技術的には可能ですが」と、バイスベルガーは咄嗟に答えた。

そして、改めてヴァルターに向けて問い返す。「それをどうするおつもりで？」

「迎撃に出る」  
知れたこと、とばかりにヴァルターは言い放つ。

逡巡など欠片も見当たらなかった。

その眼の中に強烈な戦意そのものがあやしい炎を上げている。

二の句を告げることを許さない。

今にもそう言い出しそうな口調で彼は続けた。

「このまま手をこまねいていたらアナトリアは奴の手でボロボロだ。戦って敗れるのならともかく、無抵抗のままなぶり殺されるなんざ、俺は御免被る！」

「ですが」と、なおもためらいを見せるバイスベルガーを、遅れて室内に駆け込んできたフィオナがさらに説得した。

「わたしも協力します」

おそらくヴァルターの後を全力で追ってきたのだろう。

入室した直後は息も絶え絶えだった彼女だが、ネクスト知識に関してなら自分に一日の長があるとでも言いかねない、それほどの勢いをもってバイスベルガーに食いついた。

「急げば一〇分以内に準備が完了するはずです。協力して下さい！」

「わかりました」

漸くのことばイスベルガーはうなづき、口元を引き締めた。まるで自分自身を無理矢理納得させるように一呼吸置き、穏やかな表情でフィオナに告げた。

「教授の娘さんにそう言われては力を貸さぬ訳にはいかないでしょう」

「感謝します」

フィオナは軽く頭を下げた。

アナトリアのネクスト、「ノートウング」と名付けられたその機体は施設の最深部、縦に二〇mを越える空間を備えた格納区域に直立した状態で駐機・保管されていた。

塗装は実験用の機体らしく、ガンメタリック鉄色の単色。

機体各所を固定用のアームで壁面と結ばれたその威容は、大神殿に安置された青銅の巨神像を連想させる。

手短にバイスベルガーから説明を受け、ヴァルターは「ノートウング」の操縦席コックピットへとその身を滑り込ませた。

人体であればちょうど胸部の奥、辛うじて人ひとりが存在を許される程度の空間しか持たないそこは、ある意味でヴァルターが慣れ親しんだかつての居場所《ACコックピット》を思い出させた。

AMSとの連結機構を内装するヘルメットを被り耐G・耐コジマ汚染用のパイロットスーツを着用した彼は、よく訓練された流れるような手捌きで各所の点検を完了していく。

予想どおり、コックピット・レイアウトの大半はノーマルのそれと大差ない。

AMSを使用しない、あるいは出来ない場合の運用を考慮すると、従来の操縦システムを大幅に変更する訳にもいかなかったのである。

ちょっとした機体の移動など、わざわざリンクスに御足労願う

までもない状況はいくらでも存在するからだ。

軽い振動音とともに予備電源が稼働を始め、各種の機体情報がヘルメットのバイザーへ直接投影されてきた。

制御用の電子頭脳コンピュータが立ち上がり、機体全体を待機状態へと持つていく。

「ヴァルター、聞こえますか？」

ネクスト試験用の管制室にいるフィオナの声が通信機越しに耳元へと届く。

「AMS接続まであと三〇秒です。カウントダウンを開始しますので準備して下さい」

「了解」ラジャー

AMSとの接続リンク。

チュートリアル自体は確認したことがあっても、ヴァルターにとってそれは初めての経験だ。

ひとつの精神でふたつの肉体を統御する。

当たり前だが普通の人間はそんな経験を持ったりはしない。

果たしてやれるのか？

ヴァルターの中で疑問は消えない。

しかし、やらなくてはならないのだ、と思い直す。

フィオナの数える数字が、ゆっくり零ゼロへと近付いていく。

ヴァルターは身構え、そして覚悟を決めた。

息を飲んで、その時を待つ。

「三、二、一、接続します」

彼女が告げたその瞬間、ヴァルターの首筋とまぶたの裏に閃光のとき火花が散った。

苦痛に近いほどの胸焼けと前頭部に淀む重々しい不快感。

そして乗り物酔いにも近い平衡感覚の喪失とが、ほぼ同時に彼を襲う。

歯軋りし獣のように呻きながら、ヴァルターはそれに耐えた。

ある程度の苦痛は予想していたが、彼もAMSが自身に与える

負荷がこれほどのものとは思わなかった。

畜生。闘志が揺らぐ。

それでもヴァルターは、フィオナからの的確な指示に従いゆっくりと呼吸を整えていった。

肉体の苦痛を精神の力で抑制する。

戦場でさんざん学んだ“戦士”のイロハだ。

強くまぶたを閉じ、唇を噛み締める。

「AMS同調率三〇パーセント」

そんなヴァルターにフィオナが告げた。

熱にうなされているがごとき彼の精神に対し、その凜とした声は一杯の清涼飲料に等しい効果を招いた。

AMSと搭乗者との同調率は、なおも右肩上がり上昇していく。

実験用管制室で送られてくるさまざまな機体情報を確認しつつ、フィオナは「ノートウング」の側で配置につくバイスベルガーへと指示を出した。

「『ノートウング』、予備電源から主電源に切り替えます」

「起動用電源接続用意！」

散乱するコジマ粒子に備え分厚い防護服を身にまとったバイスベルガーが、「ノートウング」の周囲で駆け回る愛すべき熟練の部下たちへと告げる。

「接続準備よし！」

「ジェネレーター起動準備よし！」

「各部位検。異常見られません！」

「固定用アーム解除完了！」

各部署から小気味よい返事が届くのを見計らい、彼は一言大仰に宣言した。

「接続！」

複数のレバーが一齐に引き下げられ、外部電力からの支援を受けた「ノートウング」の大出力ジェネレーターが地鳴りのような唸り

声をあげて眠りから覚める。

それと同時に、機体各所に配置された駆動用モーターが役目を果たそうと軋み出した。

細面の頭部に設けられたネクストの「眼」、高性能複合センサーも紅い光を放ちながら己の存在を主張する。

「AMS同調率、七〇から八〇に上昇」  
表示される数字を事務的に読みあげつつ、フィオナはヴァルターの身を案じた。

「大丈夫ですか？」と、他の者には聞かれないよう、ささやくほどの音量で彼女は問う。

「……いける」  
生まれてこの方経験したことのない激烈な心身の負荷に晒され、激しく肩で息をしながらヴァルターは答えた。

「構わない。進めろ」  
搭乗者のデータを表示するディスプレイには、彼の異常な心拍数と呼吸の乱れとがあらゆるさまに計測されていた。

脳波の線も安定しない。  
医師がそれを診たなら即座にヴァルターを操縦席から引きずり出そうとしかねない、それほどの異常数値だった。

フィオナにもそれはわかっていた。  
人間を機械の一部とする悪魔のテクノロジー。  
敬愛する父親が嫌悪し切っていたその技術を、まさか自分が管

理することになるうとは夢にも思わなかった。  
そして、その被験者は自らの愛した男性なのだ。  
許されることとは思えなかった。

ヴァルターが「ノートウング」で敵ネクストを迎え撃つと言い出した時、やはり自分はその行動を止めるべきだったのだろうか。  
フィオナの脳裏に悔恨の情がよぎる。

今ならまだ間にあう。  
今なら。



でも、そうすればアナトリアは。

どうすればいいの？

教えて、お父さま！

だが、事態は彼女の逡巡を一顧だにしてくれなかった。

爆発音が轟いた。

施設の外壁が攻撃を受けたのだ。

振動が建物全体を揺らし、天井から小さな破片がぱらぱらと降る。

それは、敵機が同地に到着したのだという事実を施設内の全職員にはつきりと認識させた。

無音。

まるで深い海の底にいるかのような暗く重苦しい操縦席の中。

ヴァルターは乱れた呼吸を繰り返しながら、自分の中の“何者か”と必死になって戦っていた。

自分ではない自分が背筋を這い回り、視力が捉えていないはずの映像が脳裏にくつきりと浮かびあがる。

心臓の鼓動は遠く、それがあたかも自身のものではないかのような錯覚にすら捕らわれる。

理解不能な呼吸不全に陥り、無意識のうちに顎が出た。

新兵訓練所において心身の極限まで痛めつけられていた日々を思い出す。

あの時、鬼のようなトリル・サージヤント教練軍曹に徹底してしごかれたことで、全力とは死を連想させる苦痛の先にこそ存在するのだと知った。

本当の限界とは、自らが限界だと感じたさらにその向こう側にある。

諦める。ただそのことだけを常に拒絶するのだ、と教わった。

それを、ひたすらに実践する。

同調率七〇から八〇に上昇。

フィオナの声が耳に届く。遠い。

ともすれば口の端から垂れ流しになりそうな唾液を意識して喉の奥に流し込んだ。

目の焦点が上手く定まらない。

そもそも何を基準にそれを合わせればいいのかすら判然としな  
いのだ。

同調率九〇パーセント。

悲鳴に近いフィオナの声が聞こえた。

何を叫んでいるんだ。

もつと冷静になれよ。

らしくないぞ。

は、ははは。

どこかで何かが爆発する。

その音と振動とが微弱だが届いた。

薄れゆく意識が、それは敵がすぐそこまで来ている証だと主張  
する。

敵？

もやがかかったヴァルターの脳裏に、ぼつりと鮮明な明かりが  
灯った。

それを切欠に、今自分がなにをしようとしているのかを断片的  
に思い出す。

そうか、俺は今ネクストと戦おうとしているのか、と……  
ネクスト。

その単語が思い浮かんだ時、彼の脳裏に浮かんだものは四年前  
に彼と彼の部下たちを蹂躪した、あの機体の姿であった。

昆虫を擬人化したような異形と圧倒的なまでの戦闘力。

絶望と恐怖とが複雑に絡み合った意識の中で、なぜかヴァルタ  
ーはあの機体を“美しい”と感じていたことを思い出す。

そして、ぼんやりとした頭で今一度考えた。

願わくば、もう一度あいつと対峙してみたい。

なぜ？

それは勝つためだ。

奴を倒し、死んでいった連中の仇を討つてやるためだ。

そう、奴を倒すことが俺の、唯一生き残った俺の果たすべき責務

その瞬間だった。

ヴァルターの身体を突然の歡喜が襲った。

理由はわからない。

だが突如として彼の中へと吹き込んだ一陣の暴風は、すべての揺らぎを文字どおり一掃した。

知らず知らずのうちに彼の喉から押し殺したような笑い声がこぼれだす。

股間がぎりぎりといきり立ち、アドレナリン神経物質が全身の血管を駆け巡った。

浮き上がった動脈が、乱打する心臓の鼓動に合わせ蛇のように激しく脈打つ。

「はは……はははは」

ビクビクとその身体を痙攣させ、獲物を前にした肉食獣のごとき壮絶な表情を浮かべながらヴァルターはつぶやいた。

人名、おそらくは男性名であるうー一個を数える固有名詞。

アラン、ジョン、ラディ、ケンゾー、オーギュスト、フリッツ、ダン、ロナウド、レイニー、キム。

その名を持つ男たち、四年前に某企業本社施設を前に命を散らせた部下たちに向け、ヴァルターは熱病にうなされたがごとく語りかけた。

「ネクスト、ネクスト、ネクスト。殺るさ。殺つてやる。こいつは敗者復活戦って奴だ。もう二度と俺から大事なものを奪わせはしない。そうだろう？、みんな」

狂気の奔流が、制御不能な業火となってヴァルターの中に残された一握りの“何か”を一瞬にして焼きつくした。

今や邪悪な魔物はその身を束縛していた強靱な鎖を引き千切り、

彼の存在そのものを完全なる支配下に置いた。

「AMS同調率一〇〇パーセント！」

フィオナがそう宣うのと時を同じくして、アナトリアのネットワーク、「ノートウング」のメインプログラムは戦闘モードへと切り替わった。

## 傭兵（7）

「タイラント」の胴体左右に装備された二〇三mm滑腔砲が、ほとんど同時に咆哮した。

破壊対象である大型建造物の外壁に向けて大口径砲弾が容赦なく叩き込まれ、炸裂した弾体が耳をつんざく爆音を轟かせる。

打ち碎かれた壁面の破片が勢いよく周囲に飛び散り、次いで霰のごとく地表へと落下した。

圧倒的な破壊力だと言えた。

何しろ一般的な野戦重砲をはるかに上回る巨砲から、その口径にふさわしい砲弾を吐き出すのである。

その威力たるや尋常のものでありえるはずがない。

例え素人であつても、容易にそれが想像出来た。

にもかかわらず目標物は健在だった。

「タイラント」からの数度におよぶ砲撃を受けながら、底辺の広い四角錐を形成するそれはほぼ原型をとどめていると言っている。おそらくは事故によるコジマ粒子の流出を過度に恐れている結果なのだろうが、余りにも規格外な耐久力だった。

正直、舌を巻かざるをえない。

ユナイト・モスは、この状況を想定してはいなかった。

彼の腹積もりでは、建造物そのものの破壊を行うことでアナトリアのネクストならびに同運用施設に対し、間接的に甚大な被害を与える予定であつたのだ。

もつとも、今回の計画を立案した「GA」社作戦部の方ではそれもしごく当たり前のことだったのかもしれない。

数mの厚みを有するコンクリートの塊が成形炸薬による破壊に對し意外なほどに強靱であることを、専門家である彼らは十分に認識していたであろうからだ。

金属と比較して弱体に思えるコンクリートではあるが、必要と

される厚みさえ持たせておけばメタルジェットの奔流による熱エネルギーをその厚み自体で吸収・拡散してしまうのだ。

まさしく、物理的な対弾防御が装甲板の硬さに比例しないという証明のような事例だった。

今回の作戦で「タイラント」に施設その物への襲撃が課せられなかった理由の一つは、あるいはそれであったのかもしれない。

「思ったよりもタフじゃねえか」

だが、そのことを知らないユナイト・モスは大袈裟に舌打ちをしてみせた。

施設全体の破壊が困難であると明確に認識する。

「タイラント」に搭載した弾薬は、砲弾・誘導弾共に過半数を割っている。

おそらく、目標を破壊可能なだけの弾数は残されていないだろう。

雑魚どもノイマルを相手に遊びすぎたか、とユナイト・モスの脳裏に若干の後悔がよぎる。

しかしここまで暴走した以上、手ぶらで帰る訳にいかないことも理解していた。

何か他に手はないかと、いささか熱狂の薄れた頭で思考を巡らす。

その時、彼の目にとまったのは資材搬入用のものと思われる大型のゲートであった。

たぶん、ネクスト本体を搬出するためにも使用されているのだろう。

それは、巨大な「タイラント」が直立したままで進入出来る高さの幅とを有していた。

こいつは使える。

ユナイト・モスはにやりと笑った。

ここから建造物内部へと侵入出来れば、同地の施設機能と格納してあるネクスト機体とを直接攻撃することが可能だ。

それは極めつけの良策だとユナイト・モスには思えた。

ノーマルを軸とするアナトリアの防衛戦力は、やはりネクストにとって恐れるほどのものではなかった。

ネクストの守りのかなめ、PAという不可視の障壁を打ち破れる攻撃力が彼らには欠けていたからである。

ゆえに、施設内部になんらかの防衛策が施されていたとしても、それが「タイラント」にとっての脅威になるとは考えがたかった。

まともな神経の持ち主であれば、機動的運用が可能な兵種を差しおいて局地防衛設備に予算を投じることなどありえないからである。

少なくとも、ユナイト・モスはそう判断した。極常識的な判断だと言えた。

征くか。

彼は決心し、ゲートに向けて至近距離から二〇三m滑腔砲の照準をつけた。

ためらうことなく引き金を引く。

火焰と共に砲口から巨弾が放たれ、それは刹那の後に目標物を捕捉した。

いかに分厚い金属板とはいえ、装甲板としての加工を一切行っていないそれは暴力的な巨弾の破壊力を前にしてまったく無力な存在だった。

成形炸薬弾の炸裂を真正面から受け止め大きな風穴をうがたれたゲートは、被弾の衝撃に耐えかね轟音と共に建物の内側へと倒れ込んだ。

施設内部へと続く長い下り坂が「タイラント」の眼前に出現する。

電源回路が断絶しているのか、通路の中に人工的な灯りは見取れない。

それまるで、ぼっかりと口を開けた洞窟のようだった。

既に慎重さを失うほど舞い上がっていたユナイト・モスは、さ

らなる戦果を求め乗機をその中へと進めようと試みた。

軽率の誹りは免れまい。

自己の安全を確信していたのか、最低限の周囲確認すら行われなかった。

「タイラント」の脚部が砲撃で横倒しになった輸送車両を無造作に踏み潰し、耳障りな破壊音を立てる。

輸送車両に残されていた化石燃料が爆発し、真っ赤な炎が「タイラント」の脚部装甲をあぶった。

その時だった。

通路の奥、ユナイト・モスの視線が届かぬ暗闇の中から、突如として“そいつ”は現れた。

巨人だ。

鉄の巨人。

紅い単眼が漆黒の虚空に見目鮮やかな軌跡を描く。

まるで疾風だった。

巨人は有無を言わせることなく「タイラント」目掛けて襲い掛かる。

もうもうと舞い上がる煤煙を突き破るがごとく真っすぐに伸ばされた巨人の左手が、「タイラント」の頭部を真っ向から鷲掴みにした。

そのまま凄まじい勢いで後方へ押し退けようとする。

金属同士が擦れあう耳障りな響きが、大音量で周囲を揺るがした。

「なんだ！」

奇襲同然の襲撃を受け、ユナイト・モスは咄嗟の対応も叶わずただ混乱した。

「何が起こったんだ！」

ユナイト・モスの狼狽を尻目に、巨人は背部の大出力推進器から青白い噴射炎を盛大に吐き出しながら「タイラント」の頭部を力づくに平押しする。



平行を崩した「タイラント」の両脚が安定を失い地を離れた。だが巨人は転倒を許さない。

彼は推進器の出力をさらに上げ、己もろとも「タイラント」を周囲の建造物へ背中から叩き付けた。

そこに容赦など微塵もなかった。

轟々たる破壊音と共に膨大な粉塵が舞い上がる。

いくつかの建物が瞬時にして瓦礫の山と化した。

耐えがたい衝撃に悲鳴をあげたユナイト・モスは、ほとんど反射的に二〇三mm滑腔砲を発射する。

まったく照準などつけてはいない。

しかし、この至近距離だ。

普通なら避けられる間合いではなかった。

そのはずだった。

だが、鉄の巨人は瞬時にして水平方向へと膨大な推力を発し、砲口を突きつけたに等しい距離からの攻撃を稲妻のごとき機動で回避した。

目標を捉えられなかった砲弾が直線上の建物の壁面に衝突し、空しく信管を作動させる。

「ク……クイツクブースト、だと」

ごくりと息を飲んだユナイト・モスが怯えたようにつぶやく。

リンクスである彼は知っていた。

その電光石火の動きこそ、ネクストのみに与えられた「クイツクブースト《QB》」システムによって初めてなされる機動であることを。

誰に言うでもなく、彼は叫んだ。

「アナトリアのネクスト……動けたのかよ。聞いてねえぜ、俺は！」

崩れ落ちた建物の残骸から漸くのこと身を起こした「タイラント」のカメラ・アイは、目の前に轟然と立ちはだかる鉄色くろがねのネクストをはつきりと捉えた。

全身に重武装を施した重量二脚型。

その機体を構成するパーツは統一性が見られず、おそらくは複数の企業製品からなる“寄せ集め”であることがうかがえる。

その半面、同機が発する威圧感はいえぬほどの重さと密度をともなつてユナイト・モスの戦闘意欲を真正面から圧倒した。

機械製品としてのネクストがかもしだす空気ではない。

それは間違いなく搭乗者、すなわちユナイト・モスが対峙する「敵」その者から放たれた“狂気”の産物であった。

心臓が激しく脈打つ。

自分自身の左胸内部から発せられる鼓動音。

それはヴァルターにもわかつていた。

だが、そこまでの“距離”は妙に遠く感じられる。

己の肉体がまるで他人のものであるかのごとき感覚だった。

今この瞬間も彼の心身を襲っている痛みと一体化した不快感ですら例外ではない。

唐突にとりとめのない疎外感が押し寄せてきた。

その正体が何者であるか、ヴァルターには理解出来ている。

恐怖だ。

不規則に呼吸を乱しながら、ヴァルターは眼前の「敵」を凝視した。

薄れゆく自我を取り戻す必要があった。

もつとも、それが本当に己の眼で捉えた映像かどうかは本人であつても判然としない。

AMSによつて彼の脳裏に直接投影された虚構の映像である可能性も十分にあつたからだ。

しかし、今はそのどちらでも構わなかった。

それが倒すべき目標を映したものである限りは。

対象を照準環レイトリカルの中心に捉え、躊躇なく引き金を引く。

自らが行う行為に変化などない。

自身の行うべきを把握する。

自我を取り戻す、すなわち恐怖を克服するとはそのことであると、ヴァルターは過去の経験から確信していた。

それはもはや戦士としての本能にすら近い。

戦場に身を晒す者で、恐怖を感じない人間などひとりもない。断言してもいい。

仮にいたとしても、それは明らかな狂人であるがゆえ、まったく評価に値せぬ。

そして、己の中に深く根を下ろしさまざまな局面において自身の行動を支配しようとするそれから逃れるすべは、大きく分けてふたつしかない。

信仰と狂気、そのふたつだ。

信仰の対象となるのは、いわゆる「理」である。

激しい訓練によって得られた自己の能力。

物理的に優れた性能を発揮する使用兵器。

過去の実績から認められる指揮官の采配などがそれに当たる。

信仰に身を委ねた者たちは、それら「理」の存在が自分たちの身命を守ってくれると信じることで心中の恐怖にふたをする。

対称的に狂気とは、人間の「情」を足掛かりとして発生するものだ。

欲望や功名心。

そして憤怒。

狂気に流された者たちはあえて眼前の「理」から目をそらし、危なげな橋を強行突破しようとする。

彼らは恐怖を感じることに、それ自体を拒絶しようとするのだ。

優秀な指揮官は、双方の均衡を上手く調整することで兵の戦意を巧みに調整する。

その一方に著しく偏った兵士たちの戦いは、やはりいびつなものになりがちであったからだだった。

ただし、どちらをより重視するかは指揮官の個性に左右される。

本来ヴァルターは、前者に重きを置く指揮官だった。というより、それこそが指揮官の本懐であると信じている士官であった。

もちろん、今でもその本質に変化はない。

だがしかし、今の彼にはそのよって立つべき「理」が存在していなかった。

自分自身を委ねるべき信仰の対象がまったく見当たらなかったのだ。

数で勝る警備部隊を鎧袖一触した強力な敵機。

あくまでも実験機に過ぎない己の乗機。

そして過去の栄光にすぎることしか出来ない自分自身。

そこに物理的な勝因を見出すことなど出来はしまい。

なればこそ、ヴァルターは残るもう一方に自分を賭けた。

狂気。

強い腐臭を放つその感情は、ヴァルターの中に滲み出る恐怖そのものをどす黒く塗り潰してゆく。

漆黒の闇に閉ざされた操縦席の中。

わずかばかりの光源に照らし出されたヴァルターの表情は、明らかに笑いのそれを貼りつけていた。

しかし、同時にそれは好意的な反応を他者に強いことはないだろう。

おそらく彼と恋愛関係にあるフィオナですら、その形相を見ればたじろいでしまうに違いない。

悪魔というものの実在が、そこにあったからだった。

こいつ……やばい。

理性ではなかった。

持って生まれた生命体としての本能が、ユナイト・モスに警告を発する。

冷たい汗が彼の全身を滝のように流れ落ち、いつしか歯の根ま

でもが鳴り出した。

今まで経験してきたいかなる戦場とも、まったく異質な感触だ。当然だろう。

現在彼が直面しているのは、史上初めて行われるネクスト同士の対決なのであるから。

思えば過去の教練において、ユナイト・モスはネクストとの対戦訓練を受けたことがない。

同時期に彼が知識として刷り込まれ疑似体験として肉体に刻みつけたものは、すべてが、従来型の兵器を相手取った場合に採用すべき行動様式であった。

それはある意味仕方のない事柄だったのかも知れない。

「国家解体戦争」を演出した「企業連合体」とて、ネクストがネクストと戦う状況を果たして本気で想定していたのかと問われれば、そこには明確な疑問符が生じる。

彼らは、あえて目をそらしていたのかも知れない。

なぜならば、ネクスト同士の戦闘とはすなわち「ビッグ・シックス」間における全面衝突に他ならないからであった。

従って、アナトリアのネクストを前にしたユナイト・モスが明確な方向性を示せなかった点について、彼自身の落ち度はかなり少ない。

しかしながら、それが彼の現状を好転させうる免罪符となる訳ではなかった。

混乱しながらユナイト・モスは自問する。

どうすれば、いい？

どうすれば、いい？

だが、ユナイト・モスが自ら答えを出すのを黙って待っていてくれるほど、彼の敵手はお人好しでなかった。

鉄の巨人くろがね アナトリアのネクスト、「ノートウング」は、一方的に自らの都合をもって行動を開始した。

大出力推進器を統合運用し滑るように大地を駆けた「ノートウ

ング」は、時計方向に「タイラント」の右側面へと回り込む。

右腕部マニピュレータが保持した高出力レーザーライフルから指向性を持ったエネルギー弾が立て続けに投射された。

それは、極めて基本的に忠実な戦術機動であった。言うなれば正攻法に近い。

それがゆえ、ユナイト・モスは敵の攻撃をまともに浴びざるをえなかった。

奇策をもつて敵弾を回避するには、彼の持つ実戦経験は余りにも貧弱に過ぎた。

放たれたエネルギー弾は、これまでノーマルからの攻撃を完全に防ぎ切ってきた「タイラント」のPAをやすやすと貫き、その機体装甲表面を次々と焼いた。

赤化した複合装甲が遂に熱エネルギーの浸透を許し、機体機能の一部が連続して失われていく。

被弾と機体損傷を知らせる警告音が「タイラント」の操縦席内で響き渡った。

そして、その耳障りな音はこれまでの戦いで自身の劣勢を知らぬユナイト・モスの精神を次第次第に追い詰めていった。

『取引つて奴は公正フェアにいこうぜ』

対峙するネクスト、そのリンクスからのものである通信がユナイト・モスの耳朶に届いた。

低い男の声だった。

声の主は、およそただひとつの感情のみをその言葉に込めて目の前の敵手へ叩きつけてきた。

『今までさんざん殺してきたんだらう？ だったら、貴様が持つちつぽけな命のひとつやふたつ……俺たちがもらい受けても異論はあるまい！』

それを聞いて、ユナイト・モスは震えあがった。

それは明白な憎悪であった。

剥き出しの殺意と捉えてもいい。

鈍く光る匕首を喉元に突きつけられたかのごとき錯覚を受け、  
たちまちのうちにユナイト・モスは察した。

これが“実戦”だ。

これが“実戦”なんだ。

俺はリンクスとなり自らのネクスト《タイラント》を企業から  
与えられた時、一方的な「殺人許可証」マイダーライセンスをもらったものだと考えた。  
一度戦場におもむけば、好きなように壊し、殺し、蹂躪するこ  
とが許される身になったのだと信じた。

そして、これまでの“実戦”がそいつを裏切ったことはない。  
一度もだ。

俺は、無敵のリンクスさまだった。

何者も、この俺を阻むことは出来なかった。

逆らう奴は皆殺し。虫のように叩いて潰しておしまいだった。

だが、そいつは間違いだった。

戦場で「殺人許可証」を持っているのは俺だけじゃなかったん  
だ。

今までの俺は、たまたま俺を殺せる奴と出会わなかっただけだ  
ったんだ。

今俺の目の前にいる“コイツ”は、明らかに俺を殺せる奴だ。

そして、実際に俺を殺しにきている！

い、嫌だ！

俺は……俺は、まだ死にたくねえ！

あからさまな負の感情を目の当たりにして、ユナイト・モスは  
半ば恐慌状態パニックに陥った。

視界をよぎる「ノートウング」に向け、機械的な照準を待たず  
に二〇三mm滑腔砲を発射する。

当然ながら狙いは甘い。

目標の未来位置を考慮に入れないこの攻撃は、クイックブー  
スを多用して不規則な加減速を繰り返す「ノートウング」の影、そ  
の端をすら捉えることが出来なかった。

当たれ、当たれ。

乗機を敵機に追従させながら、祈るようにユナイト・モスは引き金を引く。

二〇三mm滑腔砲の残弾が危険水域に達していることなどお構いなしの乱れ撃ちだ。

そのうちの一弾が「ノートウング」を捉えた。着弾を示す爆発光が煌めく。

「やった！」

ユナイト・モスが歓喜の表情を浮かべる。

だが次の刹那、爆炎を掻き分けるように現れた「ノートウング」は、何事もなかったかのように反撃を返してくる。

流石はネクストだ。

いかに大口徑砲の直撃であつても一発二発でまいる相手ではない。

ユナイト・モスの顔に落胆の色が張りついた。

改めて自機の置かれた状況を確認する。

その段階で初めて彼は、「タイラント」に装備された火器の残弾数がほぼ底をつきかけている実情に気が付いた。

明らかな失策だった。

ある程度の反撃能力を残した状態を維持しなければ、戦場からの離脱さえおぼつかないからである。

ユナイト・モスは狼狽した。

ふたたび頭の中が混乱する。

こんな場合、例え稚拙な判断であつても素早く決断し、迅速に行動を起こすことが要求される。

兵は拙速を尊ぶ。

最善を希求するという贅沢は、生還した後で行えばいいのだから。

だが、彼はそうしようとはしなかった。

逃亡する、という選択に揺るぎはなかった。



しかし、ユナイト・モスは逃亡する手段について複数の選択肢を用意しようと考えたのだ。

愚かな判断であった。

その瞬間に視界から目標の姿が消え失せた。

完全な油断であった。

青白い爆発的な噴射炎と共に小さく跳躍、次いで横方向にクイツクブーストで跳ね飛んだ「ノートウング」は「タイラント」の死角へと飛び込んだ。四時方向、頭上。

「！」

声にならない悲鳴をあげて機体を急旋回させたユナイト・モスを、これまでになく強い衝撃が襲った。

「ノートウング」が装備する二五四mm多用途榴弾砲が轟音と共に火を噴いたのだ。

高温の火焰によって形成された球体が、突如として「タイラント」の至近に出現した。

激しい爆風と飛び散る弾片とが「タイラント」の機体周辺に還流していたコジマ粒子を一息で吹き飛ばす。

そして、PAが吸収し切れなかった分のそれらは「タイラント」の機体表面を点ではなく面でもって容赦なく乱打し、深刻な打撃を各部機能にもたらした。

「タイラント」に備え付けられた最新式の電子頭脳は、その優秀な被害極限機能を縦横に発揮した。

まるで生体のように幾重にも張り巡らされた予備システムを完全に駆使して、発生した問題を最小限に食い止める。

しかし、このままでは早晚それも間に合わなくなることが明白だった。

「ど、どうすればいい。どうすればいいんだ？ 『タイラント』」

この期におよんでユナイト・モスはためらいを見せた。

何にためらっているのか、おそらく彼自身にもわかっていなか

つたに違いない。

そして、あるうことかその決断を愛機に委ねた。信じられない愚行であった。

「お前はネクストだろう？ ネクストなんだろう？ 最強の兵器のはずなんだろう？」

助けてくれ。助けてくれ。この俺を助けてくれよ！

彼は懇願した。

しかし、当たり前だが搭乗者に従属すべき機械が主の決断を代行してくれる訳もない。

あるいは、ユナイト・モスの命運が付きたのはこの時だったのだろうか。

降り注ぐ光弾と炸裂する爆炎とになぶられ、痛めつけられた「タイラント」の頭部が、遂にその機能を停止した。

見るからに頑丈で事実相当な重防御で知られたそれは今やひしやげた段ボール箱のごときありさまを呈し、巨大な単眼を思わせるカメラ・アイを巻き込んでそのすべての役目を終えていた。

ユナイト・モスの脳裏に映し出されていた外部情報の大半が即時消滅した。

メインセンサーを失ったことで「タイラント」のAMSがリンクスへの情報提供を遮断したのだ。

それは、不完全な情報をリンクスに与えることでその精神負荷を増大させないようAMSが発揮する搭乗者保護機能の一環であったのだが、今回に関してはユナイト・モスの士気<sup>モラル</sup>を崩壊させる引き金にしかならなかった。

突如として視界のすべてが暗転したかのごとき錯覚を受けたユナイト・モスは、正気を疑わせるほどの悲鳴をあげて逃走を図った。もはや見栄も外聞もない。

敵の攻撃に対する合理的な回避運動も行わず、ただ真っすぐに「タイラント」を走らせる。

背部推進器を最大出力で使用。

機体を跳躍させて、文字どおり敵に対して尻を向けた。

死にたくない。死にたくない。死にたくない。

ぶつぶつとそれだけを念仏のように唱えながら、ユナイト・モスはすすり泣く。

「俺には、まだやりたいことがあるんだ！」

だが、アナトリアのネクストはそんな彼の都合などお構いなく血に飢えた貪欲な鮫のようにその背後へと食らいついた。

『逃がすかあ！』

敵リンクスの怒号がユナイト・モスの首筋を貫いた。

振り向いた彼の脳裏に、AMSを通じて「タイラント」の補助カメラが捉えた映像が投影される。

それは、緊急加速用の超高出力推進器を使用した高速移動通称オーバードブーストを発動し、こちら目掛けて轟然と突き進んでくる敵ネクストの姿であった。

逃げ切れない。

彼は悟った。

「た、助けてくれ！」

観念して、ユナイト・モスは哀願した。

彼は思った。

こちらの声も奴の下に届いているはずなのだ。

きつとわかってくれるに違いない。

彼も同じリンクスなのだから。

「こんなところで死ぬのは嫌だ！ やめてくれ！ 殺さないでくれ！」

彼は童のように泣き叫び、敵の情けにすぎる代わりにあらがう意志を自ら谷底へと投げ捨てた。

だが、それこそがユナイト・モスの犯した最大の、そして決定的なあやまちであった。

苦況ピンチを乗り越える糧は、いつだって当事者の持つ意志の力だ。特に生死の境目を分ける事態においては、積極的な抵抗を諦め

た者から順に無惨な屍をさらしていく。

信じられるものは、ただ己自身のみ。

祈りの言葉を唱えることで貴重な時を浪費するなど下策中の下策もいいところであった。

ましてや敵手に自らの命運を託すなど！

「GA」社のリンクス、ユナイト・モスは、この戦いの最後の最後に漸くその真実へ到達した。

大多数の者たちがそれに気付くことなく人生を終えている現状をかんがみるに、ユナイト・モスという人物は戦士としてむしろ優れた資質を有した人物であるのかもしれない。

だがしかし、彼がその経験を次に生かす機会は永遠に巡って来ることがなかった。

「逃がすかあ！」

視界の中で無様に逃亡を図っている敵ネクスト目掛け、ヴァルターは叩き付けるように怒号を放った。

その旺盛な戦意、今や殺害衝動とも言い換えられる激情に突き動かされるがごとく、彼の乗機「ノートウング」がその後を追う。

普段は背部装甲の下に格納されている緊急加速用超高出力推進器、いわゆるオーバードブースターが姿を現し、桁外れの推力を機体に付与した。

機体内に蓄積されていたコジマ粒子が一気にプラズマ化され、青白い奔流となって怒濤のごとく吐き出される。

人体を一〇倍したサイズを有する「ノートウング」は、石弓から放たれたやじりのように空気を切り裂き突進した。

その速度は亜音速の領域に近い。

従来の物理常識ではありえない現象であった。

コジマ技術を利用したロケットブースターならびに空気抵抗をすら減衰させるPA。

その双方が重なり合うことで初めて現実のものとなった、技術

革新の明確極まる証跡だ。

先に行く「タイラント」にも、実は同様のシステムが搭載されている。

いや、すべてのネクストにとってそれは標準装備だと言ってもいい。

搭乗者であるリンクス、ユナイト・モスが、なぜにその機能を使用しなかったのか。

それは今となつては誰にもわからない事柄だった。

ヴァルターの耳朶に敵手からのものと思われる通信が届いたのは次の刹那であった。

若い男の声である。

その語尾がかすかに震えていた。

それは命乞いであった。

通信機の向こうでリンクスである彼は、まるで幼子が泣き叫ぶような勢いをもって己の感情をヴァルターに吐露した。

助けてくれ。死ぬのは嫌だ。殺さないでくれ。

反吐が出そうだった。

憎悪に下支えされた殺意を原動力とするヴァルターの戦意が、その言葉を耳にした瞬間、大きく膨らみ臨界点に達した。

貴様がそれを言うか！

野獣のように彼は咆哮する。

炎上する市街地、そしてその光景を目にして涙をこぼすことから出来ないフィオナの姿がヴァルターの脳裏に浮かんだ。

許すことなど出来はしなかった。

殺す。殺してやる。何さまになったつもりだ。

「ノートウング」は右腕部マニピュレータに携帯したレーザーライフルを即座に投げ捨てた。

射撃回数が限界に達した訳ではない。

まだ残弾に余裕はあった。

それは同機のリンクスであるヴァルターがみせた、文字どおり

憤怒の発露だった。

増速した「ノートウング」が、たちまちのうちに「タイラント」の背後へ迫った。

その右腕部が狼狽の色も明らかな主を抱える「タイラント」に激突する。

マニピュレータが人間で言う右肩部分を背後から捉えた。

鉄の指に渾身の力が込められる。

搭乗者の悲鳴をヴァルターは耳にした。

恐怖に押し潰される寸前の人間が見せる、まさに最後の抵抗だ。

だが、彼はそれを無視した。

もとより聞く耳など持ち合わせていない。

人が発するものとは思えない雄叫びをあげ、ヴァルターは「ノートウング」の左腕を「タイラント」の機体中心部へ叩きつけた。

同機左腕部に装備されている「オーメル」社製の試作兵器が作動した。

ネクスト用推進器の技術を応用し、指向性を有したコジマ粒子を目標物へ送り込む新式の近接戦闘システムだ。

考え方としては成形炸薬、すなわち炸薬の燃焼エネルギーをモノロー効果によって収束させ対象の破壊を目論む方式にきわめて近い。

ただし、その効果はまさしく桁違いの破壊力をもたらした。

アナトリアのネクストが「タイラント」を捕捉した。

機体同士の激突によって生じた衝撃が操縦席全体を激しく揺さ振る。

操縦席の内壁に接触したヘルメットの一部分が破損し、飛び込んで来た欠片がユナイト・モスの額を切った。

一筋の鮮血が流れる。

しかし、彼は痛みを感じなかった。

その精神が肉体の損傷にわずらわされることを頑なに拒絶して

いたからだった。

ユナイト・モスの視界の中、「タイラント」の背中に取り付いた敵ネクストが勢いよく左腕を突き出した。

その拳が、彗星のごとき青白い輝きをまとっている。

それがゴジマ粒子の放つ燐光であると、とユナイト・モスは理解した。

感情の隆起は発生しなかった。

この時、自らの精神が既に麻痺しきっているという事実、ユナイト・モスは気付いていた。

それは、極めて危険な状況だった。

だが彼は、あえて対策を取ろうとしなかった。

身体の死が訪れるはるか手前で、ユナイト・モスの魂は自死を選択していたのかもしれない。

狂ったように大笑し、そして限界までまぶたを見開き彼は見た。目映いばかりの閃光が走り、目に映るすべての光景がその直中に飲み込まれた。

津波のような光の奔流が背後から押し寄せ、操縦席ごと彼のすべてを飲み込んでいく。

「マリア……」

「GA」社のリンクス、ユナイト・モスが、残されたわずかな時間、一体何を考えたのかは誰にもわからない。

だが、彼は確かにその名をつぶやいた。

女性名であった。

それが一体誰の名前なのかを知る者はいない。

ただ、幼い頃両親を失った彼に残された唯一の肉親、歳の離れた妹にその名を持つ者がいるという記録が残されているのみであった。

「タイラント」の操縦席区間コックピット・ブロックが崩壊した。

次の瞬間、ユナイト・モスの肉体と精神とは分子の塵と化し、その存在は永遠に現世から消失した。

## 傭兵（8）

戦闘の終結から数日が経過していた。

「GA」社の企業ネクスト、「タイラント」によって文字どおり蹂躪されたアナトリア市街地の復興作業は、今のところ極めて順調に進んでいる。

建築物が破壊されたことで発生した大小の瓦礫や戦闘行為の巻き添えを被った民間車両の残骸などはそのほとんどの撤去が既に完了しており、専用車両を用いたコジマ粒子の除去作業も急ピッチで行われていた。

除去作業と言っても現在の技術力ではコジマ粒子そのものを完全に無害化することなど出来はしない。

出来ることと言えば、施設表面などを大量の水で洗浄すること、そしてそれにより発生したコジマ粒子を含む大量の汚染水をどこかの施設で蓄積・保管することぐらいであった。

それでも、何もしないの比べればずいぶんマシな行為だと言える。

日を重ねるごとに、失われたはずの街並みがもとどおりになっていった。

人々の生活も、それに同調するかのごとく当たり前な平穏さを取り戻しつつあるように見受けられる。

少なくとも表立ってはそうだ。

しかし肉親や友人知人を傷つけられ、あるいは永遠に奪われた無辜の民衆にとって、刻み付けられた痛みはそうやすやすと癒されはしない。

その苦痛をいくらかなりとも和らげられるのは、長い年月が差し伸べる忘却という名の神の御手だけかもしれない。

だからこそ、であろうか。

人々は直面した復興作業にのめり込むがごとく従事した。



まるで、そうしなければ自分たちの存在価値が疑われると言わんばかりに、彼らは苦役に耐え汗を流すことを厭わなかった。

老若男女を問わずコロナーの各地から馳せ参じた多くの者たちも、自己の責任をもって奉仕活動への参加を表明した。

地域共同体としての意識がひとつの方向性を見出したのだろうか。

健全な愛郷心の発露。

それは復興計画の立案者としては、文字どおり嬉しい誤算であった。

危急の現場において人手は多いに越したことはない。

不慣れな素人を安易に現場へ投入することでなんらかの問題が発生するかもしれない、そう主張する識者も少なくはなかった。

だが、後の評価がどうであれ、今この瞬間に使える人員が存在するというのは素直にありがたい現実だと言えた。

突如として潤沢な労働力を指揮下に加えた復興作業の担当者は、自己の裁量が許す限り最善と思われる方策を用いて次々と山積みされた難題に立ち向かっていった。

その結果、復旧作業は当初の予想をはるかに上回るペースで進んでいる。

もつとも、作業員の人力に頼る、いわゆる人海戦術のみをもつてしては到底ここまでの伸展は得られなかったことだろう。

アナトリア市民による積極的な行動参加を卑下する訳ではないが、この功績の大半は大量に投入された最新鋭の土木用重機によるところが大きいと思われる。

ACの技術を還元された結果として生まれ出たそれは人間が操縦する「多足歩行型の作業機械」であり、高度に電子制御された二本のマニピュレータを使用することで優れた汎用性を備えていた。

外観こそ人体と大きくかけ離れた印象を与えるが、基本的には肉体労働者をそのままスケールアップした代物だと考えていいだろう。

移動時に車輪や無限軌道を用いる一般車両と異なり過酷な地形をもつとしない運用面での柔軟性が高く評価され、それはかつて軍事面におけるACがもたらしたものと同じ状況を今度は大規模な土木作業現場にも再現することとあいなつた。

マッスル・トレーサー

当初はAC以前に開発された多脚砲台と同じMTという名称で呼ばれたそれらだったが、兵器と同じ略称は民生利用を主とする作業機械にふさわしくないという判断が大勢を占め、今では「機械化マシンされた労働者」略して「レイバー」と言う呼び名をおごられていた。アナトリアも、若干数のレイバーを保有している。

それらは主に大規模な公共工事に投入され、評判どおりに優れた実力を発揮してきた。

機体価格が高額であるのは疑いようもなかったが、その分の価値は十分にあると衆目を納得させるだけ活躍をそれらには見せた。

アナトリア上層部は、実働可能なすべてのレイバーをためらうことなく最前線に投入した。

大型の、そしてそれゆえに小回りの効かない重機類が容易に進入出来ない市街地での作業こそ、これらレイバーにとっての独壇場であった。

そして、一度活動を開始したそれらは、皆の期待を寸分も裏切ることなく自らの存在価値を強く主張した。

ある意味で、それらの存在は「英雄」的であったとすら言える。だが今、最も被害の大きかった市街地中心部付近に展開中のレイバーは、その規模においてアナトリアの保有する機体数を確実に上回っている。

しかも、アナトリアが運用しているレイバーが欧州に根を張るハイテク企業、「レオーネメカニカ」社の開発・販売している機種であったにもかかわらず、眼前で作業中の機体は明らかにそれとは異なる容姿を持つ。

流線型を軸にした「レオーネメカニカ」社の機体とは一線を画する、直線と平面とを主体に構成された無骨な外見。

数日前に同地を襲ったネクストに酷似した雰囲気があるにはあった。

そのはずだ。

それらは「GA」社直属の災害援助隊が、わざわざ遠く北米大陸から持ち込んできた機材であったのだから。

「GA」社は、「卑劣な武装テロリストによる破壊工作で傷ついた、親愛なるアナトリアの友人たち」を救援するという高邁な御題目を掲げ、他企業に率先して大規模な人道的援助に踏み切ったのだ。

それは「ビッグ・シックス」他社が驚きを隠せないほどの早業であった。

「相当な面の皮だな」

執務室の液晶画面に映る状況を冷やかな目で眺めつつ、コロニー代表であるエミール・グスタフは半ば呆れた様子で鼻を鳴らした。

内心で「GA」社の行動を嘲笑すらしてみせる。

そもそも「GA」社の企業ネクストが大暴れしなければアナトリアがここまで甚大な被害を受けることもなく、従って彼らが「人道的支援」と言う名の偽善にあえて手を染める必要性もなかった訳であるからだ。

自作自演とは、まさにこのことであった。

まあいい。

折角手伝ってくれると言うのだ。存分に活用させてもらおうとしよう。

もつとも、「GA」社側にも言い分はあるう。

彼らは本来、コロニー・アナトリアを直接叩くことを目論んではいなかった。

投入したリンクスが功名心に駆られて猪突するなど、上層部にとっては青天の霹靂に近かったとも言える。

しかも、そのリンクス、ユナイト・モスが行った独断専行は「GA」社になんの利益ももたらさなかったばかりか、貴重なネクストをその搭乗者ごと失うという最悪の結果を招いてしまったのだ。

社の上層部がそろって頭を抱えたであろうことは想像するに難くない。

「GA」社は事態の収拾に奔走した。

彼らは非公式なルートを使用してアナトリアの上層部、すなわちエミールと彼が掌握するアナトリア議会与党との水面下での折衝を試みた。

アナトリアが要求するであろう膨大な手土産を先んじて差し出し、彼らは本件に関する情報の隠匿を依頼した。

「ビッグ・シックス」のひとつがコロニー居住民に対する残虐行為　それが社の意向ではなかったにしろ　を行ったという明確な事実。

そして、コロニーとの交戦によって自社の企業ネクストを撃破されたという底なしの不名誉。

前者が公となれば、旗色を鮮明にしていない一部の中立コロニーは「GA」社との関係を忌避する方向に舵を取るだろう。

どうせ隷従するのであれば無慈悲な専制君主に対してよりも慈悲深い聖人君主に対しての方がはるかにマシ。そう考えるのは人間として極めて自然な考えであるからだ。

例えばそれが“相対的に”という枕詞に飾られていたとしても。

民衆とは、常にそういう生き物である。

支配者たる「GA」社は、そのことを他の誰よりも知悉していた。

少なくとも、そのように自負してきた。

それゆえに、彼らは骨髄からそうなることを恐れた。

大衆心理の離反。

その呼び水ともなりかねない本件を、「GA」社上層部は自社の土台に加えられた鉄槌の一撃であると認識したのだった。

そして後者が明らかとなれば、「G A」社が持つ「企業連合体」内での政治的発言力に著しい陰りが生じると彼らは考えた。

それは、おそらく事実であろう。

今やネクスト戦力の立ち位置は、純軍事的な戦闘単位と言うより、むしろ政治的な臭いを放つ無粋な代物へと移り変わってきていたからだ。

戦略兵器。

誤解を恐れず言い切れば、まさにその言葉が当てはまる。

はるか昔、七つの海洋を支配した巨砲艦、いわゆるドレッドノートがそうであるように、企業が保有するネクストの質と量は、内々において彼らの力関係を左右する戦略性を秘めるようになっていた。

それは、主に精神的な面が大きいと言える。

確かにネクストは強力無比な戦術兵器だが、あえて運用局面だけに限定すればそれらより有効な兵種は数多ある。

施設の破壊を目的とするなら精密誘導兵器を長距離から撃ち込んだ方がはるかに有効かつ安上がりであり、広範囲に展開する不正規戦部隊を制圧する任務は個々の性能そのものよりも手駒の数がものを言う。

では、ネクストが持つ軍事的な利点とはなんなのか？

それは、防御側が選択出来る対抗手段の少なさである。

現状の戦術単位においてネクストを阻止しうる兵器が他のネクスト以外に考えられぬことに加え、大組織を動かす際に必要な管理上の事務処理を要しない腰の軽さは防御する側に十分な対策を採るだけの時間的余裕を与えない。

神出鬼没な特殊部隊であつても組織的な対応に困るというのに、ネクストの場合は局地的な戦闘力において他を冠絶すらしているのである。

対象を撃退出来ぬのであれば逃げるしかない。

そして、逃亡出来ないのであればそこには敗北のみが待っている。

る。

その現実が一体何を意味しているのかは明白だった。

ネクスト戦力に勝る勢力は、一朝有事に際しより多くの敵戦略目標を同時に襲撃し、かつ自陣営のそれを防衛出来るという事実である。

その結果がすべての企業にもたらしたものの、それは恐怖であった。

「国家解体戦争」に勝利しこの惑星上に覇権を打ち立てた「企業連合体」各社は、苦心して漸く確立した自己資産の喪失を何よりも恐れた。

そして、自らにそれを強制するかもしれない他社ネクストの存在をも。

今やお互いの持つネクスト戦力への隠し切れない恐怖心が、企業間における危うい連合を辛うじて維持する原動力となっていた。

企業が先を争うようにネクスト戦力の充実を図る理由がここにあった。

彼らは、かつての旧大国が互いに最終兵器を突き付け合うことで世界の均衡をなしていた時と同じ状況を、新たに求め作り出したのであった。

#### 相互破壊戦略。

こちらの滅亡を欲するなら、そちらも同様の道を覚悟せよ。

愚かな戦略ではある。

しかし、それがあつた程度の有効性を秘めている事実を誰も否定出来なかつた。

否定出来ない以上、企業がその道を選択することもまた余りに必然な結末だと言える。

「G A」社首脳陣が抱いた不安材料は、ここに端を発していた。ネクスト技術の面で他企業に出遅れた「G A」社には明確な焦りがあつた。

多大な労力を費やし漸く芽を出しつつあつたこれまでの成果が、

今回の敗戦により語和算になる可能性が出てきたからだ。

手塩にかけて育ててきた第二世代の企業リンクスがいわゆる“張り子の虎”であったなどと他企業に吹聴されれば、彼らの努力はその多くがたちまちのうちに水泡と帰するだろう。

実際の戦闘実力はともかくとして、「国家解体戦争」における神話の担い手としてのネクスト、その役割を果たせないリンクスの存在価値は抑止力としての任を全うするには明らかに力不足だ。

そして、戦略的な脅威だと他者に認識されない手駒の数をいかにそろえたとしても、それが政治的発言力に直結しないのはこれもまた自明の理であった。

もちろん、完全に情報を隠匿することなど企業、特に「ビッグ・シックス」の諜報体制を相手に完遂出来る訳もない。

「GA」社上層部も、それは十二分に判っていた。

しかし、少なくとも外面だけは整える必要がある。

体面の維持というものはある意味で滑稽な演劇であるかもしれないが、組織が大きくなるにつれ決して無視出来る代物ではなくなっていく。

糧を得た人々が次に欲するのは、いつだって“名誉”であるからだ。

それらが確実に維持されるのであれば、組織は大概の不利益を甘受する。

特に官僚化した巨大組織であれば、その傾向は強固であった。

それゆえに、この交渉の主導権は初めからアナトリアの側にあった。

ある意味で人質を得たにも等しい立場を手中に収めたエミールとその腹心たちは、巧みに「GA」社経営陣の自尊心をくすぐりつつ表向きは今回の損害を「反体制武装テロリストによる物」と公表し、その引き替えに彼らから多大な物的支援と資金援助とを勝ち取った。

そしてその一方、最後まで頑迷に抵抗した「GA」社首脳に対

し「アナトリアの傭兵」を承認させることにも成功したのだった。約一〇億コームに相当する物質的な損害と数百人におよぶ死傷者。

それだけの対価を払ったコロニー・アナトリアが獲得した成果として考えると、それが適正なものであったのかどうかは判断の分かれるところと言えたが、気位の高いことで知られる「GA」社から一方的な譲歩を引き出したのであるから外交的な勝利をうたつても、あながち間違いではないだろう。

それが本当に喜ぶべき勝利であったのか、誰にもわからなかったのだとしても。

「とにもかくにも、我がアナトリアは政治的なフリーハンドを手に行うことが出来た」

まるで信じてもない論文を無理矢理発表させられた学者のとき表情を見せると、エミールは傍らに立つスミカに告げた。

「これで君らが思うような世界が成立するという訳だ。まだ、その第一歩に過ぎなくはあるが」

「正直、ノボトニー氏のあげた戦果には脱帽するしかありません」

幾分かは社交辞令が込められているのであろうが、スミカはそう言つて「アナトリアの傭兵」となるべき男を賞賛した。

むしろ絶賛に近い。

「いかに相手が『GA』の粗製とはいえ、曲がりなりにもリンクスとしての初戦で同格のネクストを倒してみせたのですから。その実力は十分高い点数を付けられます。あなたの人選に間違いはなかった。まずは、そう評しても構わないのではないでしょうか」

「本音かね、それは？ まだまだ自分たちオリジナルには遠くおよばない、とでも言いたそうな口振りじゃないか」

いつも以上に抑制した彼女の物言いに何か感じるものがあつたのか、エミールはそう言つてスミカをからかった。

本当に他意のない発言であつた。



だがその言葉を受けた彼女は、かすかに、そう本当にかすかにだが猛禽類のごとき鋭利な眼光をその切れ長の目に浮かべてみせた。威嚇ではない。

明確な闘争心の表れであった。

それは、研ぎ澄まされた名刀の煌めきにも似て見る者を魅了する傍ら、その心胆を寒からしめる何かを余りにも濃厚に含んでいた。人の気を知るに鋭敏なエミールはすぐさまその存在を察したが、この時はあえて気付かぬ振りをした。

それは自分より明らかに強い者と相対した人間が本能的に選択する、いわゆる自衛行動のひとつであった。

恐ろしいな。

背筋に冷たい汗を感じ、エミールは自嘲気味に笑ってみせた。

彼は率直に思った。

流石は世界を相手に戦いを挑んだ連中だ。

その資質と経験は伊達ではない、そういうことか。

願わくば、こんな恐ろしい連中　オリジナルとやらを相手に

ことを構えたくはないものだ。

「そう言えば、君」

椅子の背もたれに体重の大半を預け、エミールはおもむろに話題を切り替えた。

この女と共に沈黙の時間を過ごすという重圧に耐えられなかった、というのが彼の本音であった。

軽口を叩くようなテンポでエミールは続ける。

「ノボトニー少佐は一命を取り留めたと聞いたが？」

「左様です。コロニー代表」

事務的な口調でスミカは答えた。

ドライアイスのごと冷たさをたたえるその態度は相変わらずだ。しかし、そんな彼女の口元に小さな笑みが浮かんでいるのをエミールの慧眼は見逃さなかった。

「それは重畳」

そう言つて彼は大きくうなづいた。

この女もこのような表情をするのだな。

そう思うとなぜだか可笑しさが込み上げてきた。

それを止められなかった。

ヴァルター・ノボトニーが病院に担ぎ込まれたのは、彼がリンクスとしての初陣を勝利で飾った、まさにその直後のことであった。

その“暴君”という名のごとく幾多の生命を一方的に奪い去った敵機体の沈黙が確認され、一部の人々から爆発的な歓声が湧き起こったその瞬間、勝利者たるアナトリアのネクスト「ノートウング」もまた、突如として機能停止状態に陥つたのだった。

搭乗員の生命活動を監視する電子頭脳が異常数値を感知し、戦闘の終了を待つて機体の行動を緊急停止させたのである。

それは余りに突然の出来事だったゆえ、AMSを含む機体情報の多くを管理していたフィオナでさえ実際にことが起こるまでその予兆に気付かなかつた。

管制室側からの遠隔操縦に従つて格納庫へと帰還した「ノートウング」の操縦席からよろめくように外に出たヴァルターは、心配して駆けつけてきたフィオナたちの眼前でそのまま意識を失い音を立てて倒れ伏した。

戦闘の勝利に浮かれていた彼らの意識を、一瞬で奈落の底に突き落とすかのごとき光景だった。

フィオナの口から絹を引き裂くような鋭い悲鳴が飛び出した。

完全に冷静さを失つた彼女は、床面に横たわるヴァルターの傍らに全力で駆け寄る。

名を呼びながら激しくその身体を揺さぶるが、彼はまるで息を引き取つたかのように身動きひとつしなかつた。

分厚いパイロットスーツに遮断されその心肺状態がいかなものかをうかがい知ることは出来なかつたが、危険を感じたバイスベルガーはすぐさま直通回線を利用して緊急車両を呼び寄せた。

コジマ汚染による危険を看過してまでやって来た救急隊員たちは、的確な応急措置をヴァルターの肉体に加えつつその身を緊急病棟へと運び込む。

「肉体の持つ生理機能が滅茶苦茶です」

彼を診察した医師の第一声がそれであつた。

無理もない。

恐れていた事態が現実のものとなり、フィオナはその艶やかな唇を噛み締めるしかなかった。

激しい自責の念が彼女の全身を雷鳴のごとく貫く。

自分が、誰よりも自分が気付かなくてはならないことだつたのに。

絶望的な無力感が虚空から押し寄せ、滂沱の涙となつてその目からあふれ出した。

ただでさえ低いAMS適性だとされているヴァルターが、まったく事前訓練を受けることもなくネクストを操縦し、しかも激しい実戦まで経験したのだ。

その心身を襲つた凄まじいまでの負荷は単なる神経障害を与えるだけにとどまらず、彼の肉体を制御すべき根幹部分にまで大きな負債をもたらしたのだつた。

嘔吐、失禁、そして射精。

まるで整合性の取れない無惨な生理現象に苛まれたヴァルターの肉体は一時集中治療室に運び込まれるまでに消耗し、フィオナをはじめ関係者一同が見守るなか、わずか数日の間に見る見る痩せ衰えていった。

祈るしかないフィオナにとって、眠ることすら困難な辛い夜が幾日も続いた。

医師団による懸命の治療が功を奏し彼が完全に一命を取り留めたと判断されたのは、ほんの二〇時間前のことだつた。

今彼はコローニ中央区画にある病院で最上級の個室を与えられ、その身体を寢床の上に横たえている。

だが、その腕には点滴の管が繋がれたまま。

かさかさに乾いた肌は血色を失い、その意識はいまだ幻夢境よりの帰還を果たしてはいない。

しかし一定の間隔で彼の脈拍を知らせる電子機器は、ヴァルター・ノボトニーがふたたび目覚めるのだという確たる約定をすべての者に力強く宣言していた。

「『英雄』だよ」

エミールはそんなヴァルターを思い、ふと意味深な言葉をもらした。

「彼は、そうなる定めにある。いや、私がそう導くのだ。彼女は責めるだろうが私は決して後悔しない。あの男は間違いなく『英雄』となるべき男だ」

「『英雄』」

スミカは、その言葉を余り好かないような素振りを見せてエミールに応じた。

「あなたのような現実主義者の口からその単語が現れるとは思いませんでした」

「それは心外な評価だよ。スミカ君」

執務机上にある液晶画面の電源を落とし椅子ごと彼女へと向き直った彼は、首を大きく左右に振った。

「私とて、出来ることなら夢想の世界で戯れていたと思うているのだ。女子供のように。それを許してくれないのは、むしろ私の周りに存在する『現実』という名の観客の方だよ。彼らは自らが夢想の世界に在るために、私という暇人でありえないほどの苦勞を押し付けようとしてくる。まったくもって困ったものだ」

「諧謔味のある御言葉です」

ふつと口元を綻ばせてスミカは言った。

「人はいつでも、自らの願望を投影出来る対象をこそ強く求めるものですから」

「わかつてくれて嬉しいよ」

合わせてエミールもまた表情を崩した。

「ちなみに君は、『英雄』とは一体何者か、その本質を心得ているかね？」

「浅学にして存じあげません」

そんなものは知りたくもない。そう言いたそうに彼女は答えた。

「では、教えよう」とエミールが続ける。

「『英雄』とは優れた功績をあげ人々を導いた人間に与えられる称号ではない。それは『英雄』たるの要素であって条件ではないのだ」

いつしか彼は、出来の悪い学生に講義をする教員のごとき顔つきとなっていた。

その表情には、どこことなく楽しげな雰囲気漂っている。

もしかしたら、これこそが本来の彼が求めてきた立ち位置であったのかもしれない。

淡々とエミールは語った。

「英雄」とは人々を導く存在ではない。

それは、時代の变革を求める人々の先頭に立つひと握りの人間を指す言葉だ。

もちろん、彼または彼女の意思などこの場合はどうでもいい。

望むにしろ望まざるにしろ、「英雄」を「英雄」たらしめているのは常にその周囲を占める無責任な“その他大勢”とやらの意思だからだ。

いわゆる「凡夫」の集団だと言ってもいい彼らの思いこそが、単なる一個人を「英雄」となさしめているのだよ。

「民衆とやらは、いつだって批評家だ。そして、それゆえにそれ以上の立ち位置にはかわらうとせぬ。自分自身の願望を勝手に他者へと押し付けた拳げ句、それが現実と乖離したならば裏切られたと叫び拳を振り上げる」

そこまで言って、エミールはしばらく言葉を切った。

少し悲しげに目を伏せると彼は立ち上がり、窓から遠くに広がる青空へ向けて視線を投げる。

そして、最後にすべてをまとめるかのごとく決然と彼は言い放った。

「まことに気の毒だが、少佐には『英雄』となってもらおう。我がアナトリアのため、私が背負い込む肩の荷を代わりに少し担いでもらおう。それこそが『英雄』たる者の使命だろう。そうではないかね、君」

「心から同情します」

エミールの言葉に、スミカはそう答えた。

その発言がエミールに向けてのものなのか、それともヴァルターに向けてのものかは彼女以外の誰にもわからなかった。

しかし、その言葉自体に嘘はない。

そのことだけは、誰の目にも明らかであった。

同刻。

ヴァルター・ノボトニーは、ゆっくりとそのまぶたを開いた。

永い眠りから覚めたとは思えないほどにその意識は判然としている。

自らの置かれた状況にも、すぐさま理解が追いついた。

だから彼は、自身が身体を置くベッドの脇で半身を突っ伏すように寝息を立てるフィオナ・イエルネフェルトの存在を、誤解することなくやんわりと見詰めることが出来た。

身体が鉛のように重い。

しかし、その重さこそが“生きている”という実感をヴァルターの心にはつきりと刻み付けた。

彼はそつと手を伸ばし、疲れて眠る彼女の頭部を優しく撫でた。ありがとう。

ヴァルターは小さく唇を動かし、最愛の恋人に短く告げた。

窓から吹き込んできた微風が一時の平穏を彼に噛み締めさせて

いた。

## 孤狼（1）

「敵戦車三台、そっちに向かったぞ！」

文字どおり焼けるような熱砂の下に身を隠し、迫りくる敵戦力を今か今かと待ち構えていたエンリケは、心から信頼する同僚に向けて警告を発した。

情熱的なアングルシアで生を受けた彼は典型的なラテン系気質の持ち主だ。

悲観的な考え方とは、まったくの無縁。

今回の任務でも、危険な先陣を努めながらどこかでそれを楽しんでる節があった。

彼は、続けざまに通信を送る。

「随伴歩兵はなし。俺たちも舐められたものだな、ノモト」

「エンリケ。敵を侮るのはよくないぞ」

ノモトと呼ばれた彼の同僚からの返信はすぐさまやってきた。若い男の声だ。

いささか緊張感を欠いているかのようなエンリケの姿勢を短い言葉でたしなめる。

ただし、それ以上会話を重ねるような真似はしない。

それは、自らの役目を十分に理解している熟練者のみが取れる合理的な態度であった。

「こちらは予定どおりに状況を開始する。モンゴメリとコワルスキーも一緒だ」

「了解」

ノモトからの通信を受け、エンリケは不敵に笑った。

傍らに置いた一二〇mm無反動砲を握り締める。

一般的な人体と比較すると、極めつけに大きい砲だ。まさに大口径と言えるサイズである。

重量的にも相当のものであろうそれを彼は軽々と担ぎ上げ、は



つらつとした口振りと同僚に応えた。

「こっちはディアスとマックスとでやる。傭兵部隊の強さって奴を、あの連中に教育してやるうぜー！」

ホワイト・アフリカ。

広大なサハラ砂漠を、その南に持つ土地。

かつて、幾多の民族が興亡の歴史を繰り返した砂漠とステップの広がる荒野である。

そのさらに西側の地域は「マグリブ」という名称でも呼ばれていた。

マグリブとは古い言葉で「西の方」という意味を持ち、その直接の語源は「日の没する土地」という単語であった。

地理的にはアフリカ大陸の北西部　いわゆる「黒人の頭蓋」における頭頂部の後半部分に当たる。

高いところでは標高三〇〇〇mを越える山々の連なる長大なアトラス山脈が大西洋からの海風を受け止め、強い日差しによって渴ききった大地に時折恵みの雨を降らせていた。

その関係上、思いの外に湿潤な気候を持つ土地である。

沿岸部においては農業も盛んだ。

同地は本来、はるか東方にある別の砂漠で生まれた唯一神を信仰しその教えに忠実にあることで素朴に生きる「砂漠の民」たちの故郷であった。

彼らは、父祖の代より連綿とこの地で羊を追い、小麦やオリブを栽培して糧を得、子を慈しみ育て、そしてどこまでも人間らしく死んでいった。

マグリブにおいて人々は、あくまでも神と大地とに従属する小さな存在であった。

彼らは、決して自分以外の何かを支配しようとしなかった。

それは、自分たちが自分たちだけで生きているのではないことを彼ら自身が熟知していたからだ。

## 運命。

その言葉を強く噛み締めることで、人々は己に降りかかる厄災までもを諾々と受け入れてきた。

そして彼らは、そんな自らの生き方に深い満足感をすら覚えていた。

それはある意味、最も人が人らしく生きた時であったと言えるのかもしれない。

そんな時代が永遠に終わりを告げたのは、人類史全体で見るとさほどに昔の話ではない。

天と地と神の恵みでささやかな生活を送る人々の前に、別の唯一神を信奉する人々が海を渡ってやってきた。

地中海より北、俗に「欧州」と呼ばれる地域よりこの地を訪れた人々は、自分たちが神より与えられたと主張する独自の正義をうたいあげ、その理不尽な価値観を唯一絶対のものとして砂漠の民に強制した。

背景となったのは、彼らが故郷より携えてきた強大な武力であった。

## 組織立った近代的な軍勢力。

部族同士の抗争は経験していても本格的な戦争行為の実績を持たない砂漠の民は、容赦なく行使される無慈悲な力を前にしてまったくの無力であった。

散発的な抵抗は圧倒的な組織力の前に圧殺され、彼らは意に反する新たな生き方を受け入れるしかなかった。

さらに、帝国を名乗るその不躰な来客は母なる砂漠に眠るさまざまな資源を飢えた鯨が小魚の群れを丸ごと飲み込むようにして奪い去り、そこから得られる利権を元来自分たちの所有物であったかのごとくに独占した。

人々は何世代にも渡って抑圧され、貧しい生活を余儀なくされた。

それは砂漠の民、その細胞ひとつひとつに刻まれた屈辱の記憶

であつた。

ゆえに、「国家解体戦争」が勃発した時、砂漠の民は熱狂的に喜んだ。

美しい題目を掲げて敢然と立ち上がり、暴虐極まる「国家」の力を次々と打ち砕いていく「企業」の姿に、彼らは輝かしい未来の到来を垣間見たのだつた。

しかし、新しく彼らの上に君臨した「企業連合体」と呼ばれる支配者もまた、本質的には「国家」となんなら変わるところがなかった。

確かに、奪うだけであつた欧州の宗主国と異なり、「企業連合体」は民衆の衣食住を保証していた。

コロニーに定住し与えられた労働に従事すれば今日と同じ明日が約束されるという日々は、間違いなく魅力的な日常のひとつであるに違いない。

だが誇り高い砂漠の民は、自分たちがふたたび「家畜」として扱われることに今度こそ耐えられなかつた。

生きる糧とは、あくまでも己が手で得るべきものであり他者から恵んでもらうものであつてはならない。

自らの両脚のみをもつて天と地の狭間に立つのが砂漠に生きる者にとつて真にあるべき姿であるなら、山羊のごとく頭を垂れ主人からの餌を食むような生き方をどうして選ぶことが出来ようか。

改めて屈辱の歴史を選択することを彼らは決然と拒絶した。

例えその先にかなる惨劇が待ち構えているとしても、砂漠の民は今度こそ自らが自らであることを実力で証明する過酷な道へと第一歩を踏み出したのであつた。

至強に対して至弱が挑む激烈な武装闘争はこうして幕を開けた。

ノモトたち戦慣れた傭兵が「マグリブ解放戦線」と呼ばれる武装組織に参加したのは、実は今年になってからの話だ。

報酬が目当てではない。

巷には多くの誤解があるようだが、傭兵の俸給は決して高いものではないのである。

彼らほどの経験と力量の持ち主であれば、むしろ企業側に味方した方が高い賃金を獲得出来たかもしれない。

しかし彼らはその道を選ばなかった。

雇用条件の問題ではない。

それは、強者が弱者を力で押さえつけるという「企業」のやり方に素朴な反骨心を刺激されたがゆえであった。

信念。

その言葉を「願望の強烈なものに過ぎない害悪」と忌避する高級軍人もいない訳ではない。

だがしかし、今の彼らを支えているのはまさにその言葉そのものであった。

己の正義に準じること。

裏切られることが常という傭兵たちの世界において、それは彼らが彼らであるために必要とする掛け替えのない道標であった。

砂の中からカメラ部分だけを突き出した高感度センサーが、目前を侵攻する戦車の姿を捉えた。

その映像は、電子機器の助力を得て、砂地にうがたれたタコツボに潜むノモトたち傭兵のもとへと送られる。

角張った車体と砲塔。

そしてまっすぐ前方へと伸びる長大な一二〇mm滑腔砲。間違いない。

東洋の大企業、「有澤重工」社が開発・生産している主力戦闘車、「オニコウベ」だ。

それは、成形炸薬弾に対して絶大な防御効果を発揮する複合装甲で身を固め、鈍重そうな見掛けによらず八〇km/hを越える速度で原野を疾走出来る代物。ACの登場以前は「陸戦の女王」と称されていた存在の一角であった。

いや、現在でもその戦闘力に陰りはない。

大口径主砲が発揮する絶大な火力と強固な装甲防御は、一般的な戦闘部隊にとつて脅威以外の何者でもないからだ。

「オニコウベ」は、通常の行軍隊形を維持しながら一定の速度で前進していく。

おそらくはノモトたちの存在に気付いていないのだ。

砲塔上部に装備された長距離センサーの性能とあらかじめ進撃路に沿って実施された空爆による制圧効果とを盲信しているのだろう。

甘過ぎる、と言わざるをえない。

ここは彼らにとつて“敵地”なのだから。

本来主力戦闘車には、歩兵が機動的に運用出来る対戦車兵器に對して十分對抗出来るだけの装甲が全周囲に施されてあつた。

だがノモトと彼の同僚たちが装備する一二〇m級の対戦車無反動砲は、その想定された貫通力をはるかに上回る代物だつた。

正面装甲ならばともかく、タンDEM式の弾頭を備えた一二〇m成形炸薬弾による攻撃はそれ以外の箇所であればほぼ確実に彼女らの対弾防御を突き破る。

それは、本来軽車両に備え付けられて使用されるべき火炮であつた。

当然だが、従来の歩兵が用いるような携帯用対戦車兵器ではない。

個人で運用するには余りにも重過ぎるのだ。

アーマード・ファイティング・スーツ

「装甲戦闘服」

略称AFSの開発成功が、その常識を覆した。

歩兵が文字どおり“着用”して使用する補助動力付の強襲用装甲。

着用者の全身を強化樹脂製の特殊装甲によつて密閉し小銃弾や爆風破片効果に対する一応の防御力を獲得する一方、外部動力の支援を与えることで相応の重火器を運用可能としたAFSは、歩兵部

隊に対しそれまでとは隔世の戦闘力を付与することに成功した。

ノモトたち傭兵部隊は、全員がこのAFSを着用している。

NBC兵器に対応することを考慮に入れ限定された空調と温度調節機能を備えたAFSなくしては、照りつける太陽の下で熱砂に潜むなどという戦術行動を歩兵が取れうる訳もない。

そして、目玉焼きが作れるほどの温度を持つ砂の大地は装甲車両が車外に持つ赤外線センサーの鋭敏な目から傭兵たちの存在を隠しとおした。

彼らの努力は報われた。

無警戒に砂上を進む「オニコウベ」の群れがノモトたちの目前に迫る。

距離五〇m。

目標が脆弱な横腹を見せた直後にノモトは動いた。

彼は脱兎のごとくタコツボの中から躍り出ると、肩に担いだ二〇mm無反動砲を狙い違わず発射した。

AFSによる動力補助がなければとても運用出来ない大重量兵器を携えた彼ら傭兵は、目標が回避出来ない至近距離から完璧な奇襲を行った。

成形炸薬弾が「オニコウベ」の側面装甲を一撃で食い破り、プラズマジェットの流れを無防備な車内へと流し込む。

進入してきた圧倒的な熱量に、乗員たちの肉体が松明のように燃えあがった。

断末魔の悲鳴が車内に溢れかえり、そこはまさしく地獄絵図と化した。

一部の車両は搭載砲弾の誘爆により、その砲塔部を爆音と共に天高く舞上げた。

たちまちのうちに、行軍中にあつたすべての「オニコウベ」が沈黙した。

味方の損害は皆無。一方的な勝利だった。

だが、ノモトたちは喜ばない。

自分たちの手で黄泉へと送った敵戦車乗員を悼むような真似も  
しない。

そんな贅沢を楽しむ前に、やらねばならないことが山積みであ  
るからだった。

「撤収！」

ひと言だけノモトは叫び、次いで一目散に駆け出した。

他の面々も肅々とその後続く。

それは策定した計画どおりの行動だった。

間を置かず、敵主力から苛烈な報復が加えられるであろう。

歴戦の兵士である彼らは、十分過ぎるほどにそれを理解してい  
た。

連中が事態を把握していないうちに次の抵抗線へ後退する必要  
があった。

さもなくば、今度はきちんと準備を整えた敵戦闘部隊と正面か  
ら激突する羽目となるう。

ノモトたちが戦う相手は今の連中だけではない。

作戦目標を達成するためには、一滴たりとも無駄な汗を流すこ  
とは許されなかった。

少なくともノモトはそう確信していた。

ノモトたち六人の傭兵に与えられた任務は、侵攻してくる企業  
部隊の足止めだった。

数日前、「マグリブ解放戦線」の戦闘部隊は「GA」社が保有  
する化石燃料プラントへの襲撃を実行した。

襲撃戦力は、AFSを着用したノモトたちを含む一〇人にも満  
たない兵力である。

いかにも少なかった。

中隊以上の人員配置が確実視されていた攻撃目標に対し、数的  
な面ではその一割にも達しない。

まさに絶望的な戦力比だと言えた。

人類史が近代を迎え、軍隊が発揮する戦闘力の要諦が兵の士気から火力へと変化したことで、防御側の優勢はほぼ確立されたものとみなされていた。

よく準備された火力点を用意し来襲を待ち構える立場の防御側と比較して、攻撃を行う側はどうしても自陣を出て敵の射撃に身を晒さなくてはならないからだ。

ゆえに、装備の質においてよほどの差がない限り、野戦での攻撃成功には防御側の三倍におよぶ戦力が必要と言われていた。

その点のみで考えると、「マグリブ解放戦線」が今回投入した戦力はまったく必要量におよばない水準でしかない。

予想された防御側兵力よりも、それは一桁小さいのである。

常識的に考えれば、その行動は文字どおり無謀の範疇にこそ含まれるべきものだろう。

だが面白いことに、視野を広げ上の立場から戦場を眺めると、それが金科玉条のものではないことに辿り着く。

当たり前だが、守るべき拠点を持たない攻撃側は自らの戦力を機動的に運用することが出来る。

攻撃する場所と時間とを自由に選択する権利があると言い換えてもいい。

翻つて、守るべき拠点に縛られた形である防御側は、敵が攻撃を掛けてくる可能性がある場所すべてに必要とされる戦力を配置しなければならぬ。

もちろんその重要度によって配置する戦力に差はあるだろうが、攻撃側は自軍が投入する戦力で“勝てる”箇所を狙ってくるであろうゆえ、拠点の防御を諦めるのでない限り相応の努力を惜しむ訳にはいかなかった。

だが、どれほど潤沢な兵力を持つとも現実的にそんなことは不可能だ。

しかも、攻撃側は“攻撃を行わない”という選択肢まで持つのである。



諸葛亮孔明。

R・E・リー。

山本五十六。

戦史において、兵力的に劣勢なはずの側が逆に攻勢を取ろうとする意味がここにある。

局地的な戦場においてはではなく全般的な戦争行為そのものにおいて“主導権”を握ることは、それほどの重要性が存在するのであった。

「国家解体戦争」でも、最初期の奇襲により国家が保有する軍事力の大半を撃滅し圧倒的に優位であったはずの企業側が少数の部隊に煮え湯を飲まされたという実例がいくつ也存在する。

ことに特殊部隊「エクスカリバー」と称されたAC部隊は、比較的防御の薄い企業側の拠点を少数の兵力で電撃的に襲撃。

防御側の混乱に乗じて戦果を拡大し、彼らが体勢を立て直すよりも早く疾風のようにその場を去るといった典型的な一撃離脱を繰り返すことで、「企業連合体」を一時的にしる切齒扼腕させた。

神出鬼没に暴れ回る小部隊を中心とした、いわゆる「遊撃戦」というものは、さほどに厄介な戦術なのである。

ノモトたち傭兵は、そのことを熟知していた。

主導権を得るということは、規模の大小さえ考えなければ限定された戦場にあっても極めて有意義な手段だと断言出来る。

喧嘩は先手必勝。

それは使い方さえ間違えなければ、まったく非の打ちどころのない真実であった。

彼らは少人数ゆえに見えにくくという利点を最大限に利用し、明け方近く、守備兵の警戒がわずかに緩んだ隙を狙って保有するすべての火力を短時間で周辺施設に叩き込んだ。

完全な奇襲であった。

火災が発生し、敵情が把握出来ないことで混乱をきたした企業側の指揮系統を尻目に、ノモトたちはプラントへと肉迫。

速やかに目標を達成し、味方の血を一滴も流すことなく撤収に成功したのだった。

化石燃料プラントの損害は甚大であり、むこう一ヶ月は稼働不可能との判定が下された。

企業に致命傷を与えたなどとは到底言えない微細な戦果であったが、「マグリップ解放戦線」にとっては久方振りに味わった勝利の美酒だ。

兵士たちの士気は盛り上がり、同様の計画が広い範囲で次々と実行に移された。

これにとまなう「GA」社の対応は迅速だった。

彼らは自分たちが戦争の主導権を失っている今の状況を完全に認識した。

ならば、それを敵から奪い返さねばならない。

そのためには何が必要か、と彼らは考えた。

導き出された回答は「攻勢」であった。

彼らは高い機動力を備えた臨時の戦闘団を多数編成。

「マグリップ解放戦線」の拠点と目されていた地域に向けて、同時多発的な「索敵撃滅戦《サーチ&デストロイ》」を開始したのだった。

解放戦線にとって、それは最も好ましくない敵の反応であった。

そもそも遊撃戦・ゲリラ戦とは、兵力的に劣る側が戦略的主導権を握り続けることで相手に受け身の体勢を強要し、その間を利用して状況の変化を待つというのが目的だ。

敵の戦力と正面から衝突しても我が勝利を収められない事実を確信しているからこそその選択肢だと言ってもいい。

遊撃戦とは極めて有効な戦争手段だと先述したが、反面それが戦争を勝利に導いたというケースは決して多くない。

先に挙げた古の将帥たちも、そのすべてが最終的な“敗者”なのである。

正面戦力で圧倒的に勝る側がひとたび全面攻勢に転移した場合、

主導権の維持にすべてを託していた側がなすべきことは余りない。

せいぜい、局地的な反撃で敵に予想以上の出血を強いるのが関の山だ。

一両日を待たぬうちに、解放戦線が拠点としていた集落が一ダースほど灰燼と化した。

解放戦線の構成員でない市井の人々も、巻き添えを食らうように多くがその命を失った。

今回「GA」社を突き動かした決意は、極めて強固なものだった。

彼らは一般住民を巻き込むことを一切躊躇せず、徹底的な殲滅戦を行ったのだ。

「ビッグ・シックス」の他企業も、その行動を非難したりはしなかった。

平和を脅かすテロリストには人権などない。

それが企業の共通認識であり、恐ろしいことにコロニーに居住する一般の人々もおおむねその考えを支持していた。

無慈悲な攻撃により家を焼かれ生活の拠点を失った多くの人々、その大多数が非力な女子供、そして老人たちであった。は、

戦火のおよばない安全な地を求めて南へ、熱砂広がるサハラへと向かった。

疲労困憊し途中で力つきる者も数限りなかった。

そして、物資の不足による飢えが時を経ずして彼らを襲った。

「マグリブ解放戦線」指導部は、彼らの逃避行を援護したりはしなかった。

それが、企業によって仕掛けられた一種の罠であることに気付いていたからである。

事実、「GA」社は解放戦線が難民の逃散を支援するために投入するであろう機動兵力を殲滅すべく、近隣に展開する機甲部隊に集結を命じていたのだった。

そんな見え透いた策略を前に全滅覚悟で貴重な戦力を割くなど、

ただでさえ兵力の不足にあえぐ解放戦線にとって到底出来る相談ではない。

加えて、冷徹な政治的打算もそこにはあった。

企業による残虐行為を声高に宣伝することで、解放戦線は自己の政治的正当性を強く訴えることが出来る。

上手くいけば、企業と一般民衆との間に冷たい楔を撃ち込む一打ともなりえよう。

民衆を巻き込んだ泥沼のゲリラ戦に頼らねばならない解放戦線首脳部にとり、それは極めて魅力的な選択肢であった。

だが、一部の部隊がそれを拒否した。

主に制圧された地方の出身者からなる兵士たちは解放戦線首脳部の意志を完全に無視。

避難民への物資補給を支援すべく、手持ちの兵力を「GA」社が広げる凶暴なあぎとの前に決然と差し出したのだった。

その中にノモトたちはいた。

彼らは正面に展開する機甲部隊の補給線と先鋒部隊を小刻みに叩きつつ、解放戦線の「聖域」と言えるサハラに向かう避難民の間に複数の阻止線を構築していた。

彼らは、戦意旺盛ではあるが技量の低い民兵たちの協力をあえて断り、おそらくは増強大隊規模と思われる敵戦闘団を相手に粘り強く戦った。

だが、所詮は分隊にもおよばぬ小兵力である。

次々と新手を繰り出してくる企業部隊に対して撤退につぐ撤退を強いられた傭兵たちは、遂に最終防衛線とでも言うべき場所にまで追い込まれたのだった。

一二・七mm機関銃が咆哮する。

装甲車両にとっては豆鉄砲同然の火力だが、ひとたび火を噴いたそれは通常の歩兵部隊に対して圧倒的な制圧力を発揮する。

今ノモト達の眼前にはおおよそ中隊規模の歩兵部隊が支援車両

とともに展開し、激しく銃撃を浴びせ掛けてきた。

企業部隊が使用する七・七mm級の分隊支援火器が、断続的な銃声を轟かせ続けている。

灼熱の太陽の下、黄金色に輝く曳光弾が双方の間に交差した。

ただし、降り注ぐ銃弾の数は企業側からの方が圧倒的に多い。

それでもなお、ノモトたち傭兵部隊は射撃戦の主導権を握り続けていた。

撃ち勝っていると評してもいい。

その理由は、大きく分けてふたつあった。

ひとつは装備。

A F Sによる動力補助を受けられる傭兵たちは、企業側の歩兵部隊と比較してその使用火器が段違いに強力であった。

それはもっぱら有効射程の差となつて、数の面では圧倒的な企業側戦力に容易な接近を許さない原動力となつていた。

もうひとつは地形である。

傭兵たちは荒れた岩肌が点在する斜面に塹壕を掘って籠もり、遮蔽物のほとんどない砂漠に散兵線を張る企業部隊と対峙している。身を隠すもののない平原を敵の銃火に晒されながら突っ切るなど、およそ正気の沙汰とは思えぬ自殺行為であった。

勇気の限界を超えてさえいる。

いかに巨大な権力を持つ企業とはいえ、個々の兵士に「死」を命じることなど出来はしないのだ。

このふたつの効果が相乗することで、ノモトたちは企業側による前進を物理的に阻んでいた。

ならば企業側は早々にこの地を迂回すればいいではないか、と思われる筋もあるが、現実にはそれも不可能だった。

傭兵たちが展開する斜面には、一本の整備された街道が通っていた。

この道路を使用しない限り、一般の走輪車両は傭兵たちが陣取る斜面を越えることが難しかったのである。

無論、無限軌道を使用する走軌車両であればここを走破することは十分に可能であるが、随伴歩兵をとまわずに突出した戦闘車両がどのような運命をたどるのかは、既にノモトたちが実例をもつて証明している。

斜面を乗り越えるに必要な道路は他にもあるにはあるのだが、今さらその道筋を選ぶのは余りに時間が掛かり過ぎる選択だった。

結局のところ企業側は正面から火力戦を仕掛ける他に策がなく、傭兵たちも兵力の不足からそれを受けて立つしかなかった。

「畜生。奴ら、撃つても撃つても湧き出てきやがる！」

A F Sの火器管制装置と連動した照準環に目標を捉えながら、コワルスキーが吐き捨てた。

連続する防御砲火により、企業側は相当の被害を出しているはずだった。

おそらく、小隊を編成するにたる人員が死傷し後送されていることだろう。

にもかかわらず、彼らは一向に退く気配を見せてはいない。

「あと二時間だ」

こちらも同様に機関銃の引き金を絞りながらノモトが告げた。

「自分たちがそれだけの間粘れば、避難民たちは解放戦線の拠点に逃げ込める！ 頑張ろう」

計算違いだ、とノモトは唇を噛み締めた。

彼は、火力の応酬で甚大な被害を与えてさえやれば決して士気の高いとは言えない企業側の兵士はこれ以上の攻撃を諦めて後退するに違いない、と踏んでいた。

ところがどうだ。

現実にはノモトの予想を大きく裏切っている。

まずい戦況だった。

こちらとて、無限に弾薬を持つ訳ではない。

「へ、二時間ねえ」

楽しげにやけたエンリケが、おもむろに対戦車誘導弾を担ぎ

出した。

「ま、その時に俺たちが生きていられたら御の字ってところかな」

発射炎とともに誘導弾が放たれた。

目標は正面の敵歩兵を支援する歩兵戦闘車。

遠隔操作出来る小型の砲塔部に三〇mm級の機関砲と多用誘導弾の発射機を備え、今のノモトたちにとってはかなりの脅威であった。

細いワイヤーを経由して有線誘導されたそれは歩兵戦闘車の正面部分、それも砲塔基部を直撃し、その戦闘力を一気に奪い去った。戦果を確認し、エンリケが派手にガッツポーズを形作る。

敵兵に動揺が走ったのを傭兵たちは目の当たりにした。いける。

彼らは、半ば確信した。

このまま敵を阻止し続ければ、少なくとも避難民の脱出という作戦目的は達成出来る。

俺たちが生き残れるかはまた別の問題だが、それはそれ、その時になってから考えればいい。

そんな彼らに冷や水を浴びせたのは、直後に後方から現れた悪夢のごとき存在だった。

「ACが来た！」

モンゴメリが叫んだ。

「『積み木人形』二八機。莫迦な。なんて数だ！」

「積み木人形」とは、「GA」社製ノーマルに付けられた渾名だった。

洗練さの欠片もない無骨な外見を持つそれは、八四mm低圧砲を主武装として右腕部マニピュレータに携帯する。

主力戦闘車と比較すると装甲防御は大したものではないが、発揮出来る機動力には文字どおり雲泥の差があった。

それが二八機。

信じられない。大隊規模に近い数じゃないか！

「まずい！」

ノモトの全身に冷や汗が流れる。

「奴ら、自分たちの頭を越えていくつもりだ」

そのとおりだった。

おそらくは周辺の各部隊から掻き集めてきたと思われるそれらのノーマルは、小癩な傭兵たちの存在を無視して後方へと進出。

彼ら在必死で守ろうとしていた存在を捕捉し、文字どおり殲滅するつもりなのだ。

企業側の指揮官が選択した、それが最終的な回答であった。

車両の機動力で不足ならACがある。

そもそもACとは、そうした目的のために開発された兵器ではないか！

歩兵部隊の後方から滑るように進出してきた二八機のノーマルは、傭兵部隊が潜んでいる塹壕線に向けて八四mm低圧砲を乱射しながら次々と跳躍した。

立て続けに起こる爆発によって制圧され頭を押さえ付けられた傭兵たちは、それを阻止すべきいかなる手段をも実行することが叶わなかった。

齒軋りしながらノモトは、自分たちの頭上を飛び越えてゆくノーマルの群れをただ見上げるしかなかった。

己の無力が恨めしい。

彼の同僚たちも、まったく同じ心境であったろう。

視線が力を持つものならば、それをもって一機でも多くの敵を薙ぎ倒したいとさえ彼は思っていた。

その時であった。

先頭を跳ぶ一機のノーマルが、突如何かに衝突したかのごとく弾け飛んだ。

それは傭兵たちの潜む塹壕付近に背中から墜落し、たちまち紅蓮の炎を吹き上げる。



傍目にも大破したそのノーマルは後続する複数の僚機を衝撃で巻き込み、それらは互いに激しく絡み合いながら斜面を転がり落ちていった。

「なんだ？ 何が起こった？」

傭兵たちが一斉に空を見上げた。

その彼らの視界を巨大な影が猛然とよぎる。

天空に輝く太陽を背に飛来する銅色の魔神。

それは、両手に持った巨大な銃から死と破壊とを浴びせ掛けながら砂漠を駆ける竜巻のごとくに企業部隊へと襲い掛かった。

凄まじい砲火の嵐に遭遇し、またたく間に、数台のノーマルが理不尽な沈黙を強いられる。

無数の八四mm砲弾が魔神目掛けて発射された。

だが、ノーマルからの反撃はその魔神に対し痛痒をも感じさせることが出来ない。

あたかも虚ろな屋気楼に石を投げ入れた時のように、放たれた砲弾は魔神の実体を捉えることなくその影を擦り抜けていった。

「……アマジグだ」

惚けたようにエンリケがつぶやいた。

「あの野郎……結局来てくれたのか！ 愛しているぜ。畜生！」

アマジグ、アマジグ。

高揚した傭兵たちは、眼前で一方向的な戦いを繰り広げている銅色の魔神 「マグリブ解放戦線」が誇る「英雄」、イレギュラー・リンクス、アマジグとその乗機である「バルバロイ」と名付けられたネクストに向け喉が枯れんばかりの歓声を張りあげた。

アマジグ、アマジグ。

我らが英雄！

高々と彼らの頭上に掲げられた銃器が、強い日差しを反射して鈍い輝きを放っていた。

## 孤狼（2）

脳裏に映った目標に“印象する”<sup>イメージ</sup>ことで照準環を重ねる。

ネクストの頭部に設けられた統合制御体が、搭乗者の脳波をつ<sup>バイロケット</sup>ぶさに感じ取り、それを火器管制装置へとダイレクトに送り込んだ。

電子頭脳に指示を与えられた火器管制装置が、高感度センサーの補助を受けながら目標の追跡を開始する。

そんな一連の作業を行うにあたり自身の手先を活用しないことへの違和感を覚えたのも、今となっては昔の話だ。

一度熟練さえしてしまえば、肉体に掛かる加速度に操作が直接左右されないで済むAMSはなかなか便利な代物だと思えてしまう。照準環が赤く点灯。目標の捕捉が完了したことをリンクスに伝える。

同時に針で突いたような鋭い痛みが額の奥を襲った。

激痛という訳ではないが、だからと言って喜んで受け入れられる感覚でもない。

こいつは永遠に慣れることがないな、との確信を覚えつつ、ヴァルターは引き金を絞った。

「ノートウング」の右側背部と両肩とに搭載された投射機から、それぞれ複数の誘導弾が一齐に打ち出される。

白煙をあげて前方の空間に投げ出されたそれらは続けざまに加速用のロケットモーターに点火。

爆発的に増速しながら目標への飛行を開始した。

彼らが向かうのは進路上に展開する戦闘用回転翼機の駐機施設だった。

配備されているのは小型の単座機。

基本的には、偵察と観測とを主任務とする安価な機体である。

それゆえ、それらは軽快な飛行性能を与えられてはいても、積載量の関係から大した火力を持っていない。

小振りな機体に装備出来るのは二〇mm級の機関砲および外部搭載型の無誘導奮進弾が関の山だった。

とはいえ、それなりの数をそろえた航空戦力は、後続する地上部隊にとつて十分以上の脅威である。

ここで排除しておくに越したことはなかった。

少なくとも、ヴァルターはそう判断した。

赤外線シーカーに標的を捕らえながら高速で突進した三〇発を超える誘導弾は、数秒の後に目標付近へ到達。

その上空から流星雨のごとくに降り注ぎ、立て続けにその信管を作動させた。

爆炎がコンクリートで舗装された駐機場表面を覆いつくし、今まさに離陸しようとしていた回転翼機群をたちまちその中へと巻き込んだ。

機体の損傷率は八割を超えた。

駐機してあった回転翼機が延焼したものの、地表では複数の火災が発生している。

もともと本格的な戦闘を考慮した設計を施されていない小型の回転翼機である。

装甲車両への攻撃すら視野に入れた多目的誘導弾の炸裂に機体構造が耐えられる訳もない。

結果、被弾した全機がほぼ完全に爆砕され、原型を留めぬスクラップと化した。

搭乗者の脱出は視認出来なかった。

幾多の生命が業火の中で強制的な終焉を与えられたことだろう。だがヴァルターはその現実を一顧だにせず、乗機「ノートウング」を直進させる。

辛うじて離陸に成功した回転翼機から橙色の火線が伸びた。

二〇mm級の機関砲弾だ。

当たりどころ次第では戦車の上面装甲をも貫通する焼夷徹甲弾が、雹のように「ノートウング」の頭上へ降り注ぐ。

仲間の仇。

そう叫んでいきどおる者も搭乗者の中にはいたであろう。

ヴァルターは、それらすべてを一切無視した。

彼は知っていた。

回転翼機の搭乗員たちが浴びせ掛ける砲弾も憎悪も、現実という分厚い障壁の前にはまったくの無力であるということ。

かすかに憐憫の情が頭をよぎる。

かつて自分たちを蹂躪したネクストに乗っていた奴も、同様の感情を抱いたのだろうか。

ヴァルターは、その感情を明確な“エラー”と判断して、心の片隅に追いやった。

今の自分の存在が、単なる人斬り包丁に過ぎぬのだということ を改めて自認する。

他者の手で用いられる道具という立場に身を置く以上、人間らしい感情に浸る贅沢を彼は許されてなどいない。

ヴァルターはいまだ戦意を失っていない回転翼機群をレーザーライフルの連射で一掃すると、背部推進器の出力を上げ目の前に横たわる広い運河を一気に押し渡った。

彼が達成すべき目的は、その先にこそ存在した。

独立計画都市「グリフォン」

オーストラリア大陸内陸部に建築されたこの近代的な大都市は、現在市井の人々が居住しうる街ではなくなっていた。

「国家解体戦争」以前、多国籍企業の音頭により計画された「グリフォン」は、しかしそれゆえに武装テロリストたちから恰好の攻撃対象と見なされてしまった。

ことに当時オーストラリア政府の中枢にすら食い込んでいた環境保護団体系のテロリストは、世界中に散らばる彼らの支援者から莫大な資金を得る口実として「グリフォン」計画を執拗に叩き、自分たちでも気付かないうちにその行動を過激化させていった。

爆発物を使用した大規模なテロが頻発し、作業員たちに次々と死傷者が出た。

その結果、完成間近だったインフラ設備に大打撃を受けた「グリフォン」から多国籍企業の多くが手を引き、テロリストたちは勝利の凱歌を高らかに歌った。

内々に彼らの後ろ盾となっていたオーストラリア政府与党、すなわち環境保護団体系の右翼政党も同様な反応を隠すことなく世界に示した。

もつとも、それを切欠にしてオーストラリアは「環境テロリストに牛耳られた国」という汚名を被り、以降経済的に困窮していく羽目に陥るのではあったが。

開発を放棄されほとんど廃墟のような佇まいを見せていた「グリフォン」にふたたび脚光が当てられたのは、「国家解体戦争」が終結してしばらく経ってからのことであった。

各国政府を打倒し新しく世界の支配者となった「企業連合体」<sup>バックス</sup>が社会資本の拡大を積極的に目論見、その一環として打ち棄てられた「グリフォン」に熱い視線を向けたからである。

数年越しの折衝により漸くその再開発権を獲得した「ビッグ・シックス」の一角である「GA」社は、早速自社の資本と人員とを内陸に広がるこの廃都市へと派遣した。

だがそこで彼らが目の当たりにしたのは、既に武装テロリストたちの要塞と化した感のあるかつての独立計画都市の姿であった。

いかなる調達方法を用いたものか各種の近代兵器で武装したテロリストたちは、「GA」社が派遣した討伐部隊をすら一時撃退せしめるほどの勢力を有していた。

彼らを無力化するために「GA」社内部ではさまざまな計画が検討された。

航空機による空爆は都市機能に多大な損害を与える可能性が大きい割に戦果が不確実であるとされ、真つ先に選択から外された。

地上戦力でもって直接彼らを排除するという選択も、必要な派

遣兵力と手持ちの軍事力が被る損害を考えるといささか費用対効果が悪いものと見なされた。

もちろん、テロリストとの平和的話し合いなどは言語道断だと一蹴された。

結局「GA」社は、武装テロリストを撃滅するためにネクストの投入を決定した。

軍事的な観点で見るにそれがもつとも効率のいい選択であると同社上層部が最終判断を下したのである。

ただし、貴重な自社ネクストを投入することはしない。

彼らは「グリフォン」に送り込むべき戦力を社外に、いわゆる「アナトリアの傭兵」に求めた。

冷徹な資本の論理に忠実である大企業に似つかわしい、感情的なものを一切排除した決断だった。

確かに先日「アナトリアの傭兵」計画を実力をもって妨害しようとした「GA」社ではあったが、この度の依頼に関しては極めて真摯な態度で交渉に臨んできた。

これを機会にアナトリアとの関係改善を図りたいとの意志を言下に込めた彼らの物言いに、この人にしては珍しくメールもふたつ返事で了承の意を表した。

礼には礼を、という訳ではもちろんない。

エミールがこの依頼を受けた理由は、純粹にそれがビジネスとして魅力的な提案であったからに他ならない。

対外交渉に感情論を持ち込まないという最低原則を、アナトリアの側もまた確実に持ち合わせていた。

それゆえ計画は感情のしこりを見せず速やかに進行し、両者の間で契約が取り交わされた翌週の初めには「グリフォン」掃討に必要な物資の準備はすべて完了していた。

同地を守る防御の要は、都合三機が確認されている「メリエス」社製の高出力レーザー自走砲、「プロキオン」の存在だった。

大型の輸送車両に長大な砲身を備え付けたかのごとき外見を有

する「プロキオン」はほとんど防御力らしいものを持たない脆弱な兵器であるが、それが放つ高出力自由電子レーザービームは距離四〇〇〇mで平均的な主力戦闘車の正面装甲を容易に貫通しうるものとされていた。

無論、ノーマル程度が身にまとう装甲防御など鋭刃を前にした紙切れに等しい。

従来型の兵器を主力とした部隊では、搭載火器の有効射程内に接近するよりも早くその大半が撃破されてしまうものと予想された。ゆえに作戦は、いかにこの強力なレーザー自走砲を無力化するかに絞られた。

当初は、ネクストを奇襲的に市街地へと空挺降下させることで指揮系統が貧弱な武装テロリストたちの混乱を誘い、迎撃体勢の整っていない「プロキオン」を各個に撃破する方向で調整がなされていた。

しかし、この作戦に参加当事者であるヴァルターが真つ向から異議を唱えた。

ネクスト戦力を奇襲目的に投入するというその計画自体には大筋で同意しながら、彼は作戦の基本線について次のように主張した。目標への奇襲を企てるなら、こちらの行動もそれなりに隠匿する必要がある。

当然、攻撃目標への偵察行動自体をある程度は自粛しなければならぬだろう。

これでは目標が分散して配置されていた場合、作戦実施時にこれらの位置を特定することが極めて難しくなるのは明白だ。

もちろん、ネクストの戦闘力は予想される敵戦力を圧倒しているがゆえ、敵が踏みとどまり徹底抗戦を試みってくれるのであれば作戦の成功自体に疑う余地はない。

しかしその絶対的な保証はどこにもなく、下手にこちら側の戦力的な優勢が知れ渡れば、残存兵力はあえて市街地を捨て自戦力の温存を図るかもしれない。

仮にテロリストどもがそうした選択肢を採用した場合、もう一度その戦力を粉砕するために軍事力を行使するか、さもなければせっかく占領した「グリフォン」にそれなりの守備隊を配置しなくてはならないだろう。

そうしなくては、体勢を立て直した彼らの手で街を奪還されかねないからだ。

「では、どうすればいいと考えるのだね？」

作戦算定に派遣された「GA」社の軍事専門家にそう問われたヴァルターは、「作戦はあえて正面からの強襲を滲ませ迎撃のために集結した敵戦力を一撃で粉砕すべきです」と、答えた。

軍事常識的には「敵戦力の集中を許さず各個撃破すべき」という戦術原則に反する回答である。

当たり前だが、専門家たちは彼の意見に反対した。

危険過ぎる。それが彼らの統一した見解だった。

「プロキオン」の集団とネクストとの交戦記録は、いまだ存在してはいない。

しかし、その強力な自由電子レーザービームがPAを展開した目標に対しても十分有効であるという実験結果は既に「メリエス」社より一般公表され、衆目の知るところとなっていた。

だが、ヴァルターは一步も退くことなく自説を強く押し通した。彼は、自身が考案した対「プロキオン」戦術の具体案とその理論的な裏付けについて、実に粘り強く「GA」社側を説得した。

最終的に折れたのは「GA」社側の方だった。

彼らは「大言壮語を放ったからには、なんとしてでもやりとげてもらおうぞ」と言いたげな眼差しをヴァルターに突き刺しつつも、アナトリア側の計画に了承を与えたのだった。

「いささか強引に過ぎる計画だとは思っ」

決定した作戦計画を文書として直接手渡しされたエミールも傍目には不安を隠せない様子であった。

「だが、実際に戦地で戦うリンクス自らが決めた作戦だ。私に



は君を信じるより他に選択肢がない」

頼んだぞ、「ジェットストリーム・ヴァルター」

そう言葉を掛けながら書類に決済の署名を行ったエミールに向け、ヴァルターは自信満々に敬礼をしてみせたという。

作戦計画においてヴァルターが攻撃箇所を選んだのは、市街地の南側に作られた巨大な工場区画であった。

ここには物資輸送路として建設された広大な運河 実質的には細長い人工湖に近い が存在し、「グリフォン」に立て籠もる武装テロリストにとつての水堀として機能していた。

ここを正面攻撃することをヴァルターは主張した。遮蔽物に乏しいため運河を渡ってくる敵戦力を自軍の火力でもつて十分に阻止出来る。

「プロキオン」という切り札を何者かから与えられたテロリストたちは、まずそのように判断するだろう。

そしてそれゆえに、必ず保有戦力の全力を運河の対岸に配置してこちらを待ち構えているに違いない。

それこそが短期決戦を目論んでいるこちら側の思う壺だ と、彼は啞然とする周囲のスタッフに向け言い放ったのだった。

前面に展開した回転翼機部隊を一蹴した「ノートウング」は、内装された推進器を統合制御し水面上を滑るように侵攻した。

その速度は、タービンジェット推進装置の登場以前に空中を支配したプロペラ推進式の軍用機、その戦闘速力に匹敵する。

やはりノーマルなどとは比べものにならない圧倒的なスピードだ。

まさしく期待どおりだった。

「対岸に高エネルギー反応を確認」

はるか頭上に滞空する無人偵察機からの情報を整理して、今回から「ノートウング」の管制官を務めることになったフィオナ・イエルネフェルトがヴァルターに警告を発した。

「間もなく敵の有効射程距離内に突入します。気をつけて」  
彼女の言葉が終わるやいなや、対岸の一角から超新星の煌めきが発生した。

発生点は三カ所。

殺気を感じ一瞬早く機体をひるがえしたヴァルターの脇を、白い彗星のような光の帯が通過していく。

「プロキオン」からの砲撃であった。

高熱源体が大気を焼く耳障りな音が直接耳朵に届いた感がある。本能的な恐怖心が湧き起こった。

当たればいかにネクストであつてもタダでは済まないな。しかし、とヴァルターは続けて自分自身に言い聞かせた。

当たらなければ、どうということはない！

「タリ・ホ目標確認」

短くつぶやき、ヴァルターは乗機のオーバードブースト・システムを起動させた。

「ノートウング」の背部大型推進器が剥き出しになり、蓄積されたコジマ粒子が白熱化して光を発する。

刹那の空白。

「ノートウング」は、その後方に青白い光の帯を引きながら弾丸のごとく疾駆した。

その終末速度は亜音速に近い。

従来型の地上兵器に備えられた火器管制装置にとって、それはまったく対応不可能な速度であつた。

ヴァルターが危険な正面強襲を主張した根拠がここにあつた。

電子機器によって制御され、目標の未来位置を正確に予測する先進的な火器管制装置。

目標までの距離と相対速度とを換算することで、それは己が管理する射撃兵器の命中率を飛躍的に向上させる。

戦車戦において初弾の命中率が九割と言われるのも、高性能な火器管制装置があればこそその話だった。

だが、それが人の手で作られた機械である以上、必ず限界は存在する。

どれほど高価な火器管制装置であっても決して万能ではない。装置が設計どおりの性能を発揮するのは、射撃目標が想定された対象である場合のみだからだ。

最高性能を与えられた主力戦闘車の主砲でさえ、高速で飛来する航空機に砲弾を直撃させることは叶わない。

火器管制装置が、そういった目標物を計算に入れていないがゆえである。

およそ地上兵器のほとんどは、航空機なみの速度で三次元機動を行う目標への射撃を考慮していない。

一部の対空兵器を除き、そんなものを仮想敵とする必要性が皆無であったからだった。

「プロキオン」の火力は確かに絶大であった。

まさしく、従来型の地上兵器では大損害を覚悟しなくては近寄ることも出来ない代物であったろう。

しかし、それはあくまでも車両やノーマルまでの機動性を前提として設計がなされていた。

ネクストの発揮する隔世の機動力に対し、「プロキオン」の火器管制装置はまったくと言っていいほど無力であった。

その攻撃は、ほとんどまぐれ当たり等に等しい一撃を期待する他はなかった。

だが、幸運と確率とを頼りに有効な射撃を実施するには、三機という数は余りにも少な過ぎた。

断続して実施された「プロキオン」による攻撃は、「アナトリアの傭兵」を阻止することはおろか足止めすることさえ叶わなかった。

わずか数秒の間に運河を渡り切った「ノートウング」は、敵陣の右翼側に高速で回り込んだ。

機体を右に旋回させつつ、慣性の力を利用して跳躍する。

「プロキオン」の周囲に展開する多脚型機動砲台、いわゆるM

トレーザー

Tが無数の火線を打ち上げてきた。

「ノートウング」を直接照準してのものではない。弾幕射撃だ。打ち上げ花火のような橙色の曳光弾が周囲の空間をいっぱいに埋めつくした。

その光景は、まるで大地そのものが爆発したかのごとくに感じられる。

しかし、MTが搭載している一〇〇mm未満の中口径砲は「ノートウング」に対し有効打を与えることが出来ないでいた。

古い思想を基に設計された普及型の砲弾がPAの前にはほとんど無力であるという事実を、彼らは自ら経験することで思い知った。はるかに小規模ではあるが、それは「国家解体戦争」の再現とすら言えるなりゆきだ。

「ノートウング」の二五四mm多用途榴弾砲が轟哮した。

密集したMT部隊の中心近くで灼熱の火球が発生し、凄まじい爆風がそれらの多くを文字どおり薙ぎ倒した。

飛び散る破片と高温の熱線とをセットで叩き付けられたMTの多くが一様にその機能を停止させる。

TNTに数倍するだけの熱量を発揮する新型炸薬がもたらした破壊力であった。

戦列を分断された残存兵力も長生きは出来なかった。

恐慌状態に陥ったのか逃げようともせず果敢に立ち向かってきたMTの群れを、ヴァルターは冷静に一機ずつ撃破していった。

戦場からの脱出に成功した機体は一割にも満たない。

ヴァルターは、あえてそれらを無視した。

護衛戦力を根こそぎ粉碎され、今や作戦目標である「プロキオン」はこちらに向けて無防備な側面を晒しているに等しい状態だった。

巨大な自走砲台である「プロキオン」は、いざ懷に飛び込まれた場合、迅速な射角の変更が困難となる。

近接戦闘が発生する状況下での運用を考慮していない自走砲台の、それが宿命であった。

鉄の巨人 「ノートウング」の巨体に威圧された「プロキオン」から、その乗員たちが慌てて逃げ出していく。

まずは妥当な判断であると言えよう。

命を張らねばならないほどの事柄など、この世にはそうそう存在しえないのだから。

ヴァルターは彼らの行動を意に留めることなく、レーザーライフルの照準を「プロキオン」に定め引き金を引いた。

振り返ってみれば、実際の戦闘は極めて短時間で終了していた。それはヴァルターが事前に予想したとおりの展開に終始し、「グリフォン」を占拠していた武装テロリストたちが頼りとしていた機動兵力は完全に消失した。

ただし、彼らの抵抗自体が終焉を迎えた訳では決してない。

「アナトリアの傭兵」に続いて「グリフォン」に入った「GA」社の歩兵部隊は、武装テロリストの残兵を相手取りいまだに小規模な交戦を繰り返していると聞く。

だが、それも長くは続かないだろう。

どう足掻いたところで、孤立した小部隊が既に定まった結末を覆すことなど出来はしないのであるから。

作戦終了後、ヴァルターと「ノートウング」は専用の輸送車両へと帰還。

それを中心として設けられた臨時の駐屯地でさまざまな雑務をこなしたあと、速やかにアナトリアへ戻る手筈になっていた。

主電源を切断しコジマ粒子の散乱を停止した「ノートウング」に大型の梯子車が横付けする。

リンクスであるヴァルターを操縦席から回収するためだ。

分厚いパイロットスーツに身を固めた彼は、梯子車を経由して地上に降り立つやいなや専担の作業員から大量の真水を浴びせ掛け

られた。

任務達成を祝つての行為ではない。

スーツに付着したコジマ粒子の洗浄作業である。

巨大な「ノートウング」も、放水車両を思わせる特殊車両からその全身に樹脂性の液体を吹き付けられていた。

現地でコジマ粒子の除去作業を行うには余りにも大きいネクストの場合、このように機体表面をコーティングした上で専用施設へ運ばれる。

本格的な作業は、アナトリアに戻ってからきちんとした設備と人員の下で綿密に行われるという訳だ。

だが、それは現場の人間にとって余り関係のない話だった。

危険物輸送用の超大型コンテナに搬入されていく愛機を視界の端に捉えながら、ヴァルターはパイロットスーツを私服に着替えるべく設けられた天幕の中へと足を進めた。

天幕の中で着替えたそれは、動きやすさから愛用しているアナトリア警備隊の制服だった。

ただし、上半身に関しては黒いタンクトップの上から上着を肩へと羽織ったのみ。

ラフなスタイルと言うには、余りに過ぎた着崩し方だ。

そのままの恰好でしばし喫煙を楽しむと、今度は簡易司令部とも言える別の天幕へと彼は向かった。

普通に歩くにはいささか距離があつたが、彼は構わず己の両脚を使用した。

一〇分程度は歩いたであろうか。

雑伎団のそれを思わせる大きな天幕の入り口をヴァルターは潜った。

司令部などと言つてはみたものの、天幕の中にいた人物はさほど多くない。

コロニー代表の名代として随行してきたセレン・ヘイズ、霞スミカと「ノートウング」管制官のフィオナ、後は彼女の補佐役を務

めるスタッフを含めて数名という小世帯だ。

「ヴァルター・ノボトニー、ただいま帰還しました」

中に足を踏み入れると同時にヴァルターは大袈裟な態度で拳手の礼を行い、目の前にいる者たちに向けて短く告げた。

型どおりの第一声だと言ってもいい。

ただし、言葉とは裏腹にその姿には畏まっている様子など微塵もうかがえなかった。

彼の右手は確かに額の横、軍隊式の敬礼位置にきっちり付けられているのだが、左手はズボンのポケットに突っ込まれたままだ。

むしろ不遜きわまる態度に映る。

「ご苦労さま」

面々を代表してスミカが応じた。

お堅い人間であれば、対面した他者にこんな姿勢で臨まれた場合、一様に表情を曇らせたことであろう。

あるいは激してみせたかもしれない。

しかし、彼女は表情を変えるような素振りを寸分も見せなかった。

もとより礼儀に五月蠅い質ではないのだろうか。

もしくは、そんな些細なことに気を回す無駄を嫌っただけなのかもしれない。

続けざまにスミカは口を開いた。

出てきたものは、ヴァルターの行為に対する賞賛の言葉だった。

「見事な戦果です。感服しました。コロニー代表もお喜びのことでしょう」

なんの感慨も呼ばない事務的な台詞であった。

だが形式的な雰囲気もそこにはない。

おそらく、彼女らしい素直な評価であったに違いない。

少なくとも好意的にその言葉を捉えたヴァルターは、おもむろに右手を降ろした。

ちらりと彼の伴侶へ視線を移す。

フィオナは微笑みを浮かべていた。

異性に対して真つ当な感覚を持つ男であれば、間違いなく魅力的に感じるであろう彼女の“笑顔”

しかし、今のヴァルターには、これまで見慣れた彼女の“笑顔”と目の前にある“それ”とが、どうにもぴたりと重ならない。

妙な陰が感じられるのだった。

天幕の中には白衣を着た初老の人物がいた。

恰幅のいい、口髭を生やした男性である。

司令部のスタッフではない。医師だ。

彼は、リンクスであるヴァルターの体調を管理するため、わざわざアナトリアの外から呼び寄せられた専門医だった。

どこか薄暗いフィオナの表情にあからさまな違和感を覚えつつも、ヴァルターは彼の向かいにある丸椅子に腰を下ろした。

簡単な身体機能の測定と血管注射とを受ける。

まるで自分が実験動物になったようでヴァルターはこうした措置を好まなかったが、自身の身体的負担が軽減されるとあつては澁々ながらも受け入れざるをえなかった。

A M S 適性の低さからリンクスであるヴァルター自身が被る甚大な精神負荷は、彼に正規の訓練と膨大な薬物投与とが施されることで緩やかな減少傾向を見せていた。

少なくとも今の彼は、先の「タイラント」との戦闘後に見せた醜態を再現しないまでには進歩している。

だが、そうは言っても彼が持つA M S 適性が劇的な向上を果たした訳ではない。

あくまでも、それには“前回と比較して”という一文が頭に付くのだ。

A M S と接続し「ノートウング」を三〇分操縦することでヴァルターが受ける肉体的な消耗も、ほぼ“二時間に渡る競泳行為”に匹敵するという判断がなされていた。

定期的な食事以外にこうして血管注射による外部からの栄養補



給を医療関係者から提言されたのは、それが理由であった。

「アナトリアの傭兵」として「ノートウング」に搭乗するようになって以降、ヴァルターが随分と痩せたことを、フィオナは彼の恋人として誰よりも実感していた。

褥の中、指先でそつと触れる素肌の感触も、目に見えて潤いを失ってきているのがわかる。

オンナとして積極的に求められ、数限りなく彼自身と彼の放つ命の源を受け入れてきたフィオナにとって、最愛のオトコが文字どおり身を削る日々を送っている現実が、自分のことのように辛かった。

彼女が「ノートウング」の管制官に名乗りをあげたのは、それが一番の理由であった。

ヴァルターは、決して自分から弱音を吐かないだろう。

そのことを知悉していたフィオナは、それゆえ自ら求めて彼の“仕事”を助けよう、支えようと心に決めたのだった。

それは、浅はかな同情などでは決してなかった。

もともと彼女が持つ技術者としての知識を「ノートウング」の管理面で活用しようと考えていたエミールはその申し出にいささかの困惑をきたしはしたが、結局のところ笑ってそれを了承した。

予感があったのかもしれない。

彼は方々に手をつくして、彼女の選択を強力に後押しすることさえしてくれた。

そして、即席の教習を受けただけの、新米ルキと言つのもおこがましいフィオナであったが、これまで問題なく自身の役割を果たしてきた。

その努力を否定する者は誰もいなかった。

ヴァルター・ノボトニーただひとりを除いては。

ヴァルターが医師の診察を受けている間中、フィオナは無言でその様子を眺めているばかりだった。

ただ漫然と何かを言いたそうに。

しかし、その言葉を口にするのをはばかりように。

彼女がためらっている発言がなんなのかを、ヴァルターは完全に洞察していた。

フィオナは、恋人の身を案じる台詞を吐きたいのだ。

それを阻止しているのは、彼女に色濃く備わった責任感という名の心のくびきであった。

細かいことには余り拘らないヴァルターとは対称的に、フィオナは何事もきっちりさせないと気が済まない性格の持ち主だった。

手順や決まりごとを遵守するのに必要以上の拘りを見せる場面が、ヴァルターの知る限りにおいてですら日に一度では済まなかった。

そして、フィオナは時に感情を先走らせそうになる己を次のような規則で戒めていた。

「職務中の自分は公人であり、私人としての発言は厳に慎まなくてはならない」

確かにそれは賞賛すべき姿勢であるが、いかにも限度と言うべきものがある。

どこまで生真面目なんだか。

肩越しに彼女の様子をつかがいながら、ヴァルターは心底あきれ嘆息した。

耐える女なんて今時流行らないぜ、まったく。

思ったことを素直に口にすれば随分とまあ、楽になるものを。

やれやれ、世話が焼ける。

面倒な女だな、本当に。

もつとも、そういうのは嫌いじゃないがな。

ふと、いたずら心が湧き上がってきた。

内心でほくそ笑みつつ、ヴァルターは自身が求める戦術行動を速やかに開始した。

「そう心配そうな顔をするな、フィオナ」

上着に袖を通しつつ、おもむろにヴァルターは恋人に向かって

口を開いた。

唐突な発言にフィオナは意外そうな顔を見せる。それを確かに認識し、彼はなおも言葉を紡いだ。

「今晚、お前を抱いてやるだけの体力は十分に残っている。まあ、楽しみに待っている」

とんでもない台詞であった。

一瞬で周囲の空気が凍り付く。

天幕の中にいる者すべてにその聴力を疑わせ、次いで双眸をまたたかせるにたる衝撃がそこにはあった。

当事者の片割れであるフィオナなどは、金魚のように口を開閉させながら手に持った書類の束をどさりと床に取り落としたほどだ。そして、その現状に背を向けながらヴァルターは、それがあなたも平凡な日常会話であるかのごとき気軽さでフィオナとの会話を一方的に続行した。

「そうだな、この調子なら最低三回は大丈夫だ。ことによればお前には寝る時間をやれないかもしれないが、その点は覚悟して

」

ぱあん、と何かが衝突する軽快な音が天幕の中に響き渡った。

凍り付いていた場の空気が一気に崩れ落ちる。

フィオナが履いていた靴をヴァルター目掛けて投げつけたのだ。全力で。

驚くほどの速度で空間を切り裂いた彼女の靴は、そのまま「ジエットストリーム・ヴァルター」の右側頭部を直撃。

よほど当たりどころが悪かったのだろうか、彼は被弾箇所を両手で押さえつつその身を屈めて悶絶した。

ヴァルターは預かり知らない事実であったが、意に沿わない相手に履いていた靴を投げつけるのは少女時代のフィオナが持っていた質の悪い癖だった。

躰と教育とがその癖を矯正してから、もう一〇数年は経過する。それが今になって蘇るのであるから、彼女の受けた精神的な衝

撃がいかばかりのものかは押し知れよう。

「な、な、な、なんてことを言うんですかっ！」

激昂してフィオナは叫んだ。

興奮の余り幾度も舌を噛む。

その顔は、熟した林檎、あるいはゆであがったある種の海洋生物に近い色彩へと華麗に変化を遂げていた。

高精度なセンサーで今の彼女を映したなら、その頭部から立ち上る熱気が観測されたかもしれない。

「こ、こ、こんな人前で、あ、あなたという人は！」

「だからって、ものを投げることはないだろう」

痛みに顔をしかめながら、ヴァルターはゆっくりと振り向いた。そして、実に穏やかな口振りではあるが火に油を注ぐかのとき言葉でもってフィオナを諭す。

「お前だって、アレが嫌いな訳ではなかるうに」

「そ、それとこれとは話が別で……」

そこまで言い放つてから、フィオナは己の発言が持つ意味を悟り、慌てて顔を両手で覆った。

それは、直前に放たれたヴァルターの台詞を彼女自身が遠回しに肯定した内容に他ならないからだった。

地団駄を踏み、今にも泣きそうな声で莫迦莫迦と連呼する。

フィオナからの舌鋒が収まったことを確認したヴァルターは、いそいそと立ち上がり天幕の出口へと向かった。

短時間で戦果を拡大し、その後は速やかに戦場を撤収する。

なるほど、戦術原則には完全に合致している。

流石は歴戦の部隊長と言うべきか。

「フィオナ。約束しよう」

天幕の出口を潜る直前、彼はしばしその足を止め、軽く踵を返してからとどめとなるひと言を真面目腐って彼女に投げた。

「前戯はお前が満足するまでだ」

ふたたび靴が飛んだ。

しかし、この度は素早く身を翻したヴァルターに命中することは叶わず、それは天幕の壁に阻まれて空しく地面へ落下する。

直後、笑い声が天幕の中で爆発した

「仲のいいことだな」

この女性にしては珍しく、感情を無理矢理押し殺したなんとも形容のし難い表情を見せて、スミカが言った。

莫迦にされたとも思ったのだろうか、怒気もあらわにフィオナは振り向いた。

「どこがですか！」

吐き捨てるように彼女は言った。

「あんなことを言う人だとは思いませんでした。幻滅です！  
幻滅しました」

「まあ、そう言うな」

スミカは、そんなフィオナを静かに宥める。

「あれで、あなたに気を遣うての言動なのだ。ここは許してやるべきだろう」

「わたしに“気を遣うて”？ あんな下品な会話がですか？」

「そうだ」

スミカは断言した。

「この数日間、自分がどのような顔をしていたのか、あなたは自覚していなかったようだ。あなたは、こう眉間にしわを作り、難しそうに唇を噛み締めていることが多かったのだぞ。その表情から比べると、今のあなたは一〇〇〇倍も魅力的に映る」

直言されたフィオナは思わず息を飲み、言い返すことも出来ずに黙り込んだ。

あるいは、自分なりに気付く何かがあったのかもしれない。

そんな彼女を目の当たりにして、スミカはまるで担任教師が蕩々と語り掛けるような口振りで最後の一押しを繰れた。

「あれだけの男が自らを道化とすることを厭わないのだ。あなたはむしろ、そのことをこそ光栄に思うべきだろう。率直な話、少

々羨ましく思えたりもする」

似合わない最後のひと言は彼女なりの冗談であつたようだ。

だが、半ば論破された形のフィオナにとつて、それすらも彼女が漏らした本音のひとつに思われてならなかつた。

勢いよく振り上げた拳の下ろし場所を失い、いかなる態度を示せばよいのかわからず小さくなっているフィオナに向けて、この空間内での最年長者である初老の医師が人好きのする満面の笑みを浮かべて軽口を叩いた。

「お嬢さん。十月十日後を楽しみにしておりますよ」

その冗談を真に受けて、ふたたびフィオナは顔中を真っ赤に染めあげた。

「もう、先生まで」

拗ねたように身を振り、彼女は唇を尖らせる。

新たな笑い声が天幕を揺らした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1567z/>

---

ArmorCore4 レイヴン・オブ・アナトリア

2011年12月16日02時51分発行